

MFE

多焦点拡張

다초점확장

創刊準備号 2020.12

もくじ

はじめに	p 2
川村邦光 猫の後ろ姿からゾンビ的状况へ～DJ 風に	p 4
車承棋 「観察＝知＝生成」の実験～ MFE の始まりに寄せて	p 18
古川岳志 「雑誌」への期待～ゆるく束になるために	p 28
尹汝一 MFE の雑性のために	p 36
永岡崇 オリジナリティへのオブセッションと私と雑誌	p 49
竹原明理 『MFE』オンライン集会に参加して	p 53
謝花直美 鉄格子の中の声	p 57
近藤有希子 「未来は明日を生き抜くものに」～異邦人のチョコレートとルワンダからの 退避について	p 64
鄭柚鎮 こころは証明できるだろうか	p 72
日高由貴 自分の居場所を探すこと～6 月 13 日の集会によせて	p 74
沈恬恬 確信の不確実性に向けて～「終わりの感覚」を抱えたまま	p 86
平野克弥 MFE の始まりによせて	p 94
成定洋子 言葉の交錯し合う場	p 97
富山一郎 『始まりの知』から～ハングル版への序	p 98
沈正明 『始まりの知』訳者あとがき	p 104
차승기 ‘관찰=앎=생성’의 실험 –MFE 의 시작에 부쳐	p 111
윤여일 MFE 의 잡성을 위하여	p 121

はじめに

「雑誌を作ろう」という話が初めて出たのは、確か去年の 12 月でした。アカデミズムという制度の中で、書かれた文章に寄り添って議論を始めるより、往々にして「これは論文ではない」「これは研究とは言えない」というような予めの評価が先行してしまいがちな状況を、どうにか変えることはできないだろうかという考えがまずあったと思います。また、この間ずっと続いていた、とりわけ日韓の研究者の間の交流を、一過性のものにしてしまうのではなく、いかに蓄積し、次の議論につなげていけるだろうかという悩みもありました。そこで、今年(2020 年)の 1 月からいろいろ会合を重ね、『MFE』という名前で、10 月に WEB 雑誌として創刊号を出すことを決めました。3 月には京都で富山一郎、川村邦光、古川岳志、沈正明が集まり、また東京からネット電話で永岡崇が加わって、具体的な進め方や編集委員の方々に送る招待状の文案などを練りました。すでに新型コロナウイルスによるパンデミックが始まっていましたが、それがいつまで続くか、どれほどの犠牲をもたらすか先が全く見えない状態の中、鴨川の河原で、いよいよ本格的に雑誌を作れることを 4 人で祝ったことを覚えています。

集まれる人でとりあえず顔をあわせ、雑誌のことを議論しようとしていた当初の予定とは違い、雑誌に関心を持たれたり編集委員になっていただいたりした方々との語り合いは、オンラインで行われることになりました。最初は不安もありましたが、6 月に開かれたオンライン集会では、雑誌を作るということについて、雑誌というメディアはいかなる場になりうるのかについて、そもそも論文とは、研究とは、あるいは査読とは何かについて、パンデミックの中、職場や大学など自分の周りだけでなく、遠くの世界の人たちはどう生活しているかについて、様々な話を聞くことができました。やけに長く感じられた梅雨の季節で、窓の外には激しい雨が休みなく降り続けている中、かなりの時間をかけ、一人一人の話を聞き、雑誌は本当に作られるべきなのだ、こうした一つ一つの問題意識や疑問や様々な気持ちを集め、つなげ、また広げてい

ける「暖炉」のような場所をずっと必要としていたのだ、ということを改めて確信することができました。

それから、オンライン集会に参加していただいた方々に、準備号のための原稿を募集する手紙を出しました。そこでは、まずこのメディアに何を期待するかについて書いていただくようお願いしました。はじめは集会での議論に基づいて編集方針を練り上げていこうとしましたが、予め決められた方針のもとに集まるのではなく、それぞれが持ち寄るものから雑誌の可能性を探っていこうと考えたためです。また、6月の集会についての文章も募りました。この集会もまた、雑誌や研究について、また今の状況について、それぞれが何を感じ、考えているかを持ち寄る場であったからです。今回の準備号には、こうして集まった文章を載せています。締め切りまでの時間が1ヶ月半しか残ってない時点での原稿募集でしたが、文章を寄せてくださった方々に感謝いたします。また、これらの文章を今から読んでくださる、つまり紙に書かれた文章から始まる議論に参加してくださる方々にも、感謝の気持ちを送ります。

巻末には、11月に韓国で訳書が出された富山一郎『始まりの知』に付されたハングル版序文と訳者あとがきを一緒に載せました。二つの文章は、『MFE』の構想から始まり、予定が少しずつ遅れていく中でも、どういう雑誌を、どうやって作っていくかについて少しずつ会話を交わしていく中で、議論や、研究や、書かれた文章や、雑誌について、また今を生きるということについて考えを巡らせながら書かれたものであるからです。また、今回の準備号は韓国語訳をつけることはできませんでしたが、これからの『MFE』は、議論の場をより広げ、場と場をつなげていくために、まず日本語とハングルによる翻訳を考えています。それは、ホームページにある「MFE(多焦点拡張)について」にも書かれているように、『MFE』の創刊に向かう流れの中で、韓国で展開してきた動きや人との出会いが具体的にかかわっているからです。ハングルで出された『始まりの知』に寄せた二つの文章を準備号に載せるのも、そういった動きと軌を一にしていることと思います。

『MFE』準備号 編集委員 富山一郎・古川岳志・沈正明

猫の後ろ姿からゾンビ的状况へ ——DJ 風に

川村邦光

文筆業

猫の後ろ姿

夜更かしの皆さん、お元気ですか。コーヒーでも飲みながら、しばらくたわいもない話に付き合ってください。バックミュージックはジャニス・ジョプリンです。1943 年に生まれ、1970 年に亡くなっています。私が大学に入った年です。もう 50 年、半世紀も経っています。70 年代前半、LP で聴いたはずです。これから流すのは、Janis Joplin 18 essential songs(『ジャニス・ジョプリン 18 の祈りーベスト・オブ・ジャニス』)1995 年、ソニー発売の CD です。

まずはちょうど猫がいるので、猫の話からはじめて見ましょう。猫の後ろ姿はきわめて哀愁に満ちています。当然、顔は見えないのですが、なにかしら遠くをじっと見つめている、見通している風なのです。あるいは、なにごとかを待っているかもしれません。独り背中と尻尾を向けて、世間、もしくはこの世を見透かしている、予期していると言ってもいいでしょう。それは「孤高の哀愁のなかで、とでも言えそうです。高橋和巳のエッセイ集『孤立の憂愁の中で』(筑摩書房、1969 年)というタイトルを想起させます。ロバート・A・ハインラインの『夏への扉』

(The Door into Summer)[ハヤカワ文庫、1979 年]の表紙を思い起こす人もいるでしょう。

とはいえ、猫は哀愁を懐いているわけでも、孤高のたたずまいといったポーズをとっているわけでもありません。猫になにかしら見透かされている、猫が世間に背を向けて、なにごとかのために待機していると感じている一方で、この世や世間のなかで後ろ姿を見ることのできない、私(たち)がどうしようにもなくいるだけです。

藤田省三の後ろ姿論

藤田省三は「後ろ姿は大事である」(「後ろ姿について 藤田省三著作集まえがき」『藤田省三著作集』付録、みすず書房、1997 年)と記しています。誰しも考えさせられるでしょう。前姿でも鏡なりに映さなければ全体は見えませんが、顔以外は見えます。後ろ姿は振り返っても見えません。前姿が現在(さらに未来への兆し)とするなら、後ろ姿は貼り付いている、あるいは背負ってきている、過去としか言えようがないなものかであろうか。前姿には生存のつづくなかで確実に死滅が待ち構えています。後ろ姿はなんだろうか。藤田は先の文につづけて、次のように記しています。

それは取り消せないし、逆行することの出来ない終局であって、自分には見えないものだからである。即ち認識主観の介入を許さない。「見ながら歩き、歩きながら見る」(ベルグソン)ことを視覚的直立歩行動物としての人間は認識の根本形式とせざるを得ないから、自分の

後ろ姿は全き完了形として手も眼も加えることが出来ない。V・ジャンケレヴィッチの言う「時間の客観性(絶対的過去)」を結晶している数少ない例なのである。(同前)

けっこうむずかしいことを言っています。前向きで見て歩き、逆行できないのが人間、完了・絶対的過去を後ろ姿に背負っているのが人間だというわけです。この短文の終わり近くでは「後ろ姿」はかくして今日の在り方を断末魔の段階に至るまで規定する」と記しています。私なら、世間に背を向けるのが後姿だと言いそうです。また、屁理屈をいうと、後ずさりするのは人ではないことかと思ってしまう。

後ろを見ないで少しでも歩く、`一歩前進、二歩後退、二歩くらいなら、誰でもできます。それでも背中を見せてであれ、後退しつづけるのは意外とむずかしい。覚悟がいる、少しは気合を籠めなければなりません。覚悟がないと、`転進、などと言い繕って恥じるところがないばかりではなく、自責の念だけが鬱積させてやまないのです。起死回生なんか、ありえない。敵であれ、なんであれ、背、後ろ姿を見せるのは恥であり、屈辱だと、歴史は教えてきました。逃亡、逃走、敗走、敵前逃亡は無様であれ、生き残る方途だ、これもまた、歴史の教えるところだろう。

脆弱な歩く身体

私たちはいつでも後ろ姿を晒し見られながら、また他人の後ろ姿を見ながら歩っています。後ろ姿を見せながら／見られながら歩くこと、そこには猫にはないなにかがありそうだ。『災害ユ

ートピア』のレベッカ・ソルニットは『ウォークス:歩くことの本質史』(A History of Walking)
〔東辻賢治郎訳、左右社、2017 年〕で、こんなことを記しています。

歩行は、身体を本来の限界へふたたび還元する。しなやかで、敏感で、脆弱なものへ。一方
で、道具が身体を拡張するように歩行は世界へ延びてゆく。歩行の拡張が道をつくる。歩く
ために確保された場所はその追求のモニュメントであり、歩くことは世界のなかに居るだけ
でなく、世界をつくりだすひとつの方法なのだ。(中略)歩くことが、事物の制作や労働と同
じように備えている決定的な重要性とは、身体と精神によって世界へ参画することであり、
身体を通じて世界を知り、世界を通じて身体を知ることなのだ。

こういう基本的なことを私たちは日々の生活で忘れがちでしょう。歩く身体は「しなやかで、
敏感で、脆弱なもの」と意識されるとともに、世界へと開かれていく。後ろ姿はさしずめ辿って
きた道、またモニュメントということになろうか。それは時には埋没したり、消滅したり、破壊さ
れたりすることもある(現在、レイシズムやコロニアリズムの道もあり、それを記念し顕彰して、
表象された銅像が破壊・遺棄されています)。

ただ残るのは、前姿と後ろ姿を合わせ持った「しなやかで、敏感で、脆弱な」身体であるかも
しれません。だが、後ろ姿に集約されている、その弱さ、脆弱さは忌み嫌われます。それを見せ
ないように管理し、隠蔽するのが、世間の通念、ひいては生政治ということになるのでしょうか。
この弱さや脆さは「本来の限界」、さらには可能性として、猫の後ろ姿のように、未知の兆しを
待ち構えているでしょう。

生の脆弱な状況

唐突だが、身体の脆さについて論及している、バトラーの『生のあやうさ：哀悼と暴力の政治学』(Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence) [本橋哲也訳、以文社、2007 年]を引いてみましょう。

私たち自身が傷つきうる存在であること、他者も傷つきうること、われわれは誰かの意思のままに死にさらされる存在であること、そうしたことのすべてが恐怖と悲しみの原因となる。だがそれほど確かでないのは、傷つきやすさ(ヴァルネラビリティ)[=可傷性]や喪失の体験を、軍事力に訴える暴力や報復にすぐに結びつけるべきか、という問いだろう。ほかに道はないのか？(中略)自分とともに他人も傷つく存在であること、そこからもたらされる省察のひとつに、あちら側にも自分が現在知らない、将来もけっして知りえないかもしれない他者が存在しており、その他者たちに私たち自身の生が依存しているということがある。誰か見知らぬ他者に私たちの生が根本的に依存していること、この条件は自分の意思で簡単に葬りさることなどできない。(中略)見られることによって、聞かれることによって、人生の価値が、あらゆる人生の価値がより繊細に感得されるべき「顔」が存在する。つまり、哀悼が政治の目的であるということではなくて、喪の能力を欠けば、暴力に抗するために必要な生に対する鋭い感覚も私たちから失われてしまう、ということではないのか。そして喪が暴力を通してしか解決できないと信じる人がいるとしても、暴力がより多くの喪失をもたらすことは明らかだろう。生の脆弱な状況に耳を傾けることをしなければ、そこからは終わりのない政治的怒りという渇いた悲しみだけが導かれる。

生の傷つきやすさ、脆弱さ、それは生き物すべてが共有し、互いの生は互いに依存している。これもまた、基本的なことなのですが、それだからこそ、断絶・隔絶するために、往々にして生体・肉体に対する、軍事力による暴力、攻撃や報復を連鎖させています。バトラーの原文を見ているのですが、mourning が哀悼と喪に訳し分けられているのだろうか。これは悲嘆とも訳されます。フロイトの Trauer und Melancholie は「喪とメランコリー」と訳されています。英訳では“Mourning and Melancholia”です。最近、ピーター・ホーマンズ編『象徴的な死：世紀の終わりに際する、悲嘆と記憶の曖昧さ』（Peter Homans, ed., Symbolic Loss: The Ambiguity of Mourning and Memory at Century's End, University Press of Virginia, 2000.）の「序文」（『文化／批評』春季臨時増刊号、2010 年）を訳してみたのですが、mourning の訳にかなり悩んでしまいました。悲嘆／喪と併記したり、文脈に応じて、訳し分けしたりしましたが、おおよそ悲嘆の訳語で通じるようです。

哀悼や悲嘆が集団的・集合的な感情へと凝縮され、政治の目的のために動員されることはよくあります。悲嘆が軍事力による暴力を通してしか解決できないと信じる人や国家もいることも確かであり、集団的・集合的な悲嘆の感情が憎悪に転化して戦争に向かい、戦争を支持し、戦争に進んで動員されていくことになります。だが、それでも悲嘆する感性や力がなければ、武力・暴力に対抗するために必要な「生に対する鋭い感覚」、他の生き物と共有する脆弱さに対する感受性が失われてしまうことになります。「生の脆弱な状況に耳を傾けることをしなければ」と、バトラーは祈念しているかのようです。

この「生の脆弱な状況」を露に表象しているのが、猫であれ、あらゆる生体・肉体の後ろ姿でしょう。全き無防備、後ろ袈裟にやられることがあるかもしれない。それは卑怯だと言われます

が、実戦、またテロリストには無縁です。それはともあれ、後ろ姿は「全き完了形」、「絶対的過去」を表象しているとするなら、それは来るべき死、死の兆しを背負っていると言えるでしょうか。死を包摂した生、それが人というもの、すべての生き物であるという、至極ありきたりの言い方になってしまいますが、そうだろう。だが、それは日常ではほとんど意識されない。意識しては、いわば後ろ向きの生き方になるでしょう。しかし、そのようなあり様がごくまれに日常化されることもあるようです。

ゾンビとイエス

こうした生と死、生体と死体の曖昧な存在、それはハイチ発祥のブードゥーのゾンビでしょう。中国にはキョンシーもいます。日本では似たようなものとして、古代に中国道教の尸(し)解(かい)(仙)が伝わっていますが、それは肉体を残すことはありません。なんでもいいのですが、ここではゾンビで代表させておきましょう。死んだはずだが、肉体だけが甦ったとされます。魂、意識や精神はないとされます。だが、それが残っているとされることもあります。死者を甦らせた呪術師がゾンビを操ることもあります。ゾンビは生者を襲い食らいつく。そうすると、生者はゾンビになります。このあたりがおおよそそのゾンビの生態でしょう。このように生態といった言葉を用いますと、生、生きているとはどのようなことかと、やや悩んでしまいます。

話はゾンビに移っていきました。ハローウィンが10月31日ですが、大阪のUSJでは早々とゾンビたちが徘徊しています。マイケル・ジャクソンが複製されて群れなし、墓場から甦ってきたかのようです。怖いもの見たさなのでしょうか、どうしたわけか、ゾンビは好奇心を満たしているようです。こんなことを想っていると、ベンヤミンにあやかって、`複製技術時代のゾ

ンビ、といったテーマが浮んできてしまいます。それはさておき、これから、ゾンビについて、まじめに話してみようと思います。

ゾンビとは甦った死者、亡霊ではない、死者ではあるが、生者のように振る舞う。だが、感情や知性、理性はない、霊魂なるものもない、と一応されています。獣ようだが、そうではない。獣を擬人化する誤り、あるいは悪弊を批判する存在と言えるかもしれません。人であることは確かなのだが、死者と生者の境目、もしくは中間にいるとも言えません。やはり死者です。死者の甦り、属性は死者に限りなく近いのだが、生者からはかなり遠い。死体の死者としての甦りと言えます。

ゾンビの根本的な要件とは、死体が動くということです。死から生への移行ではない。また、死体から生体への移行とも言えません。だが、死体に生体を重ねあわせた、重層化させた肉体と言えそうです。ここではゾンビの定義をしません。おおよその私のゾンビ・イメージで話を進めていきますので、リスナー、もしくは読者各自のゾンビ・イメージで読んでほしい。死んだ肉体の甦り、生前とは全く同じではありませんが、やはり再生です。このあたりで、皆さんはかのイエス・キリストを思い浮かべるでしょう。死者からの甦り、復活、その最も著名な代表と言えば、誰もがよく知る、イエス・キリストです。イエスは死して3日目に甦り、40 日間ほど弟子のもとなどをさまよい、昇天したと伝えられます。

イエスはゾンビの元祖、少なくともゾンビ的存在だと言うことができるかもしれません。これはアジア的、もしくは仏教的な感性からは、なかなか理解できないないと常々思ってきました。転生、生まれ変わりというのは解る気がします。だが、キリスト教の根幹、イエスの死者からの甦り、復活はマリアの懐胎とともに解りにくい。苦悶を露にし、痩せさらばえた貧相な十字架上のイエスの肉体が、マゾヒズムの極致のように、どういうわけか崇められてきました。奇妙なこ

とです。とはいえ、2000 年近く、それなりに信じられてきたことも事実なのであり、むげに否定できません。少しずらした解釈によって、新たな地平が切り拓かれることもあるかもしれないことに、しばし期待してください。

神出鬼没のイエス

最初にイエスを目撃したのがマグダラのマリア。イエスの葬られた岩窟の墓に行くと、遺骸がない。泣きながら墓のなかを覗くと、二人の御使が坐っています。マリアが後ろを振り向くと、男が立っていたが、イエスだとは気づかなかった。「マリアよ」と呼びかけられて、初めて気づいています〔ヨハネ伝 20:16〕。イエスとマグダラのマリアの出会いは、『我に触れるな(ノリ・メ・タングレ)』の題で、フラ・アンジェリコ(1445 年頃:サン・マルコ修道院蔵)〔西岡文彦『名画で見る聖書の世界<新約篇>』講談社文庫、2000 年〕やティツィアーノ(1511 年:ロンドン、ナショナル・ギャラリー)〔同前〕が描いています。

マリアはイエスの声を聴いて解ったようです。「我に触れるな」とイエスに言われます。「私は、父のみもとに上っていない」〔ヨハネ伝 20:17〕からです。仏教的に言えば、まだ成仏していない、穢れた死者また死霊のままだということになるでしょう。ともあれ、イエスは生者と死者の中間にある存在です。あるいは、ゾンビでもあると言えます。ゾンビなら、触れたなら、感染してゾンビになるということでしょうか。

「ルカ伝」には、エマオに現われたイエスについて記しています。二人の弟子がエルサレムからエマオへ向かっている途上で、ひとりの旅人と一緒になります。「キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」などと教えられても、その旅人がイエスだとは気づきません。夕暮れになり、エマオに着いて、一緒に食卓を囲むと、その男はパンを取っ

て裂き、二人に渡すと、ようやくイエスだと気づいたのです。「ルカ伝」では「一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった」とあります。だが、瞬く間にイエスの姿はかき消えてしまうのです〔ルカ伝 24:13-31〕。

エマオでの出会いは、名画の誉れ高い、カラヴァッジョの『エマオの晩餐』(1597 年:ロンドン、ナショナル・ギャラリー蔵)〔西岡:前掲書〕、レンブラントの『エマオの晩餐』(1648 年:ルーヴル美術館蔵)〔同前〕があります。これらには当然、甦りのイエスの顔が描かれています。ただ、カラヴァッジョの『エマオの晩餐』では、イエスは髭面ではなく、若々しい顔立ちになっています。妖怪変化(へんげ)・変化自在のイエスでもあるのです。妖怪的でもあるが、やはりゾンビ的な特性を濃厚にしています。復活したイエスは弟子や縁故のある者のもとをうろつき、付きまといまふ。だが、イエスだとは解りません。

聖痕とパン

二人の弟子がエルサレムに帰ると、十一使徒とその仲間が集まっていました。二人はエマオでイエスを見たことを話していると、「イエスが彼らの中にお立ちになった」。突然、イエスが姿を現わした。神出鬼没です。「恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った」。恐怖と驚愕、当然のことでしょう。そこでイエスは言います、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起こすのか。私の手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわってみなさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」〔ルカ伝 24:33-39〕と。

イエスは手と足を見せています。手足には磔の時に打たれた釘の跡、すなわち聖痕・スティグマ。そして、「彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここ

に何か食物があるか」と言われた。彼らが焼いた魚に一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた」〔ルカ伝 24:36-43〕。腹を空かしたイエスは焼き魚を弟子たちの前で食べて見せています。証拠を見せるイエスです。ゾンビ的だと言えましょうか。先の二人の弟子のように、甦りを確信できない者たちは多くいました。パンを裂いて渡したり、豊漁の奇蹟を現わしたり、手足や脇腹の傷痕を見せたりして、イエスであることを知らせ認めさせています。手足には磔の釘の跡、脇腹には槍で突き刺した跡、聖痕があります。死の直前の姿、肉体で現われているのです。

十二使徒のひとり、トマスはこれまでイエスが現われた場にいなかったため、イエスの甦りを信じません。手の釘の跡や脇腹の傷跡に手を入れて見なければ信じないと言い張っていたのです。弟子たちの集まっていた家のなかに、イエスが入ってきて、トマスに傷跡に手を入れてみよと言います。グロテスクなシーンです。このような傷に触れるという、肉体に対する身体感覚はキリスト教やヨーロッパ独自のものでしょうか。トマスはじかに触って確かめたのでしょうか。マグダラのマリアには触らせなかったが、男の弟子には触らせています。露骨な女性差別・蔑視です。「あなたは私を見たので信じたが、見ないで信ずる者は、幸いである」とイエスは諭します〔ヨハネ伝 20:24-29〕。これは『トモスの不信』と題されて、リューベンス(1615 年頃: アントウエルペン王立美術館蔵)〔西岡:前掲書〕によって描かれています。

パン食・聖餐コミュニケーション

「使徒行伝」には次のように記されています。

イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。*〔使徒行伝 1:3-5〕*

イエスはこのように告げ、雲に迎えられて、昇天していきます。「人の子」から「神の子」へと変わるのです。イエスは甦った後、弟子などと出会うが、なかなかイエスだと気づかれませんでした。師の言葉、遺言を誰も信じなかったのです。ともに食卓を囲み、一緒に飲み食べることが仲間、一味同心になることなのでしょう。使徒たちは聖霊降臨の後、「イエス・キリストの名」によって洗礼や奇蹟を行ない、一味同心して、信徒を増やしていき、「信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈りをした」*〔使徒行伝 1:42〕*。

すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業(わざ)としるしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心をつ一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって、一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。*〔使徒行伝 2:43-47〕*

聖餐(コミュニオン)を分かち合う食卓共同体、聖餐コミュニオンが形成され、世界中にいわば伝染して、感染していくことになります。だが、最初は恐れられたのです。奇蹟を起こしたためだとされています。それもあろうが、このコミュニオンは共産主義的だった。聖餐のパンはイエスの身体・肉体です。それを共食します。カニヴァリズムだと言ったのは、ジャック・アタリだったのでしょうか。キリストの身体をともに食い合う、共食いです。コミュニオン共同体とは、言うなれば、ゾンビ共同体だったということになります。聖霊の力、また「イエス・キリストの名」はそれを全世界に感染させ蔓延させていったのです。

20 年6月13 日を記念して

ジャニス は 1970 年に亡くなりましたが、その歌声は聴くことができ、皆さんに聴いてもらっています。どうですか。CD はいいもんだとか、資本主義はたいしたもんだとかいった話ではありません。ジャニスという名による、ひとつの作品が残っている、それを今聴いている、ある意味では歴史のなかで受け継がれている、それは奇蹟のようなことかもしれない、そう想いいたると、何かしら切ない感じになります。

6月13日、皆でひとつの食卓を囲むことはできませんでした。だが、何かしら華やいだ雰囲気、連帯と言うと気恥ずかしいのですが、直にではないとはいえ、少なくとも集まったといった感じ、集会めいたことが図らずも実現できたような心持ちを懐くことができたのではないのでしょうか。だからこそ、実際に集まり、顔を着き合わせるということがどんなに貴重なことかと、あらためて知ったように思います。2時間以上にわたり、私は少々眠気を覚えました。それでも、皆さんの話に耳を傾けていました。また、皆さんの部屋の様子を興味津々に眺めていました。この日に向けて、部屋を整理整頓、掃除された人もいるでしょうが、こざっぱりとしていて、う

らやましさを覚えました。私の部屋は実にごみ溜めのようなありさま、それが年々歳々過剰さを増しています。いわばエントロピーが増大しまくっているというところ。断捨離という世の中ですが、私は背を向けています。

それはさておき、6月 13 日、互に顔を付き合わせるのではなく、独り言ではなく、まだ見ぬ誰か、これから会うであろう誰かに向かって、何事かを話し伝えようと話しかける、そうした未来へと投企する姿勢を思いがけず感触できたように思います。これだけでも、あの顔見世口上はよかった。いつの日か、皆で食卓を囲み、共に飲食できる日が訪れることを祈念したい。昔風ですが、結集された同志諸君に、連帯の挨拶を送ります。(つづく)

「観察＝知＝生成」の実験 —— MFE の始まりに寄せて

車承棋 (翻訳・沈正明)

朝鮮大学校

1

パンデミックは、苦しみの中で世界の全面的な変化を経験させている。感染という事態を予測可能性の下に統制しようとする生権力の介入と、感染に対する恐怖の混沌とした身体的・心理的效果の下、親密性から世界経験にいたるまで、従来の慣習的な諸関係が全体的に解体され再構築されている。既存の時間-空間図式に基づいた経済的、社会的、文化的活動が阻止される中、予測だにしなかった災難的な苦痛が後を追ひ、「可能性」の様態として存在していた時間-空間は全地球的に現実化されつつ、「社会」の性格を根本的に作り変えているようにも見える。

そうかと思えば、感染者に対する生権力の医療的、情動的統制が個々人の自由の空間を侵害するように現象化したり、逆に自由の名の下で現れる統制への拒絶が公共の安寧を脅かし、既存の政治的、人種的分割を再強化する野蛮行為のように現れたりもする。

さらに、これらの混乱をより根本的に不安なものにするのは、生権力の全体主義的統制すら実は不可能であるという、予定された事実である。言うまでもなく、パンデミック状況の中、公共医療がどれだけ体系化されているかが人々の生存に直結するということが明らかになった

が、生権力の無力さは感染症に対する直接の統制の問題を超えたところに表われ出ている。すでに少なくない公共領域が資本に占有されている中、パンデミックは多数の生命を利害計算に委ねる傾向をめぐる葛藤を加速化するだろうと予想される。産業構造の暴力的な再編とともに、すでに固着しつつある危険と死の外注化は、パンデミック状況と重なり合い、危険の階級化をますます深刻化させている。パンデミックはこの世界の脆弱性を階級的・人種的・ジェンダー的に(再)構造化する動きに対して触媒のように作用しており、私たちの身体は、望もうが望まいが、この(再)構造化の渦に巻き込まれるだろうと予測される。

合わせて、「隔離」と「非対面(untact)」が常態化する中、今まで「共同性」の領域を拡大しようとしてきた進歩的な諸企画も新たな条件の下に置かれることになった。もっとも、「共同性」が必ずしも物質的な意味の接触地帯(contact zone)を前提とするわけではないが、例えば所有概念の廃棄と共同の連帯を目指すような運動が、非接触を必須条件としなければならなくなるかもしれないという状況は、確かに少なくない難題を突きつけている。

パンデミックの恐怖とともに苦しい身体的転換を強いられている今日の状況は、いかなる新たな秩序を形成していくだろうかと、すべての人が不安の中で見守っている。

まさにこういう時、MFEの始まりは格別な意味を持つ。

2

MFE、すなわち多焦点的拡張主義は、多数の非対称的な位置からの「視差的観点」が衝突し合う時に初めて現行化されうるだろうと思われる。しかし、視差的観点とは、単に各自が固守している主観的なビジョンの交差を意味しているわけではない。単に相互の異なる意見や志向、衝突し合ったり摩擦を生じさせたりしながらも調整や合意を目指すような主観性ではなく、むしろ絶対的场所性を抱え持った観点である時、初めて「視差」が形成されるためである。絶対的场所性を抱え持った観点とは、「観察者と観察対象がそれぞれ相手の中へと移行するような、一種の「魔術的観察」」においてのみ確保される(ヴァルター・ベンヤミンドイツ、『ロマン主義に

おける芸術批評の概念』)。「認識が内包している実践的意義」は単に認識主体から対象に向かう一方的な運動にあるのではなく、認識とは認識主体が認識対象とともに参加する上位の媒体(medium)内の事態であるため、対象の中で自らを反省し自己認識の中で対象を反省する不断の活動においてのみ、場所性を抱え持った観点が形成されるだろう。このように絶対的場所性を抱え持った諸々の異質な観点がモザイクを作り上げる時、その効果の中で初めて、私たちが生きている今日の形象を見出せるのではないだろうか。これが MFE が試みるべき実験ではないだろうか。

歴史的にも、既存の世界の慣習や人為的秩序が脱構築される危機の瞬間、したがって人間自身の身体的転換が伴う瞬間、その新たな廃墟の上に徹底した観察と実験を行おうとする試みは度々登場してきた。この「魔術的観察」の実験を理解するために、その中のひとりの観察者の歩みを少しとってみよう。

小説家であり評論家でもある金南天(1911~1953?、本名: 金孝植)は、植民地期のプロレタリア文学運動および社会主義組織運動に参加して投獄されたことがあり、KAPF(朝鮮プロレタリア芸術家同盟)が解散(1935)される頃から、思想転向の問題を批判的に取り上げる小説や評論を発表している。その頃の彼を捉えていた問いを一文に要約すれば、「思想の可能性の条件は何か」だったと言える。簡単に言えば、社会主義の理念を信念として持ち、プロレタリア解放のために尽くすと言っていた同僚や先輩たちが、その信念を捨てて自らの階級(プチブル)に戻っていくところを目撃し、存在は観念に先立つという唯物論的立場を改めて確認した上、理論や知識が事物化された情報ではなく思想になるということ、言い換えれば、理論や知識が身体化されるということ(「一身上の真理」)はいかにして可能であるかを問うた。

この問いは、一連の思考連鎖を経て変形され拡張されたが、とりわけ日中戦争の勃発と戦時総動員体制の登場以降は「主体形成の条件」をめぐる問いへと集約されていく。思想の可能性の条件をめぐる問いは、意識的事態と物質的過程の間における相互浸透の可能性への探求であったと言い換えることができるならば、最初からそれは主体形成の条件をめぐる問いを

含んでいたと言っても良い。主体をイデオロギーに従属(subjection)した存在であると簡単に規定することもできるが、その従属を(抽象的概念としての個人ではなく)ひとりの個別者としての「私」の身体的転換として観察するというのは、人倫的秩序(Sitte)と心情(Gemüt)の接点を観察することで世界構成の源泉を観察することでもある。

当時の支配的イデオログたちによりいわゆる「世界史的出来事」として意味化された日中戦争と、既存の政治的・社会的次元における近代的規範を一掃しそうな勢いで圧倒してきていた戦時総動員体制は、一方では最小限の自律的領域も残らず消えてしまった暗澹とした未来を予感させると同時に、もう一方では、資本主義・社会主義・全体主義の衝突が引き起こすであろう文明的転換を不安の中で期待させるものでもあった。

ここで金南天は「没我的」なほど徹底した「観察の精神」を主張する。金南天は以前の「転換期」、すなわち封建的世界の最終的没落と野蛮な資本主義の跋扈が入れ替わる時代を生きた作家バルザックのリアリズムこそ、このような「観察」の結果物であったことを想起させながら、資本主義・社会主義・全体主義が競い合い衝突する、予測できない「転換期」をバルザック的に観察しようとしたのである。

重要なのは、彼がバルザックから得た「観察」の概念である。「没我的」という修飾がつく彼の「観察」は、通常の意味の観察、すなわち観察者の冷静な「眼」(道具)が観察対象の隠蔽された背後を見通し、その固有の内的意味を明るみに出すといった、近代的なモデルに則っているというより、むしろ「他のものになること」としてのミメシス的変身に近い。客観的距離と冷淡な知性、ひいては超越的視線を前提とするような近代的観察とは異なり、彼にとって「観察」は他者に憑依する魔術的経験を目指しているように見える。彼はバルザックの短編小説「ファチノ・カーネ(Facino Cane)」(1836)の一部を引用しながら、このような魔術的観察がバルザックにとっていかに根本的であったかを示す。

観察は、観察される個人個人の生活をする事ができる能力を私にくれた。あたかも、かの千日夜話の回回教僧侶がある人にかかわる呪文を唱えば直ちにその人の肉体と魂を奪い取ることができたように、私がその個人個人になってしまうのだ。……(中略)……

彼らの希望も要求もすべて私の魂の中に移ってきて、私の魂がそのまま彼らの魂の中にすっぽり埋められてしまった。それは目覚めた人の見る夢だった。私は彼らと一緒に彼らを冷遇する工場主に対して、また彼らのお金を払わない意地汚い店主に対して激昂し腹を立てた。自己の習慣から離れること、精神的能力の醗酵により自己から他の人になること、このような悪戯に気ままに酔えること、これが私の楽しみだった。(金南天、「体験的なことと観察的なこと」、『人文評論』1940. 5.、強調は引用者)

もちろん、この「経験」は疑うに足るものかもしれない。「没我的観察」により「他のものになること」とは、ひょっとすれば自己否定の契機を省略したまま「他のものになりうる」と確信する主体の傲慢さの中で架空された幻想でもありうるのだ。しかし、金南天は繰り返し「描写の精神」を強調する。描写に徹底する時に前景化されるのは、描写する者ではなく描写される者、とりわけその身体性である。身体が世界および他者との感覚的・意識的・権力的関係の中で構成される諸特異性の結合体であるとすれば、そして、金南天にとって観察と描写が没我的な境地を含み持っているとするれば、対象の身体性を現すとは、他の誰でもなくまさにその個別対象の感覚や意識において世界を経験するためにその対象の中に沈潜することを意味する。

観察と描写の精神に充実した作家がこうして個別対象の感覚や意識において世界を経験しようと没頭する時、彼自身の身体性にも変異が起こらざるをえないだろう。というのは、その作家は対象と要素を配置し特定の世界を企画・構成するようなナラティブの主権者の地位から退き、かの配置され構成される対象と要素の位置に限りなく接近していくからだ。そのような意味で、没我的主体にとって対象を描写するということ、対象を知るということは、自分自身がその対象になるということに近い。

この「観察＝知＝生成」の境地こそ「魔術的観察の実験」の目指すところではないだろうか。

金南天はこのような観察を通して戦時総動員体制が作り上げていく「その時代の子供たち」を描写しようとし、混沌とした転換期の主体形成を彼らの感覚で「経験しよう」とした。しかし、この「時代の子供たち」がいかに関成長していくか、彼らの作る世界がいかなる実定性の世界を構築していくかは、まだわからないままである。ここで「転換期」という時間概念を逐次的な意味として受け取れば誤解が生じかねないが、というのは、時間的意味における「転換」とはその「以前」と「以後」という分節的な時間単位を必然的に伴うものであり、したがって、「転換期」という命名そのものに特定の歴史哲学的な時間の概念が働いているだろうからである。

しかし、彼は「転換期」の移行、すなわち「転換」の終結をめぐる生半可な判断について警告している。

まずはじめに上げなければならない危険性は、転換期というのをごく短い時間として考えようとする意見である。……世界を統一する一つの構想が現れ、世界的欲求を満足させるまでの時間を考えてみれば、あるいは4、5年あれば終息されると信じていたこの転換期が、人ひとりの一生などペロリと飲み込んでしまうかもしれない。(金南天、「転換期と作家」、『朝光』1941.1.)

ここで金南天が示そうとしているのは、言うまでもなく、世界あるいは経験構造の転換が極めて遅く進行するという、「長期持続」の事実性だと言える。しかし、これはまた、「転換の長期持続」を生きている者の立場から、「転換以後」の到来をいたずらに期待できない者の経験という立場から、逆に転換の「終結不可能性」に対する感覚を要請しているのではないだろうか。

実は、この時期の金南天はいくつかの長編小説を試みたものの、多数の小説を未完に終わらせている。美学的な判断基準に従えば、彼の小説はほぼ全て失敗したと評価できる。しかし、興味深いことに、彼は一つの作品に登場する人物たちを他の作品で他の人物との関係の中に再登場させるような形で小説を書いていった。言ってみれば、彼の人物たちは自分らが登場する

小説の内部で生まれ、その小説とともに消えていくのではなく、個別小説の囲いを超え、さまざまな小説を貫いて生きていく。あたかも一つ的人格体がさまざまな場所で多数の関係の中を生きていくように、彼の人物たちは「作品」の境界を横断しつつ独自の生を営んでいるように見える。このような意味で、彼の人物たちは作家の主権的統制の下に完全に従属した存在ではなく、むしろ各々転換期の生を生きている当代人たちの範型とも言えるのであり、作家は彼らと彼らが生きる世界を「観察」しながら、その各々の断層を提示していると言える。したがって、彼らの生は小説の構成により捉えられた断層とともに終結するどころか、それ以降も生き続けながら関係を増殖していく。

このように金南天は未完の「観察」小説をモザイクのように重ね合わせ、終結不可能な実験を行おうとし、バルザックが「転換期」のフランス社会でそうしたように、東アジア世界の「転換」を予感させる混乱の中、植民地朝鮮の「人間喜劇(La Comédie Humaine)」を描こうとした。この未完の実験は、「非常時」の世態を不連続的に提示し、そこから世界に対する技術者の態度とともに浮上していた新たな主体性の形式を捉えようとした。

3

金南天が「転換期」においてバルザックを思い出したように、あるいは私たちもまた「バルザック×金南天」を記憶し、彼(ら)の実験精神を熟考すべき「転換期」に立っているのではないだろうか。パンデミック状況の推移に沿ってその時々に対応していく医療-防疫的・行政的決定が、実は私たちが今参加している媒体(medium)の構造そのものを変更するような結果につながっているのではないだろうか。今私たちが経験している苦しみは、もちろん第一次的には感染に対する恐怖に起因すると言えるし、また、感染の遮断という目的により医療-防疫的、行政的権力の日常的な浸透が正当化されているからでもあるが、同時に、既存の媒体環境の中で鍛えられた私たちのマメが割れ、身体が変形していくからではないだろうか。

封鎖、遮断、隔離、社会的距離、マスクをつけた顔と非対面の日常化、それに伴う(すでに日常化されているが)遠隔関係の全面化は、これからいかなる社会的関係と人間を作り上げていくだろうか。ウィルスを追跡し統制しながら生体情報としての諸個人を捕獲する国家と資本は、いかなる「市民」と「商品」を作り出すだろうか。そして、ポスト・パンデミック世界で、多衆の統制不可能な動きはいかなる新たな分裂と共同性を増殖させ、いかなる主体性の形式を作り出すだろうか。

パンデミックを含め漸増しつつある「自然の復讐」は未来をますます不透明なものにする反面、私たちの些細で日常的な行為と自然の大災厄の間の関係はより鮮明になっている。かつて社会学者ウルリッヒ・ベックは、1990 年台中盤から加速化したグローバル化の特徴を、「近いものは遠く、遠いものは近く」という逆説的なスローガンに集約して表したことがあるが、あるいは今日のパンデミックは私たちの身体の転換により、この「グローバル化」を決定的に成し遂げさせるかもしれない。

まさにここにおいて、主体と対象が相互移行する「魔術的観察」の実験が要請される。そして、その実験の比較不可能なものに見える諸結果物が星座(constellation)を作るための空間が求められている。世界経験が形成されるそれぞれの場所で、「観察」の過程で、その場所性を抱え持った言葉を見出し発信する時、その言葉たちがあるいはつながりあるいは衝突し合いながら作り出す効果を通して、私たちは「多焦点拡張」の運動の中で現在にかかわる知を作っていけるのではないだろうか。しかし、この「観察」から「多焦点拡張」に進む運動が、単に私たちの世界の構造にかかわる知や、混沌(chaos)の中から秩序を見出すような知に止まるのではないということを忘れてはならない。否、すでに触れたように、「観察＝知＝生成」の運動を忘れてはならない。

先に見たように、金南天は「転換期」を考える際の危険性、すなわち転換期を単に短く経ていく過程として理解することの危険性を指摘したが、それに続き、もう一つの危険性をも警告している。

次に、私たちが上げなければならない危険性は、転換期を経て否定から肯定にいたる過程は、一つの歴史の法則により行われるものだから、私たちは腕をまくってじっと座っているだけで、そのような時代に渡っていけるだろうという、極めて呑気な考え方である。……しかし、これは歴史的観点を云々としながら実のところ歴史的立場を拒絶する理論に違いない。……必然性はまさしく可能性にすぎないのだ。可能性を高めて必然性にまでいたらしめる者にのみ、歴史の摂理はまず彼岸の世界の扉を開けてくれるのだ。(金南天、「転換期と作家」)

要するに彼は、「転換期」の構造にかかわる知だけでは転換期への移行は行われえないということを明言している。歴史の動力をめぐるマルクス主義内部の論争(「生産様式の歴史」か、「階級闘争の歴史」か)を意識したような表現が使われているが、転換期に対する彼の「観察」が「没我的」であったことを思い出せば、「可能性」を「必然性」へと高めるということは、「観察」の中において「生成」に参加するということとそう変わらないだろう。

この「生成」は言うまでもなく自分自身が対象になるような身体性の変異を含むが、それに全部還元されるわけでもない。「観察」の核心がミメシス的な変身自体より、観察者と観察対象の間における無限の反省過程にあるとすれば、転換期の内部を経験する者とその経験を反省する者との間におけるアイロニカルな関係の繰り返しの中、「なること」とは次元を異にする「なるべきこと」へのビジョンが介入せざるをえないだろう。その点では、金南天自身が論理的言語で語っているのに対し、彼の小説はまだ観察者が観察対象に「なり」、転換期を経ていく状態に留まっていると言える。これは、戦時総動員体制の言語-表象体制の限界でもあり、金南天自身の限界でもあるだろう。

あるいは多焦点的拡張主義はこの限界を乗り越えるための契機を与えてくれるかもしれない。その契機はまず何よりも視差的観点の複数性にある。各々の絶対的場所性を抱え持った言葉たちは観察による「なること」の結果物であろうが、「なるべきこと」はこの絶対的場所性を抱え持った言葉たちが不均質につながり衝突し合う時に、それらがモザイクの効果という「反省

的次元」において初めて浮かび上がるようなものであるからだ。私たちが星座を見るためには各々の星自体を見ると同時に、その星たちの「反省的次元」に焦点を合わせなければならないようにである。MFE が、このような絶対的場所性を抱え持った言葉たちが無数に広がる夜空になることを期待している。

「雑誌」への期待 ——ゆるく束になるために

古川岳志

大学非常勤講師

何となく巻き込まれるような形で、MFE の立ち上げに関わることになった。「新雑誌を作る」というアイデアを最初に聞いたのは、今年の春先頃だったか。具体的な内容や、形式などは何も決まっていないという話だった。よくわからないが、なんだか面白そうだな、というのが最初の印象だった。どんな雑誌になるにしても、自分の好きなことを自由に書く場所にさせてもらえたらいいな、という自分勝手な期待もうまれ、それならば、こまごまと出てくるだろう雑務を少し受け持ってもいいかな、と考えた。

わたしは、胸を張って自分は研究者である、と言える自信が全くない。それでも、複数の大学の非常勤講師として大学業界にしがみついて生きている以上、そうではないと言ってしまうのも無責任だろう。研究者であるならば、研究したことを書いて発表する、というのが仕事の中心であるべきだが、書くことに常に苦手意識を感じ、できれば避けたいと思い続けてきた。書くべき時に、書くべきとされているものが書けない、そのために状況がどんどん悪くなる、ということを繰り返してきた。書くべきものを書けないのは、プロとして致命的な欠陥である。やがて、何を書くべきなのか、さっぱりわからなくなり、そもそも自分が何をしていたのかさえ、だんだんわからなくなってきた。

だが、書くこと自体が嫌いなわけではなかった。ブログや SNS に、時に長文を書くこともある。誰に求められているわけでもないのに、それでも、誰かに読まれることを期待して何かを書いている時、自分には文章形式で他者とも思考を共有したいという欲望があったのだと、あらためて気が付く。書くべきものが書けないくせに、何のためにかよくわからないけど、書いて伝えたいことはある。自分の「書くべきもの」という認識に、何らかの歪みがあるのかもしれない。そんなことを気にせず、とりあえず書きたいと思うものを気楽に書ける場所があったら、自分は何を書くのだろう。それを確認してみたいな、と漠然と考えていたところに、この雑誌の企画だった。

自分の話から始めたが、書きたいと思うものを気楽に書ける場所は、今、(広い意味での)研究という行為にかかわる多くの人に求められていると思う。学問の世界は、専門分化、分業化がますます進んでいる。いろいろなサブジャンルに分かれて学会が形成されていて、それぞれの場で設定された基準に合うものを書き、それぞれの場で蓄積されている知の発展に貢献することが求められている。学問はそのようにして成長させていくべきだ、という「知の進化論」を全否定する気はない。ただ、個々の人間の社会化のプロセスから見た時、そのような期待に応えながら、うまく適応していくためには、かなり特殊な能力が必要とされているのではないかと、とも思う。

20代あたりで、自分が適応したいと考える専門分野、「業界」みたいなものをみつけ、そこで求められていることは何かを素早く学びとり、求められている業績をあげ、それらしいふるまいを身に着けていく。それがうまくできたものが、プロの研究者になれる。求められている条件を満たせないものは、そこから立ち去って違う仕事をするべき。こういう常識が大学院などの世界では共有されている、ように見える。自分が大学院に進学した四半世紀前でもすでにそうだった。院生同士の会話は、こうしないと就職できない、あれではダメだ、などの噂話ばかり。はじめはその輪の中に自分も入っていたが、やがて、うんざりするようになっていった。研究者をめざしても先は暗い、大変厳しい、という言葉が誰もが耳にするようになり、近年の(文系)大学院後期課程進学者数は(少なくとも私の出身研究科などを見ると)大幅に下がっていると

いう。当然だろう。自分の能力に見切りをつける勇気もなく、ただただ何となく今まで来てしまった身としては「みんな賢いな」と本当に思う。

どのような世界でも「プロの道」は厳しい。だから、選別があり、その競争に勝ち残れないものは、早めに違う道を見つけた方が良い。それはその通りだと思うのだが、でも、しかし、もやもやした気持ちも残る。広く「研究」という世界が、ビジネスやスポーツと同じような競争原理だけに支配されて、本当に良いのだろうか、と。

大学がのんびりしていた時代を取り戻そう、などという話をしているのではない。以前の大学は余裕があって良かったのに、なんてノスタルジックな言葉を聞くと、それは初めから選別された人しかその世界に入れなかったからにすぎないだろう、と反論したくなる。自分が大学院に進学した頃に、大学院重点化政策が始まり、院への進学者はどんどん増えて行った。そういう変化がなければ、学問とは無縁な家庭環境に育った自分のような人間が、研究の世界に足を踏み入れることなどできなかったに違いない。やはり開かれたのだ。それは良い変化だったのだと思う。開かれて、入ってくる人が増えれば、競争が激化するのも仕方がない。プロとして食べていける席の数は、限られているのだから。競争自体を否定しているわけではないのだ。ただ、現状は、あまりにも「もったいない」のではないか、という話なのだ。

それぞれの業界で求められている教養・能力を素早く身に着けること、しかるべき時期に新しい知見を生み出すこと、それらを適切にまとめてコンスタントに発表し続けていくこと、基本は一人でそれをすべてやり続けること、そして、最低限の人間関係を維持しておくこと、言うまでもなく、その間、生活手段を確保し続けること、心身のある程度の健康を維持し続け「生きていく」こと。職業としての研究者になるために、ひとりの人間に求められていることは、あまりにも多く、それらの要求に欠損なく応えられる人の方が、どうかしている、と思われるくらいだ。だけど、それができる人が一定程度いるのも確かである。そうやって勝ち残った人は、プロとして、社会的に能力も認められ、ある程度は残りの人生が保証される。このような仕組みには、それなりの合理性はあると思う。それに、今のシステムが悪いから、と言って、じゃあ他の選別方式が何かあるか、と言われてもよくわからない。

だが、求められているものの何かひとつが足りないというだけで、研究という行為自体を、早々に断念しなければならない、という現状は、やはり何かがおかしいようにも思う。もったいない、というのは、才能のある人が残れないかもしれない、というような個々人の成功可能性の話ではなく、研究をめぐるコミュニケーションの豊かさ全体にとって、という意味だ。

人が何ごとかについて調べ、考え、それを他者に伝えようと言葉にし、他者はそれを読み、次の思考へとつなげたり、自分が抱えていた未分化な何かを言葉にするきっかけを得たりする。研究という行為の本質が、このようなコミュニケーションであるとすれば、書く側、発信する側の言葉が、狭い枠組みの中で選別されたものだけになってしまうこと、細分化されたそれぞれの領域での基準を満たすものだけになってしまうことは、研究という営為を痩せさせ、創発的な発展可能性を削いでしまうことにつながるのではないか。「方法」「目的」「結論」があいまいな思考の原型、ひとりの手ではまとめきれなかった調べものの断片、未完成なもの、尻切れトンボなもの、そのような文章の中にも、何とも言えない迫力が感じられたり、読み手の思考に刺激を与えるものがあるかもしれない。学問の世界だけではないが、専門分化、分業化はどんどん進んでいくのに、分かれたものを結びつけ、協働へとつなげるような、仕掛けや知恵はどんどん弱体化しているように思う。なにも、ひとりで全部仕上げなくてもいいだろう。後半は、別の機会に、他の人が書き継いでもいい。どこかの「業界」では、箸にも棒にもかからないと見られるようなものであったとしても、他の世界から見れば、別の可能性が開かれている、というようなものもあるだろう。現状、狭い評価基準に基づく完成品が求められすぎているのではないか。研究能力の選抜試験を受けさせられているような気持ちにならず、もっと自由に書きたいことを書ける場を作ること。あらかじめ設定された基準を用いて、足りないことを指摘するような粗さがし視線で読むのではなく、もっとフラットな関係性の中で、書く・読むという行為の場を確保すること。

まずは学問・研究という場をめぐる話からしてきたが、大学外での文章コミュニケーションのあり方も転換期を迎えていることも指摘しておきたい。本が売れなくなったと言われて久しく、新聞の発行部数は減り続けている。特に、雑誌類は大変な苦戦を強いられているようで、大学生くらいの年代の若者なら、趣味や娯楽に関するものでさえ、これまでほとんど手に取ったこ

とがない、というケースも珍しくないだろう。これだけ、紙媒体が減っていくと、文章を書く技術を身に着けたとしても、それをプロとして、生活の糧にする道は、これまでになく厳しくなっている。もちろん、作家やライターとして生きていくのが大変なのは、昨日今日のことでないだろうが、紙媒体の衰退によって、年々厳しさを増しているのは事実だ。よほどの実力、よほどの運がなければ、食べていくことはできない。かくして、不特定多数相手に読まれる文章を公表でき、それを広い意味での業績にできるのは、大学組織か、メディア組織に属しているものだけになってしまっている。

その一方で、テキストの流通量自体は、増加の一途をたどっている。ネットの海では、これまで人類が経験したことがなかったほどの大量の書かれた言葉が溢れている。その大半を占めるであろうパーソナルコミュニケーションに属するものを除いて、不特定多数に読まれることを期待して書かれた文章だけに絞ったとしても、文字の歴史が始まって以来、最大量になっているはずだ。インターネット黎明期に語られた「誰もが発信者になれる時代」という夢は、実現したのだ。各自がそれぞれ自由に、それこそ、学問の狭い枠組みなどとはばらばら、プロかどうかなど気にせず、大量のテキストを書いている現状は、読み書きの歴史において理想的な状態なのかもしれない。しかし、実現した理想郷は、ディストピアのようでもある。

誰かに届けとネットの海にテキストを発信する時、古典的なイメージだが、小瓶に手紙を詰めて流すような儚い期待が込められていると思う。たまたま誰かに拾われるのではないか、それが何かを生み出すのではないか、という期待が。ネット上では、海に漂う星の数ほどある小瓶の群れの中で、どうやって誰かに手に取ってもらうかという技術に関する情報もまた溢れている。目立つ小瓶にする方法、拾ってもらう人がいる方向に流されやすくする方法、手に取ってもらってからがまた肝心で、すぐに放棄されないよう簡潔に短く書かなければいけない、分かりやすい図式を採用しなければいけない、などなど。今日では、プロのライターにとっても、仕事の舞台はネット媒体が中心になっており、そこでは、どれだけの人に見られたかを示す数字(ページビュー)を増やすことが、収入に直結する最重要課題となっている。ネット媒体は、実際には商売でありながら「読むのは無料」が普通になっているため、文章の役割は、広告を見せるための道具としてのそれだからだ。

ネット上には、歴史修正主義・排外主義・差別的言説が吐いて捨てるほど溢れているが、これらも、耳目を集めたい、ページビューを増やしたいという目的が先にあって、そのための内容が選ばれているという例も少なくない。書きたい、読まれたいという欲望。この誰もが持つ、コミュニケーションへの欲求自体、今日では商売の対象になっているのだ。よく言われることだが、フェイスブックや twitter など「ただ誰でも自由に書けるフォーマット」は、このような願望を叶える幻想を商品として利益を上げているともいえる。たとえば、2014 年に日本でサービスが始まった「note」というブログフォーマットがある。近年、利用者が増えているが、このサービスの看板は、ブログの「書き手」をクリエイターと呼んで「作品」の商品化が容易にできる仕組みを整えていることだ。好きに書いて、ただ読んでもらうだけでなく、書いたものを売るプロになる道が開ける、そういう幻想が、このサービス自体の商品なのだ。現在、コンテンツビジネスの領域では、小さくとも一定数のファン層を確保することが、めざすべき方向とされている。そしてまた、そのようなファンを作るための技術もまた、ひとつの商品となっている。ファンを持つ書き手になるためのオンラインサロン、という、よく分からないビジネスまである。自己実現の夢と結びついて、書く／読むの関係自体が、ひとつの商品となっているのだ。このような商品化の泥沼から、書く／読むのコミュニケーションの可能性をどうやって救い出すか、ということが今、問われているのではないか。

プロに限らず、誰かに向けて書く以上、誰かに読んでほしいと考えるのは当然だ。そして、文章を書くために、何らかの技術が必要なことも確かだ。最低限、読み手を想定して書かれたものでなければ、文章を使ったコミュニケーションが成り立たないことは、紙媒体中心の頃から変わらない。ただ、書く技術、伝える技術に、広告のための技術が入り込み、それらが不可分になりつつあるのは、今日的課題だと思われる。書き／読むという関係性の商品化が容易になっているとしたら、そこから距離を取る何らかの方法も必要になってくるだろう。

話を戻そう。大学での文章コミュニケーションも、ビジネス的競争原理の影響を受けるようになっている。繰り返すが、これはある程度は仕方がない。競争原理を全否定して、とってかわるのではなく、いわゆる「別の道」が、いくつも試みていくことが重要なのではないか、と思うのだ。

先日のミーティングで、私は「ゆるく束になる可能性を」というような提言をした。事前に考えていたものではなく、発言の順番が来て、なんとなく思いついて話しただけだが、とりあえず目指す方向として悪くないような気がしている。学問の世界で新しい雑誌を作るという時、より関心の近い人が集まって、より高度な議論の場を作ることを目指す、というのが普通だろうが、ここは違う。いわゆる専門はかなりバラバラでありながらも、書き／読むという関係性自体に期待をかけていること、重要だと考えていることは共通している。何かを書いて他者に伝えたい、という人間の根幹にかかわる欲求が、商品として容易に消費されてしまわないように、書く／読むの関係性を丁寧に維持するために、ゆるやかに束になっておくこと。そこで何が生まれるかは、動き出してから考えたらいい。少なくとも私は、この程度の適当な認識で、この雑誌の出発に参加している。

編集委員という役割に課せられているのは、とりあえずは、集まった文章を全部読むことだ。だ。通常の学会誌におけるレフリーのように、基準に達しているかを判定して、掲載内容を保証するような役割は、今のところ期待されていない、と思う。もし、そのような適不適の選別をかけられるなら、事前に、この雑誌はどんな学問分野に関するもので、どのような基準で判定をするのかを明確にしておかなければ不公平だろう。

編集委員という名目も、学術雑誌という枠組みも、書く／読むの関係性を作り出すための道具として利用すればいいのではないか、というくらいの認識でいる。短時間で読めるように要点をまとめること、図式化して分かりやすくすることなどを求めないということは、読む方にとっても時間がかかるが、この時間を豊かなものだと考える人だけが、編集委員を引き受ける、ということでもとりあえずいいと思う。もちろん、文章を書く上での守るべき最低限のルール、引用の作法や、オリジナリティに関する常識的な規範については、編集委員が「不適」ということを言う場合もあるだろうし、すべき時にそう判断する責任はやはりあるだろうが、何と云っても最も重要な役割は読むことだ。読む時は、ダメ出しをしようとしてではなく、文章が伝えよう

としていることを、積極的に引き受けようという意識で読む。編集委員がいることで、書いた人は、誰にも読まれないかもしれないという不安からは、とりあえず自由になれる。

今書いた、編集委員の役割云々に関しては、別に他のメンバーとの議論を経て決定したことではない。コロナの影響もあって、何度かしかミーティングもできていないため、公式な編集方針などは全然決まっていない。それで良いような気もするし、次回の1号からは、もう少しはっきりさせた方が良いかもしれないが、とにかく、まず出してみることが大事だという気がしている。ここも、編集方針に関する議論の間でもあると思うので、とりあえず、自分なりの考えを書いてみることにしただけだ。

「新雑誌を作る」というアイデアを聞いて、なぜ面白そうだったのか、について、いろいろ頭に浮かんだことを書き連ねてきた。しかし、簡単に言うと、いい大人が集まって新しく同人紙サークルを作ろう、という話なわけで、そりゃ楽しいに決まっているのだ。とにかく、アカデミズムなのか、人文学なのか、社会科学なのか、などの問いは後回しにして、何となくこの場に集った人たちが、それぞれが書きたいもの、書かざるをえないものを書ける場を、そしてそういうものが読める場を作ろうということだろう。やっていくうちに、何かが見えてきたらいいし、バラバラになっていったら、それこそ「多焦点拡張主義」の名前の通り、いろんな分派が生まれたっていいと思う。この雑誌が、どういう風に転がって、どのような人たちを巻き込んでいくのか。本当に、楽しみにしている。

MFE の雑性のために

尹汝一 (翻訳・姜文姫)

済州大学校

「雑」―「誌」とは何か。

雑の誌とは何か。

雑な誌であろうか。

雑のための誌であろうか。

これから生まれようとしている雑誌のために、このような問いを取り出して、考えてみることにしよう。

雑誌。ある時期には活発であったが、もはや淘汰され、すでに時代遅れのもののようになされたメディアを、なぜいま作ろうとしているのだろうか。

もちろん定期刊行物は今も隆盛しているし、多種多様な形態で拡散されつつある。しかし雑誌は、新聞より発行周期が長いというだけの単なる定期刊行物ではないはずだ。定期刊行物というものが、必ずしも雑なるものではないためだ。雑誌なら当然様々なテーマ、異なる口調、

違ったスタイルをあわせ持つべきだろう。私はしかし、それだけでは雑一誌になるに十分ではないと言いたい。

雑一誌は外部の世態を批評する前に、自ら動き出してことばの空間を開拓し、現代文化において目立つ精神的雑居を克服したうえで、雑性のある程度の個性にまで導くことばの運動であるべきではないか。そのことばの空間、ことばの運動を異なった言い方をするなら、「MFE（多焦点的拡張主義）」になるのではないか。

つまり私は、「雑誌の時代」がかなり過ぎ去ったような今になって出現しようとしているMFEのために、雑誌の雑性を考えてみようとしている。

1.

私は問う。いま創刊されるMFEが「また一つの」雑誌ではなく、「異なる」雑誌であることを目指すならば、この雑誌は雑誌としていかなる自覚を持つべきであるか。この問いはこのように言い換えることができよう。この雑誌はいかなる経験の生産を企図するのか。雑誌は書く－編集する－読むという動詞と結びつき、それらはどんな様相であれ「経験する」という動詞を発生させる。この雑誌は、果たしていかなる経験の生産を企てているのだろうか。これは、他の雑誌に対してもできる問いかけだが、私にとって、大きな期待を込め、この雑誌に対し投げかける問いだ。

ここで藤田省三が『精神史的考察』（1997）で述べた、経験に関する見地を参考にしたい。藤田省三にとって経験とは、単に、した・されたことなどの通称ではなかった。経験は「物と人間の間に行われる相互の交渉」である。経験するということは、自己でないものとの接触によっ

て自分の世界が揺さぶられ、自己の欲求が動揺する試練が含まれ、それによってそれらが再編されるプロセスを指す。ここに、この雑誌が追求すべき経験のひとつのイメージがあるのではないだろうか。

ところが、今日の経験は、藤田省三が定義した経験が誘発されないように設計され、一般財貨のごとく大量生産される。その経験はまず物化される。何についての経験であるかがわりとはっきりしており、経験の様相も発生と終了の時点も大体決まっており、それによって期待されるところも大体予想できる。そして経験は私有化される。所有格に還元できるものだけが経験として認められる。奇形的に巨大化した現代社会におしひしがれる現代人は、「私は〇〇をした」という証拠を作りだし、個性のカラフルな競争をしながら日常を送る。その経験－商品は被膜のようにくると、経験－消費者を包み込む。

面白い。おいしい。カッコいい。よかった。経験を軽く評するこれらの感嘆詞的形容詞の氾濫は経験の物化と私有化を証明する。しかし実際には、そのような経験は反経験的である。自己ではないモノとの接触を通しての自己更新の契機にもなれないためである。

2.

このような現代社会の経験風土の中でこの雑誌は、果たして異なる経験を呼び起こすことができるか。

今日の雑誌とは、ほとんどが物化され私有化された経験を拡大再生産する主となるメディアである。それが提供する経験とは、軽い娯楽であったり、精々のところ周期の短い嗜好の共同体を構成したりするために使われる消費財にすぎない。決して娯楽誌に限る話ではない。時

事誌もそうだし、文芸誌・学術誌だとしても大きく違わないこともある。ゴシップが載った娯楽誌であれ批評が飾られた文芸誌であれ、だいたい個々人の心理的・視覚的・美的・知的欲求と好みによって読まれては捨てられる、単なる情報の詰合せ以上の意味を持たない。

そうであるならば、この雑誌はこれらの情報の詰合せといかに異なるか。藤田省三が語った「経験」を呼び起こす雑誌はいかに可能だろうか。経験に関する彼の定義を思い出してみると、そのような雑誌は、読者に対し、自分自身のことはすでによく知っているという通念を揺るがせるものでなければならない。思惟していなかったことに関する思惟を触発し、考え方の慣性を凝視するよう誘導し、それによって読者を遠くまで連れて行きその場所において自分自身との対話を導く時にこそ、情報の伝達を超えた経験が生じることができるだろう。

次に、この雑誌は、そのような経験の発生をいかに図るか。もちろん、問題意識の充満した文章を集めることも重要であるが、立派な文章が載ることだけでは、このような経験の発生は保証できない。おそらく方法は、雑誌らしくなる、雑誌として充実することにあるのだ。読者にとって雑誌は、新聞より遅い定期刊行物ではない。筆者にとって、いつか単行本にまとめる文章を少しずつ出す紙面でもない。それでは雑誌らしくない。雑ではない。雑誌だというなら、多様なテーマと異なる語り口、違った立場が含まれていなければならない。

だからといって多彩さがすぐさま雑さにつながるわけではない。多彩さというなら、テレビのニュースの方が優れているではないか。お互い無関係な内容を数分単位、無関係なイメージを数秒単位で流すことができる。世界はテレビにおいて情報として細かくバラバラにあふれ出る。過度な感覚的・精神的刺激に一瞬一瞬反応すると、一つの事案に集中する能力は退化していく。ところが、文芸誌、学術誌といっても文章と文章がお互いに関係せず併存しているだけなら、読み手による読み方はテレビを見ることと本質的には変わらないだろう。これは、精神

的な雑居であり、雑性の実現とは異なる。各種のマスコミが蔓延させている、このような精神的雑居状態こそ、この雑誌が雑性の実現を通して克服すべき課題ではないか。

3.

それならば、精神的な雑居状態でない雑性の実現はいかに可能であろうか。ここにおいて、様々な角度から光を当てるべき深みのあるテーマの選定、そのテーマを立体的に突き詰める特集、それに座談会、連載、批評、レビューなど、雑誌の企画に関する様々なアイデアが必要になる。しかし、いかに充実した企画でも、必ずしもその雑性の実現されうとは限らない。ただ、雑誌であるがゆえに、つまり異質の文章が共存しているために、ある出来事が起こるのではないかと期待してみることができるだけだ。複数の観点の交流、衝突、浸透に力づけられた出来事のことだ。

雑誌においては文章が相互的に声をかけあい、競い合う。異なるステータスの複数の文章はお互いを引きずり、引き上げる。展開されるこのような混沌の地平においてこそ、雑誌においてのみ可能な経験が生じうる。突然、不意に。雑誌はそれを狙うのである。思いがけない、予期しない効果を期待し企画しながら、相互異質性が作り出す(各々の文章に還元されない)固有の色彩と音調を作り出そうと試みる。単なる一冊の雑誌であるが、できうる限り意味合いの幅を広げ、次元を分厚くすることにより、一冊の雑誌は文章の寄せ集め以上の意味を持つ。

この出来事が実現される場所は、まさに読者である。雑誌は出版社によって雑誌として発行されるが、読者によって雑誌として発生する。読者から雑誌らしい読解が生じなければ、定期的な文章の寄せ集めにすぎないのだ。雑誌は単純に「ある」のではなく、「立ち上がる」ものである。

読者はいかにして雑誌を雑誌として発生させるか。雑誌には潜在的な読み方が多い。最初から最後まで読み切っても、レモンのように数滴の汁がまだ残る。雑誌は、普通の本のように順番に読まなくても良い。雑誌に投稿した書き手は、実は、読者がどのようにして他の文章から自分の文章に目を移すか分らない。他の文章を読んだ時発生した読者の経験が、書き手自身の文章を読むときに染み込むだろう。花と花の間を往来して花粉を運ぶミツバチのように、雑誌の読者は文章の間を横切り、書き手も気づかないうちに精神を受精する。

書き手自身の文章は、それに耐えられるか。それを喜んでいられるか。他の書き手の文章に関する読者の経験と、強く共鳴したり反転したりしながら、読む経験を増幅させることができるか。それを可能にする一般論が何かは分からないが、少なくとも、思考を伝えようとするならば、その思考を伝えようとする願望を越えるパトス、たとえば、しばらくの間、その思考に自分を賭けようとするパトスが求められる。自分の思考を本当に他者に伝えようとする意志のある者なら、その思考を思いついた時よりも、読者のまなざしが届く雑誌の中の文章として繰広げている時、自分の思考をより愛し、愛するためにさらに問い返さなければならないだろう。

このような雑誌において、書き手にとって文章とは、ことばとの関係の中で経験する、他者（読者）に対する関係であり、文章の持つ構成力とは書き手が文章を書いていく中で予感する「異質的声」に応答する力である。その他者との関係が文章を引っ張る動力であり、文章を繰り広げる張力である。

4.

ここで重要なのが、ことばの力である。

雑誌は時代の問題を食べて生きる。考えてみれば、雑誌は様々な問題が一か所において遭遇する奇妙な場所である。読者は雑誌を通じて色々な問題に接し、経験する。しかしながら、色々な問題を直接に経験するというより、問題に関する誰かの精神的経験を、ことばを媒介にして経験するのである。そうであるなら、どのようなことばが、読者をして雑誌の時空間に引き入れ、留まらせ、雑誌-経験を発酵させるような魅力を持つことができるのだろうか。

それは読者によって異なるだろうが、私は、読者が雑誌を開ける際、通常のマスコミ、たとえば新聞とは異なることばに接してほしい。記者や論説者が記事や社説において問題を論じるやり方には「取り扱う」という動詞がふさわしい。この動詞からは、いつでも手を引くことができるという余裕、いつでも背を向けられるという距離感が感じられる。彼らは、あれこれ問題を命名して診断し、かくして問題の境界を取り囲む。問題は境界の中で分かりやすくなる。そしてすべてを見通しているかのように意気揚々と論じる。自分のこととして引き受けるのは拒みながらも、いつも教え諭そうとする。にもかかわらず、彼らの診断や処方などというものは、大きな原則の再確認にとどまってしまう。あまりにも常識的ではないか。ただし。ただそれだけである。だるい。彼らのことばを経ると、問題はきっちりと造形される前に、のっぺりと平凡なものになってしまう。

今度はテレビをつけて時事番組をみる。もっともらしいことば作りを生業とする多方面の論者が出ている。彼らは能弁であるが、聞いているとその言語の構造はとても短縮的である。複雑な社会現象を論じながらも、丁寧に論証するより、いたずらに憶測し刺激的なことばを使って感情の喚起を狙う。彼らのことばは次第に広告のことばに似てくる。広告のことばは短いフレーズをもって思考を迅速に、特定の方向に誘導する。人々に疑似的な親近感を提供し、直ち

に自動的な共感を誘発する。このようなことばに随時接していると、思考が持つ批判の力が弱
化し精神の内的次元が磨滅する。

私にとって分かりやすかった彼らのことばは、分かりやすかったという為に却って、私を異
なる思考へと導くことに失敗した。あまりに明瞭だと、むしろ頼りにならなかった。彼らのこと
ばは品位の高い、決まり文句が多い。その決まり文句は流動する現実を停滞させようとする。
彼らが自負する明瞭な論理とは、決まり文句にまみれた思考の倒錯状態に過ぎないのかも知
れない。

5.

この雑誌は、問題に対する時、「～を」より「～と」という助詞を、「取り扱う」より「ぶつかり合
う」のような動詞を呼び寄せるべきではないか。問題に境界の線を引いてそこから抜け出し、
問題についてぼんやりと論じるのではなく、問題の区切りを絶えず問い続ける「ことば」を確保
するべきではないか。問題は、複雑であるから問題なのだ。複雑な問題は絡み合っ
てあふれ出
す問題である。問題の状況の中に居続けようとする者は、状況を明視することが難しい。状況
は揺れて、状況の中にいる自身も揺れてしまう。ことばが揺れるなら、ことばを以てその揺れ
を伝え、読者をその揺れに招待すればいい。

これまで雑誌を読みながら、このようなことばに信頼を感じて元気をもらってきた。内面の
動揺を伝えることば、問題や困難、これらを取り扱うというよりは、自身の中に置いて経験して
いることば。問題や困難が内側より芽生え出たことば。精神の内面を通過したことば。個性の
媒介を経たことば。自身の苦しみとして獲得したことば。呑み込んで吐き出したことば。このよ
うなことばだと感じられた時、心に刻みつけるようになった。

もっともらしいレトリックを引っ張ってきて思考の弱みを隠すのでなく、むしろ文は自らの無能さを告白する際、最も堂々たるものとなる。流動する問題を〇〇論としてまとめ、鳥瞰図作りを楽しむ者には食って掛かってみたい。「私は知っている」ではなく、「私はやりたい」が聞きたい。書き手の個人的好みではなく、個体としての悩みが知りたい。このような文章は、モニター画面越しに、ある具体的読者を意識してこそはじめて書ける。このような文章は、読者である私に近づき、私自身に対する問いを生み、経験として増殖する。このような文章を経験することができれば、一冊の雑誌を読むために夜を徹しても惜しくはない。

私は呼吸が短くなり思考の気力が尽きた時、しばしば雑誌を開く。最近発行された雑誌の中に適当なものがなければ、古い雑誌でもよい。時には季節外れの雑誌の方がよりよい。本当の意味で過去の問題であったのなら、現在も考えるべき課題であろう。複雑だから問題であり、問題だから再び思考しなければならない。この雑誌は、過去の問題にもっとしつこくこだわっても良いのではないだろうか。既に懸案事項としては時間切れとなり、新聞などのメディアはとっくに手放してしまったその後に訪れる時間、それこそが雑誌の時間と呼べるのではないだろうか。現実的事件としては過ぎ去ったとしても、思想史的出来事としてはまだ熟してない。雑誌は出来事を思想化しようとする使命感によってふたたび過去の出来事に迫ることができる。そして、そこで考えるべき課題を汲み上げ、これからの時間の中において再び読み返せるように整える。そのようにして過去と未来をつなぎ2度目、3度目の読解を呼び起こす。それが、雑誌が本質的に雑誌として読まれる瞬間ではないだろうか。雑誌は、新聞より長い時間帯ではなく、異なる時間帯を生きていくべきである。そうであれば、雑誌の雑性もまた、テーマ、立場、形式だけでなく、時間の雑さであるべきだ。私は雑誌の誌とは、このような時間帯の形成と関わる文字だと考える。

6.

今日、ことばは益々薄っぺらなものになっていく。ことばの意味は急いで画定される。ことばの展開がすぐに遮断される。そのようにして、ことばは反応にとどまるだけである。反応に迫られ、思考が不可能になる。思考とみなされるものまでも反応にとどまってしまう。このような時代に雑誌は、世界の問題を個体に伝えるメディアであることを超え、間世界になることを企てなければならないかも知れない。思考の関係、ことばの力を増していく場になろうと努力しなければならないかも知れない。抽象的な話ではない。思考して書いて読んで論じ、読んで論じて思考し、再び書き直しながら一つ一つ自分の時間・空間を編み出していくことである。ところが、そのような雑誌の可能性が、ひょっとしたら雑誌の物理的形態と読者の行為的様態に既に潜在しているのではないだろうか。

「広げること(explication)」と「折り畳むこと(implication)」。読者は読むために雑誌のページをめくらなければならない。雑誌の「広げること」、それは雑誌の「折り畳むこと」から始まる。一枚一枚が集まって一冊の雑誌として包まれている。一枚一枚は広げられるのを待っている折り畳み、概念的には「しわ」である。雑誌を広げるというのは、しわの中に立ち入ることである。私は時折、雑誌のしわにはまって、自分の通念から外に出る扉を見つけた。雑誌の中に深く入り込むには、時には自分に深く入り、また時には自分から遠く離れなければならなかった。雑誌のしわは自分のしわと巡り合い、雑誌を広げることは自分を開くことであり得た。しわが深いほど広げることは強烈であり、雑誌－経験は深く刻まれている。

雑誌－経験がもし、藤田省三が語った試練であり得るとしたら、その理由も雑誌－読みがしわの中の迷いと抜け出しを伴うからであろう。折り畳むこと(implication)と広げること(explication)という雑誌－運動。そのため雑誌はその版型より広く、厚みより深い。

7.

ところで、この雑誌はウェブで具現されるという。この雑誌は折り畳まれていない。おそらく、マウスを動かしながら読まれるだろう。したがって広げることの感触、しわとの対面を期待するのは難しい。では、このフラットな空間には、しわだらけの紙とは異なる、どのような可能性が潜んでいるのだろうか。

紙の雑誌を読みながら、このような夢想をしたことがある。雑誌を「雑紙」として作ってみたいという夢想とも言えるが、つなげて考え、書きたいという強烈な文に出逢った時に起こる衝動のようなものである。その文に下線を引いたり、他のところに書き写したりするだけでは満足できない。その文に続けて書き重ねたい。別の文章から文を引っ張ってきて再編集したい。(筆者がそれを望むかは分からないけれども)それらの文は、実験されることを望んでいるかのようなのである。読者に、やれるならやってみろと言っているようである。そのような文が多くある雑誌は、私の夢想の中で元の形態から離れて、ますます雑なるものとなる。雑紙になっていく。

ところが、紙の雑誌の文には下線を引くことはできても、その上に考えたことを書いたり、そのページを裂いて他の文章とつなぎ合わせたりすることは難しかった。印刷された紙を、わざわざぞんざいに扱うことはできなかった。だが、雑誌の紙の「わざわざできなさ」が、窮屈だ

ったのではない。ウェブ雑誌では「わざわざできなさ」から自由になってもいいのではない。そして、それは読者である私がまさに、雑誌の紙に望んでいた夢だったのではない。

私は先に、紙の雑誌を広げることは読者である自分自身を広げることでありうる、と言った。ところで、雑誌を広げることは、場を広げることにもなり得るのではないだろうか。ウェブの雑誌、まして MFE(多焦点拡張主義)では、こうした可能性をより意識的に探ってみることはできないだろうか。最後に、多焦点拡張という運動を可能にする雑誌の形態とはどのようなものかを想像してみたい。

繰り返すが、雑誌は「(書き手が)思考するー書くー(読み手が)読むー論じる」という動詞と結びついている。一冊の雑誌はこれらの動詞を経過していく。さて、それを一度切りに留めるのではなく、再び「思考するー書くー読むー論ずる」を雑誌に経験させることはできないだろうか。ウェブ雑誌なら、筆者は発信、読者は受信、という一方的な関係設定を乗り越えることが可能かもしれない。書き手には思いもよらない問いが読み手によって付け加えられ、その問いかけによって書き直され、再形成された雑誌がまた読み直され、また新しい問いかけと声に出会い…… このようにして他者の悩みを他者が引き継いで時間が蓄積され、文が増殖する雑誌。他者の介入を経由し、一個人の作品であったはずの文章が解体され、再構築されて文章が散乱する雑誌を試みることができるかもしれない。

多焦点拡張の雑誌。一冊の雑誌があちらこちらで異なる問いを生み出す。文章の問題意識が読者の置かれた状況により再設定され戻ってくる。文章が色々な声として反響する。こうした出来事を経由して雑誌自体が次第に変わっていく。ウェブ上の雑誌においては、こうした雑誌ー経験と雑誌ー運動をより意識的に実験できるのではないだろうか。私は雑誌ー運動を人と人とのつながりとして、雑誌の中の文が増えていく時間を、雑誌が切り開く雑なる空間と関

連すると考えたいのだ。この時、雑誌の雑性とはテーマ、立場、形式の多様さのみならず雑な関係－空間(ヘテロトピア)をも意味するだろう。

＊

新たな雑誌、MFE という名前の雑誌の出現を歓迎したい気持ちゆえに、たくさんの問いを取りとめもなく述べてみた。この雑誌は誕生したばかりである。志向性も定まらず、形態も現れていない。私は読者として、この未決定の状態がもう少し持続すればと望む。そしてその未決定の時間の中で、雑誌のことば、雑誌の時間、雑誌の空間、雑誌の関係、雑誌の運動が、この雑誌において改めて思考されることを願う。なぜなら、雑誌のための思考は雑誌だけのための思考ではないからだ。剥奪されていく我らの精神的な生を、いかに取り戻すかとも関わるからだ。

オリジナリティへのオブセッションと私と新しい雑誌

永岡崇

駒沢大学

新しい雑誌をつくる、今ふうにオンラインで、『MFE(多焦点拡張)』というなにやら格好いいっぽい感じだが意味はよくわからないタイトルの雑誌をつくる。しかも韓国語と日本語のバイリンガルをめざしている。いろいろとかなり気合いの入った感じである。

準備号のためにちょっとした文章を書こう、という話になり、さて何を……と考えると、なかなか言葉が出てこない。新たな雑誌にふさわしい、独自でユニークで(同じか)革命的ななにがしかを書くべきであるような気がするのだが、独自でユニークで革命的な引き出しが自分にあまりないことに気づいて立ちどまってしまうことになる。しかし、それを個人的な能力や資質の問題にしてしまわずに、みんなで共有できる話題にすることはできるかもしれない。ここはひとつ、そういう方向でこの小文を書いてみよう。

はじめて「論文」と名のつく文章(卒論)を書いて、「研究」なる営みをはじめてから、いつの間にかもう15年以上が経っている。この間、「研究」をして「論文」を書こうとすると、いつも頭

の端っこの方にちらつく文章がある。『差異の政治学』(2002年)という本に収録されている、上野千鶴子さんの「〈わたし〉のメタ社会学」のなかの一節。

〈わたし〉が立てたほどの問いは、すでにだれかによって問われており、答えられているのではないか？ その問いと答えは、〈わたし〉の問いと答えと、どのように同じでどのように違うか？(『差異の政治学 新版』岩波現代文庫、2015年、416頁)

先行研究との向き合い方をめぐる心構えみたいなものが記されている。小説や詩をつくるのとは違い、「研究」においてみずからのオリジナリティを確保するためには、先行研究を読み、こうして自分自身に問いかけなければならない、という趣旨だったはずだ。論文全体の流れは忘れてしまっていて、この部分だけが脳裡に刻み込まれている感じなのだが、修士課程の僕はこれを読んで「学問って大変なんだなあ」と素朴に思ったしだいである。以来、なにかを考え、書こうとするときにはいつもこの問いかけを思い出すようにしてきたような気がする。

上野さんの言っていることは、基本的に正しいと思う。学問というものは、こうした作法をつうじて、多くの人びとの共同作業というかたちで積み重ねられてきたのだ。ただその一方で、この問いかけは一種の自己検閲の作業であり、芽生えかけた「〈わたし〉が立てたほどの問い」を封殺してしまう力ももっている。さきほど僕が新しい雑誌にふさわしい、オリジナリティにあふれた文章を書かねばならぬと気張ろうとして行き詰まってしまったのは、15年あまりの間に内面化した自己検閲装置が作動したからにほかならない。昔はもっと気楽にものを書けたような気がするのだが、「論文」を書くために身につけたアカデミアの作法によって、むしろものを書けない人間になってしまっているのではないか、と思うときがある。

それはさしあたり個人的な感覚なのだけれども、問題になっていることはもう少し一般化できると思う。たとえば僕よりも「研究」歴の短い人の場合、この自己検閲装置はまさに形成途中であるかもしれない。指導教員や先輩研究者の指導とか、投稿論文の査読、研究助成の申請などといった儀礼をつうじて、アカデミアの作法が諸個人に流れ込んでいく。それは先行研究云々ということだけではなくて、中立性・客観性とか、実証性とか、その他「論文」にふさわしい総合的なスタイルの確立、といったことになるだろう。

もちろん、そうしたトレーニングのあり方自体が悪いわけではない。こうした作法の共有をつうじて、学問は多くの人びとの共同作業として積み重ねられてきた。野球やサッカーでルールの遵守が求められるように、一定のルールの枠内でこそ、「研究」というゲームが有効に機能するという側面がたしかにある。だが一方で、そのフォーマットにうまく乗らなかった問いや思考が傍らに打ち棄てられてしまうこともまた事実だ。

ここでこだわっておきたいのは、そうした問いや思考—ありふれている(かもしれない)問いやどうでもいい(かもしれない)思考—をもう一度掘りだす可能性についてである。といってもそれは、手っ取り早くアカデミアの「外」に出ればいいという話ではない。もちろん「外」に出て、SNS やブログを使って自由に発信すること、あるいは商業的媒体に活路を見出すこともできるし、それはそれで大切である。しかし、それがアカデミズムの権威主義(それを解体しようとする努力もつねになされている)vs. 在野の反権威主義(それ自体もやはり疑わしい)といった二項対立的図式を再生産するだけなら、あまり面白くない。アカデミアの周縁を歩きながら、外側と内側をつなぎ、境界を拡張するような言論・談論の場がありうるべきであり、これまでもそうした場の構築は試みられてきたのだと思う。そして『MFE』もまた、そうした役割を担いうる可能性をはらんでいるのだと考えたい。

たとえばこの小文は、アカデミックなオリジナリティへのオブセッションという話から出発した。コロナをめぐる諸問題であれ、公文書管理をめぐる問題であれ、それまでに積み重ねられてきた議論を精査し、それらとの差分を示しながらなにがしかを新たにのべなければならないような自己検閲の感覚(僕だけかもしれないが、僕だけではないかもしれない)。しかし、べつにそれほどオリジナルでない議論の場があってもいいのではないだろうか。というか、強迫的にオリジナリティを追求するのではなくて(だからアカデミックなスタイルを打ち破らなければならないという強迫観念にとらわれる必要もない)、ひとりひとりのありふれている(かもしれない)問いや思考を率直に差し出し、それが誌面をつうじて共振や違和を生み出すことで、独特な関係性を紡いでいくこと。そこに集団的なオリジナリティが生成するなら、それはそれで面白いのではないだろうか、という気がする。その過程で、ありふれている(かもしれない)問いや思考は、じつはありふれてなどいないのだということが明らかになるのかもしれない。

しかしこれは、いうまでもなく、なんでもかんでもいい加減に書けばいい、という意味ではない。書くときには、やはり自分なりの真摯さをもって調べ、考えなければならないし、それが真摯な批判を受ける機会も確保されなければならないだろう。そのあたりの塩梅が難しいのだが、そこに『MFE』における編集委員会や査読というものの役割があるのだと思う。これからどのような原稿が集まるのか、査読や編集がいかなる営みとなるのか、まったくの未知数である。ただ少なくとも、ありもののアカデミアの作法を機械的に適用するというかたちの査読や編集で、この雑誌の初志が実現しえないことははっきりしている。寄せられる原稿に問われながら、来るべき「多焦点拡張」を協働的に創りだしていくほかはないのだ。いずれにせよ、この茫洋とした試みに付き合ってくれる人びとが現れないことにはなにも始まらない。新たな場づくりへの参集を求む。

『MFE』オンライン集会に 参加して

竹原明理

雑誌『MFE』が立ち上がると聞いて、普段とは異なる世界に接続できることを嬉しく思うと同時に、自分自身の「小さな言葉」(「MFE(多焦点拡張)にようこそ」呼びかけ文より)でさえ発することに躊躇を感じる場面が多くなっていることにも気づきました。特に、「自由に発言する」ということが普段の生活の中であまり無いのかもしれないと感じたのです。それ故、自分の言葉をどのように紡ぎ、『MFE』の場へ送り届けたら良いものか迷ってしまいました。この迷いは、今の自分がアカデミックな場ではなく行政の一組織に身を置いていることが大きく影響していると思います。今まであまり自覚がなかったのですが、「こんなことを言うてはいけないのではないか」という感情が自分の中で意外と大きくなっているのだと改めて知りました。だからこそ、『MFE』という場への接続が大事なのだとも今回強く感じた次第です。

私事ですが、地方の公立博物館施設に学芸員として着任して6年が経とうとしています。現在の担当分野について本格的に、専門的に学んできたわけではないため、基本的な調査の方

法から学ばなければならない場面が多くあります。専門用語や作品の取扱いもまだまだ知識・経験共に不足しており、なかなか独り立ちできずにいるところです。専門外であるために立ち入ることの出来ない領域がある一方、専門外であるからこそ異なる視点を持って臨める場面もあるかも…とすき間産業的な企画を温める(書いては消し、書いては消す)日々を送っています。

とはいえ、この6年の間に博物館施設や文化財を取り巻く状況が大きく変化しつつあることは末端にしながらも実感するところです。さまざまな法整備が行われ、最近では、文化財保護法の改正(2019年4月1日施行)や「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律」(文化観光推進法)の施行(2020年5月1日)などが挙げられます。指定／未指定、無形／有形にかかわらず各地域のさまざまな文化財を「文化資源」や「観光資源」と捉えて「活用」し、国内のみならず「インバウンド」の拡充に資するためのさまざまなコンテンツが計画・実施されているところです。

特に、本来であれば2020年に開催される予定であった東京オリンピックに合わせた動きは大きな波になっていました。以前から、観光や経済の観点からの地域振興を目的とした「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」(地域伝統芸能等活用法。1992年9月25日施行)や「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」(歴史まちづくり法。2008年11月4日施行)、「日本遺産」の認定(2015年～)などさまざまなものがありましたが、今後もこうした動きは拡大・加速するものと思われます。直近では、改正された文化財保護法に基づいて各都道府県による「文化財保存活用大綱」の策定が進められ、その下で市町村は「文化財保存活用地域計画」を作成することとなってい

ます。こうした動きに各種博物館施設がどのように関わっていくのか／いかないのかは、地域によって大きな違いがあり一様ではありません。

地域の文化や文化財をさまざまな「資源」として「活用」していく動きは、今まであまり知られていなかった地域の歴史が再発見されたり再認識されたりするという場面においては良い機会であると思います。しかし運用の仕方によっては、それらが単純に資源としてのみ消費されてしまったり、表層的な部分のみが注目されたり、歴史的な根拠がよくわからないストーリーが出来上がってしまうのではないかなど、多くの懸念事項があることも事実でしょう。

こうした文化財を取り巻く状況が種々変化している中で、この度の新型コロナの世界的な感染拡大が起きました。ほとんどの博物館施設は開催中あるいは開催を予定していた展覧会の中止や延期を決定し、一定期間休館しました。それぞれの施設においては、再開までさまざまな逡巡があったでしょうし、その決定のプロセスもまたそれぞれにおいて異なっていたでしょう。中には再開を断念せざるを得なかった施設もあります。

「MFE(多焦点拡張)によこそ」と題された呼びかけ文には、「ものを考え、書かれた文章を読み、一緒に話し合い、人の声に耳を傾け、研究し、議論することをいかに続けていけばいいか」、「宣言や命令とは異なる言葉の在処から、私たちが生きていく世界をつむぎだしたい」と記されていました。「そういうことは考えないほうが楽」と度々アドバイスを受けてきた自分の中に絶えずある違和感や、時に抱いてしまう怒りや悲しみのような感情や意識は別に捨てなくてもいいのだと、今回のオンライン集会に参加して思えた気がします。もちろん「難しいな」と思う場面も多くありました。けれども、さまざまな環境に身を置く他者と接続でき、考えたり議論したりする場を確保し、考える行為を止めない人たちがいる場所…『MFE』とはそういうと

ころなのかなあと感じます。そして、そんな場所を求めている人は意外と多くいるのではない
かと思います。

鉄格子の中の声

謝花直美

新聞記者

「ブレイク・ザ・ストーリー」

コロナ禍の自粛制限の期間中、勤務する新聞社では、オンライン取材が推奨され、懇親の制限が続いていた。大学の非常勤の講義も全て、オンラインになった。職場によって規制状況が異なる友人たちと、調整が非常に難しく、月1度集まることもできず、オンラインで顔を合わせるにとどまった。こうした規制を、「戦争」と重ねる表現が、メディアを通して、しばしば聞かれた。感染症の治療や予防は、戦争ではない。だが、「一丸となって」取り組まないといけないことが、戦争や戦時下になぞらえられ、異論を排除する空気が醸成されていた。こうした動きには、沖縄戦を取材した経験からも、違和感を抱いた。しかし、視点を共有することはできず、もっぱらコロナの発生や経済的な影響など、起きている状況の報道に走っていたと思う。

そんな、フラストレーションを抱えていた時に、レベッカ・ソルニットの新刊『それを、真の名で呼ぶならば 危機の時代と言葉の力』（岩波書店）を読んだ。その中に、ジャーナリズム専攻の大学院生に講演した文章「ブレイク・ザ・ストーリー」があった。「ブレイク・ザ・ストーリー」とは従来、報道の特ダネを意味するという。しかし、ソルニットは、この言葉を次のような実践伴う言葉に意味付けなおした。すでに書かれた表層のストーリーを「こじ開け」「ときほぐし」、新旧のストーリーの関係を理解し、社会を動かす「支配的物語」が、誰か別の者を閉じ込める鉄格子になっていないかを問いかけること。記者は、閉じ込められた誰かの場へ行き、耳を傾け、そのストーリー

ーを「解放すること」が求められる。さらに時には社会を変える力とすることを期待する。それこそが「ブレイク・ザ・ストーリー」であると。

ソルニットは、新聞やテレビなどメディア企業が、送り出すニュースが短期的な変化しか記録しない問題も指摘している。ある事件が起きた場合、その当事者が抱えている経験は、短期的な変化を対象とするニュースを通してみるために、「穴あきだらけの」歴史であるという。記者たちが、メディア企業の中で、現状維持バイアス、権力者や機関を取材するという習慣に安住すれば、「ブレイク・ザ・ストーリー」とは、メディア企業間の競争でしかない。ソルニットは、こうしたニュースが重ね書きされることで、形成する「支配的物語」に記者が気づき、それによって隠されたストーリーを見出し報道することの重要性を伝えているのだ。

しかし、現状はどうだろうか。その人の苦しみや悲しみに触れたことが取材のきっかけであるにも関わらず、記者の認識できる範囲内で書かれた収まりよい記事によって、人々の経験が断片化されてしまうこと。権威や機関を取材することが実は対峙するという特権性に立っていること、その立場は人々の信頼の負託されたものである事を忘れ、書かれるべき人々の姿がき消えてしまうこと。人々から浮遊した空中の楼閣のような多くのメディア企業で、こうした記事が書かれ続けている。

2つのバーベキュー

7月4日、米国の独立記念日。沖縄島中部のうるま市の公園で、米兵や軍属ら数百人が、バーベキューパーティーを開いている。独立記念日の前後、米軍はコロナの警戒を緩めており、基地外での飲食は許されていた。この時期を機に、米軍基地内で、コロナ感染者が急速に広がっていった。クラスターが各基地で発生し約1カ月で、それまでの沖縄の累積感染者を追い越す事態となった。米軍のコロナ対応のほころびが、次々と明らかになっていった。地元自治体に連絡しないまま、基地外に、米国から異動してきた者の一時隔離施設としてリゾート・ホテルを

借り上げていた事、また感染者数は非公表としていたが、沖縄県とマスコミの強い要求で一転、公表されるようになった。

最も大きな問題は、日米地位協定の検疫の問題だ。米兵の間に感染が拡大していた時期、日本はコロナの水際対策として、海外からの入国を制限していた。それ以来、多くの観光地同様、沖縄でも海外観光客の入域はゼロが続いている。しかし、その対策には、日米地位協定という大きな抜け穴があったのだ。沖縄県がこうした問題を訴えても、政府は対応をしなかったが、同月に羽田から入国した米軍関係者が虚偽申請で米軍岩国基地のある山口県へ民間機で移動した事が判明した。政府は、この件で会見を開いたが、この時、沖縄で起こっていたことの地位協定上の問題に気付いたといえるだろう。米国から米軍基地に直接入る場合は、日本の検疫制度は適用されないことが日米地位協定で定められている。7 月は、米国で 2 万5千人が死亡し、感染が急拡大していた。米国から異動してきた米兵たちは、基地内外を自由に出入りしていたのだった。米兵が乗車したタクシーの運転手が感染するなど、基地周辺では次々とクラスターが発生し、沖縄の人々に強い衝撃を与えた。

うるま市のバーベキューパーティーより数カ月前の4月、宜野湾市の米軍普天間飛行場から、発がん性が指摘される有機化合物PFOSを含む泡消火剤約 14 万リットルが流れ出し、フェンスの外の河川を泡で汚染した。住宅地には、大量の泡が浮遊するという事態が発生した。当初、地元消防は、PFOSを含む泡消火剤とは知らずに、除去作業をしなければならなかった。しかし、政府は、事故原因を調べるため 2015 年に決められた日米地位協定の環境補足協定に基づいて初めて、普天間飛行場に立ち入りをしている。しかし、水の採取が認められただけで、米軍は土壌のサンプリングを拒否している。当初から調査を求めていた沖縄県や宜野湾市には、政府の立ち入りは知らされておらず、後に別に調査を行っている。泡消火剤流出から半年近くもたった 9 月、米軍が公表した原因は、格納庫から数メートルの距離で、米兵がバーベキューをしたため、消火装置が反応したというものだった。誤作動した消火器を止めることもできず、約30分もの間、泡消火剤がまかれ続けた結果、基地の外へ流れ出したのだった。コロナ対策の行動制限にあった米兵の、「士気高揚のため」格納庫近くで、バーベキューを行ったという。

コロナの拡大と、PFOSの流出。それにバーベキューが関係していたこと。重大な事件の根源にある、この日常性は何だろう。沖縄の人々が夏に浜辺で楽しむ「ビーチ・パーティー」は、占領下に米軍の豊かさを模倣し、沖縄の文化として定着したものだ。しかし、バーベキュー、1つからも、米兵や軍属の日常が映し出すものは、沖縄社会における特権性である。今回の出来事は、事件や事故、爆音のようにこれまで問題視されてきたことに加えて、米軍によってもたらされる見えにくい被害が、目に見える形になったというのが大きい。

米軍と感染症は、沖縄戦前から大きな課題であった。米軍はマラリア対策などを重点的に行いながら、占領に着手している。それが、反転した事象が起きている。それは、米軍由来の感染症だ。ベトナム戦の最中、米国で1964年に流行したのと同時期に、沖縄でも風疹が大流行した。赤ん坊が母親の胎内で感染すると、聴覚障がいをもたらす風疹は、沖縄でこの年、突然感染者が増え、その結果、339人の聴覚に障がいのある子どもたちが生まれた。これらの子どもたちのために、1970年代末には、野球部の甲子園の挑戦が映画された、県立北城ろう学校が創立されている。当時の子どもたちは、現在は50代半ばを迎え、親や教師による記録誌作りが現在進んでいると聞く。米国での風疹の流行と、沖縄を中継した多くの米兵がベトナム戦争へ行ったことの関連性は、これまでも関係者たちが指摘している。今回の米軍基地とコロナ拡大の問題を受けて、若林千代が書いたように(「占領と感染症——沖縄現代史における二つの病い」『現代思想』2020年8月)、沖縄の人々はあらためて、当事者たちとともに、占領と1964年の風疹の経験に向き合う必要がある。

政治の言葉

8月、那覇軍港の移設先について、浦添市は長年反対してきた「北側案」を受け入れ、那覇市と那覇港管理組合と合意した。那覇軍港の移設は、1974年の返還合意から、1996年の日米合同委員会で浦添地先への移設、2001年の浦添市の受け入れ表明という長い年月を経ている。辺野古新基地建設を巡り、新しい基地を認めないという立場の翁長雄志前知事時代か

ら、那覇軍港は、移設後も機能が強化されるわけではないため、辺野古のような新基地ではなく、「代替」施設であるとされ、現県政もこの方針を引き継いでいる。こうした事もあり、地元の市民団体が反対の声を長年上げ続けても、辺野古と異なり全県的な反対という声はあがってこなかった。

しかし、状況は少しずつ変わりつつある。2018年、浦添市の米軍牧港補給地区(キャンプ・キンザー)と海側の間に、西海岸道路が開通したのだ。それまでは地図上でしか知らなかった那覇軍港の予定海域、フェンスの向こうで見るができなかった海の美しさを、沖縄の人々が直接触れることができるようになったのである。那覇方面から行くと、牧港補給地区と海の間を、約2キロのまっすぐ伸びた道路が宜野湾市へと続いている。その途中にあるショッピングセンターを訪れた人は、この美しい海をみながら散策をする。橋の上からは、透き通る海とサンゴ礁が見渡せる。宜野湾市との境には、浦添市港川の「かーみーじー(亀瀬)」と呼ばれる浜がある。地元の人びとが長年、潮干狩りや釣りといったレクリエーション活動、環境保護を地域で行う「里浜活動」を通して、地域づくりに取り組む。3年前には浦添市は「里浜条例」も制定している。生活の香りがする海岸、夕日が美しい海岸が、実はフェンスの向こうにあったことを、人々は直接訪れるようになることで知ったのである。機能が增えるわけではないから、新しい基地ではない、そういう政治の言葉と、目のあたりにする美しい海のギャップ。「代替」施設によって、かけがえのないものが壊されていくことを、この風景がはっきりと示しているのだ。それに気付いた人々は、徐々に那覇軍港移設の反対の声を上げ始めている。

かつて、沖縄戦時に接收された読谷村の米軍読谷補助飛行場の返還を取材した時のこと。20代の時、数人の仲間と資料集めから返還問題に取り組んだ男性の話を聞いたことがある。取材をした当時はすでに返還された土地に、農業生産法人が次々と設置され、広大な農地が

広がっていた。ほくほくとした畑にたった男性はその時 70 代。いつも穏やかなその人は、返還運動とは、「人ひとりの一生を喰う」と呟いた。その言葉が、いまでも心につきさっている。浦添地先へ移設が予定される那覇軍港は、1945 年の沖縄戦の最中から、米軍が浚渫し、拡大された。その時、那覇市の垣花と呼ばれた港町が潰されて、海の底に沈み、集落があった地域はコンクリートで固められ灰色の埠頭となった。帰郷できない 2 万人近くの垣花の人びとは、那覇軍港で働く那覇港湾作業隊として一部の人びとが那覇に戻ってきたが、今でも那覇市内の別の場所や他市町村に離散したままだ。現在浦添地先への移設を前提に、那覇軍港の跡地利用計画の着手が進んでいる。沖縄戦以来、戻れなかった垣花の人びとが、どのようなコミュニティを再生させるのかという夢を描いているのである。新しい基地だろうが、代替施設であろうが、米軍基地問題は、「人ひとりの一生を喰う」。喰っても終わらない、そんな時間を人々に強いてきたし、今のままでは、これからも強いていこうとしているのだ。

現在の那覇軍港の対岸は、かつて那覇の中心地だった。1853 年 5 月、米海軍提督ペリーが、琉球国開港などを求めて来琉し、乗員が那覇に滞在した。この時、1 人の水兵が、酔って民家に押し入り女性を強姦した。地域の人びとに追われ、溺死した。水兵の名から「ボード事件」として琉球史で知られるこの事件は、1995 年の「米兵による暴行事件」を機に、沖縄で初めて起こった米兵による強姦事件とし読み直された。「基地軍隊を許さない行動する女たちの会」の宮城晴美は、近代から沖縄戦、占領期から現在まで米軍関係の性暴力事件を調べている。琉球史が、ボードの死を政治上の問題として、水兵の名前で記憶した「支配的な物語」によって、鉄格子に閉じ込めてきた女性を、宮城は解き放ったのだった。誰のための歴史なのか、現在を生きる上でどのような歴史が書かれていくべきなのか、それが問われているのである。

米軍が優先する社会で、鉄格子の中にある、沖縄の人々の生。その中の「支配的な物語」に、さらに閉じ込められたままの人々の姿。こうした「穴あきだらけの歴史」を理解するには、現在社会の中で、沖縄の歴史を学びなおし、何度もその場と現在を往還することが必要だ。そうして、初めて自らが立つ場所が確かめられ、何をなすべきか見えてくるのではないだろうか。コロナ禍の今だから思う。

「未来は明日を生き抜くものに」 —— 異邦人のチョコレートと ルワンダからの退避について

近藤有希子

私のおばあちゃんは、もうすこし呆け始めている。彼女はこれまでルワンダ南西部の農村に暮らしていて、2011 年から断続的にその家に滞在する私が、何不自由なく、安全に過ごすための細やかな心配りを欠かさなかった。高齢になったいま、彼女は首都近郊に暮らす息子の家に移されて、今年も変わらず私のことを全身で抱擁して出迎えてくれる。ただしそれは、晩年になってから馴染みのない都会に連れ出され、一日の大半をぼんやりと過ごすことが多くなった彼女だから、できたことでもあるだろう。

2020 年 3 月、すでに世界は新型コロナウイルス感染症の脅威に晒されていた。ルワンダ共和国も例外ではない。2020 年 3 月 9 日にルワンダに向けて飛び立った私は、一瞬でことの異様さを感じ取っていた。近年のアフリカと中国との関係強化を思えば、圧倒的に少なくな

っていたアジア系の乗客。首都キガリの国際空港到着ゲートに待ち構えた白衣に身を包んだスタッフと、タブレットを片手に乗客一人ひとりに対してなされる入念な問診(写真1参照)。せっかく機内で親しくなったのに、入国時におそらく検査のために病院送りとなつて、はぐれてしまった初老の男性。



写真1：入国審査前の問診(2020年3月10日)

入国した4日後の3月14日、ついにルワンダでも一人目の感染者が報じられた。インド人の男性だという。末端まで統治の行き届いたルワンダにおいて、そこからの展開は早かった。翌日の日曜日にはルワンダ全国の学校および学生寮が閉鎖になり、教会の礼拝をはじめとする各種集会も禁止となった。ほとんどの施設や店舗には、とくに手洗い用の水タンクが設置されており(写真2・3参照)、16日に立ち寄った携帯ショップでは、店員がゴム手袋にマスクを着用し、客に間隔をあけて座るように指示していた(写真4参照)。大統領が大衆に手の洗い方



写真2：バスセンターに設置された手洗い場
(2020年3月10日)



写真3：土産物屋の前に設置された手洗い場
(2020年3月15日)

を指南する動画が作成されたかと思えば、サイモン＆ガーファンクルの "The Sound of Silence" が "Fighting the Virus" と替え歌されて、人びとの笑いを誘いながら拡散されていく。私を含むアジア系の人物に対して、レストランのウェイターが放り投げるようにメニューを渡してくることもあれば、路上でのすれ違いざまに「コロナ！」と吐き捨てるように呼びかけたりすることもあったという。



写真 4：マスクとゴム手袋をつけて対応する携帯ショップの店員（2020 年 3 月 16 日）

雨期に入りはじめる 3 月、ルワンダではいつものように雨が降っていた。とはいえ、その数か月前のクリスマスには、乾期であるにもかかわらず大雨が降り、キガリの家々が流されるというおかしな出来事が起こってもいた。そして、社会における人々との距離の取り方もまた、私が到着したときにはすでに変わり始めていた。たとえば、久しぶりに再会した親しい者同士で交わす長い抱擁は、各人が自分の両掌を握るか、もしくは両者の肘をぶつけるというかたちにとって代わっていた。この 3 月の滞在中に私が挨拶のために抱擁したのは、片手で事足りるほどの数でしかない。そのわずかな人も、大

半は、どこか深いところで不安の気配を纏っていたことは否めない。

現在おばあちゃんが暮らす首都近郊の息子の家を訪問したときには、寮の閉鎖に伴う学生の大移動に巻き込まれてキガリ行きのバスの空席が見つからず、私は宿への帰宅を半ば諦めていた。しかし感染の可能性のある外国人をこれ以上家に泊めるわけにはいかないと感じて

いたのだろう、家の者たちは帰るための方途を必死に探して私を送り出してくれた。いつもなら、私が「明日帰るよ」と告げた日の夜には、「なぜ？もっとゆっくりしていきなさいよ！」と優しく咎めてくれていたにもかかわらず。

「ルワンダに戻ってきたよ」と電話をすれば、「明日にでもうちに来なさいよ！」と言って、数日先まで予定の入った私を嬉しくも困らせていた長年の友人もまた、この 3 月には、「そういえばユキコ、ルワンダに来て何日目なの？」と電話越しに確認してくる。一週間が経ったところだと告げれば、「いい？来週になったらうちに来て。ほら、いまはこんな状況だから…」と申し訳なさそうに渋ってみせる。彼女は秋に、第一子を産んだばかりだった。

それらの反応はすべて、このような時期にルワンダへの渡航を断行した私の身勝手な行動に伴う当然の帰結である。親しい者たちの反応を見て、私は毎年通い続けているおばあちゃんの故郷の田舎に行くことを断念した。私の滞在の前後に村で調子を崩す者がいても、病院へのアクセスが容易ではない地方において、それがなんの病気であるかを特定することは難しい。仮にそれがかれらにとっては身近な—例えばマラリアのような—病気だったとしても、それは外から来た私が持ち込んだなにか—つまり、コロナ—として想起される可能性は高い。私が訪問すれば、両者が敏感にならざるを得ない状況をつくりだしてしまうことは疑いようがなかった。

「私」という存在が、だれかの脅威の対象となってしまうこと。とくにそれが、親しい「あなた」の脅威となってしまうということ。1990 年代前半の紛争と虐殺を経たセンシティブな社会情勢を照らしてみれば、調査を遂行する際にそのような具合の悪い感触に出会うことは、これまでも稀ではなかった。しかし、ここまで明瞭な私たちで、みずからの身体が向かい合う相手を脅かす可能性を有するものとして眼前に提示されたことは、おそらくなかった。

こうしたなか、もう何度も同じ発言を繰り返すようになったおばあちゃんだけは、多分、世界を騒がせているウィルスのことを知らないままにいる。喜怒哀楽も薄くなり、私のことも、おそらくはもう忘れそうになっている。それでも彼女は、鮮やかなキテンゲ(アフリカで普及しているプリント布)の衣服に身を包んで私の到来を待望し、私の姿を認めるとすっかり細くなった腕をこちらに寄せる。そして、華奢になってもぶれることのない身体をいっぱい開いて、長い抱擁を交わしてくれるのだった。

夕食前、お土産に渡した抹茶味のチョコレートを、彼女は静かに口に運ぶ。とくに大きな反応をするわけではない。しかしそのまま、いくつかを続けざまに食べている。気に入ってくれたようだ。しばらくすると食べていた手がふいに止まり、残りの数を一つひとつ几帳面に確認してから、袋の口をきゅっとしぼる。そしてお酒ですこし饒舌になった彼女の口は、つぎのように言うのだった。

—*Iby'ejo bibara ab'ejo*. 未来は明日を生き抜くもののうちにある。

キガリで、政府の動向を気にしつつあった3月18日の晩。ルワンダ政府が突如として、20日以降の国境封鎖を通告した。さまざまな人の協力を受けて、急いで帰国に向けた手続きをおこない、なんとか19日の晩のフライトを確保する。滞在していたキガリの安宿には、気づけば多くの「ムズング(*umuzungu*)」(ルワンダ語で「白人」の意。地域の文脈を共有していないと考えられる者に対して、ひろく用いられる。)が集っていた。複数の大型車が宿に乗り入れ



写真 5：帰国を待つムズングたちの車（2020 年 3 月 19 日）

（写真5参照）、欧米や韓国、日本からの多数の援助関係者が、帰国直前の各々の時間を過ごしていた。

そしてそのとき、私もまた完全に「ムズング」だった。帰国の便までぼっかりと時間のあいた人びとが、日中楽しそうにボール遊びをしたり、深夜まで陽気に飲酒したりする

ことに言い知れぬ感情を抱きながら。帰国する日に大挙して空港に押し寄せたムズングたちに（写真6参照）、映画『ホテル・ルワンダ』で描かれた、虐殺が開始して我先にと退避していく者たちや、「[虐殺の]映像を見て“怖いね”と言うだけでディナーを続ける」者たちの姿を重ねながら。なにより、傍からみれば、そうしたなかにすっかり紛れてしまえる自分の「ムズング」具合に、ただ絶句するほかなかったのである。

帰国当日の朝だった。宿の隣部屋から欧米女性のすすり泣きが聞こえてくる。彼女がなぜ泣いていたのかは知る由もない。未完に終わったプロジェクトへの悲嘆だったのかもしれないし、突然の別れが訪れた恋人でもいたのかもしれない。それでも彼女の泣き声は、行き場のない私のささくれ立った気持ちを、すこし溶



写真 6：ごった返す空港の窓口（2020 年 3 月 19 日）

かしてくれたのだった。そして人はどうしようもないときに泣くのだということ、さらにはそれが万国共通でありそうだということに、私は妙に感じ入っていた。

「未来は明日を生き抜くもののうちにある」。あのときおばちゃんがなぜその諺を呟いたのか、いまでも私は考えている。現在、彼女と暮らす息子によれば、その諺は「多くを求めず、手元にあるもので満足すること」を意味するという。残りのチョコレートを指折り数えながら、おばあちゃんはそこに小さくも確かな楽しみを見出していたのだろうか。わからないけれど、曖昧になりつつある彼女の記憶の隙間に、チョコレートの甘い時間がすこしでも溶け込んでいくのなら、それでいい。

それとも、すこし朦朧とし始めたおばあちゃんが、その諺の意味を忘れて呟いていたならば――。退避という帰還に対してうしろめたさを感じていても、遠く隔絶した世界に生きているということを直視しなければならなくても、惜しみない抱擁を伴う再会がいつになるかわからなくても、生きてさえいれば、私たちは未来をかたちづくっていける――。すくなくともその可能性はあるのだということ、諺の字面は示しているように思われる。世界が困難に満ち始めた 3 月のある日、おばあちゃんはチョコレートを含んだやわらかな声で、そう私に教えてくれた気がしている。

追記：

『MFE(多焦点拡張)』について初めて富山先生からご連絡をいただいたのは、まさにこの退避の最中でした。当時、私の頭はうんと混乱していて、その混乱はおそらくいまだに続いてい

るのですが、新たなメディアの到来に際して言葉を寄せるにあたって、まずはこの 3 月の出来事に自分なりに立ち返る必要がありました。この場を借りて、深くお礼申し上げます。

こころは証明できるだろうか

鄭柚鎮

さる 9 月 14 日、韓国挺身隊問題対策協議会の元代表であるユン・ミヒャン氏が業務上横領、寄付金募集法違反、準詐欺などの疑いで検察により起訴された。

現在国会議員を務めるユン氏は、すべて事実ではないとし、「慰安婦」被害者の心身障害を利用し「女性人権賞」賞金を運動団体に寄付させたといった準詐欺の疑いに対し「被害者の主体性を無視し辱めた検察は責任をとるべき」という声明を発表した。

また被害者の「平和人権運動家としての生が「認知症」と扱われ検察により否定された」とし、「ハルモニの素敵で堂々たる生を友人たちとともに記憶したい」といい被害者の活動の映された動画を Facebook にのせた。これから裁判闘争をとおして全てを明らかにするという。

「医療記録は公開できないが具体的かつ科学的根拠をもって起訴した」という主張と、「認知症ではない」、寄付の意味を理解した「崇高な行為が患者の行動とみくだされた」という応酬がつづいた。

両方の論議は、寄付当時の姿に「不健康」と「健康」というレッテルをはり「騙されたこと」と「主体性」を救いだし、贈るこころの真偽を証明しようとする。

特定の時期の行為は、いかなる方法をとおして明らかにされるのだろうか。こころは、正しさを判定するためのモノになるだろうか。過去のある瞬間は証明しなければならない対象であろうか。

過去の出来事をいまという時空に復元するとは、身振りや目の表情までを専有する意味ではないだろう。女性人権運動が法の審判をまつ目にあったこと自体は争点であるし、また耐え難いことであるのは確かであろうが、こころの状況を埋めつくすことができるかのように、いかに元気だったかを証明しようとする対応は別件であろう。ユン氏により出された映像のなかでの彼女が凝視するのはなんだろうか。

寄付のことをめぐって「認知症のため騙された」という主張と、あくまでも主体的選択だったという主張が力をもてばもつほど、贈る者のこころは身動きがとれなくなり、息苦しさがまししていくようになる。いかなる良心にもとづいたことだとしても、一瞬一瞬のつながりとしての生を峻別できるとは言いきれないだろう。また、強制か同意か二択を迫る法の言語がユン氏と「慰安婦」被害者の運動と生を語るには圧倒的に足りないのは、いうまでもない。

黒か白かといった裁判の言葉に抗うには、過去のことを「過ぎ去った」ものに対する確かめでなく、過去の出来事を現在にとって極めて切迫した問題関心としてかえてゆくような、現在を支配する二項的構図を崩していくような地平を確保しなければならない。そうした努力の過程のなかで客観性という磁場に記憶を一つの材料として定めるやり方とは異なる方法論の手がかりが発見されるかもしれない。

自分の行為が証明の対象になり争われる光景をみた者は、語らなさを選び病という影に身を隠したかもしれない。未だ終わっていないと自分に言い聞かせながら、注意深く「慰安婦」問題とされてきた前提そのものを問うているかもしれないのだ。

自分の居場所を探すこと—— 6月13日の集会によせて

日高由貴

音楽家・研究者

どのような形で文章を書けばよいのかわからないので、とりあえず、この雑誌に投稿されるかたたちや、読んでくださるかたかもしれないかたへのお手紙のような感じで書いてみたいと思います。

6月13日のオンライン集会、楽しかったです。

懐かしいかたたちのお顔を拝見できたのももちろん嬉しく、また、初めてお会いした(オンラインだと「会った」というよりは「観た」という感じなのですが)かたたちのお話もすこし聞かせていただくことができ、新鮮な刺激のある時間でした。

ご挨拶が遅れましたが、2004年に大阪大学大学院文学研究科の博士後期課程に入学し、2011年3月まで在籍していました、日高由貴と申します。

お店やホテルで歌やピアノを演奏したり、生徒さんに教えたりしていて、今年の4月から、大阪にある短期大学で非常勤講師として保育学科でピアノを教えています。

保育士の資格をとる生徒たちに初歩のピアノやコード(和音の記号)などを教える仕事です。もともと教育学部身ということもあり、こどもと教育、とりわけ芸術教育に興味があったので、学んだことをいろいろな形で活かしていけたらいいなと思っています。

前期はピアノの対面レッスンが中止になったため、各生徒に 5 分間の演奏動画を LINE で送ってもらい、こちらからも 5 分以内の返信動画を作成したものを送るというやりとりをしていました。

この動画のやりとりでよかったと思うのは、生徒のほうも、動画を撮影するために何度も撮り直しをしていることが多く、そのプロセスで自ら気づいたり、得たりしたものも、ただ対面レッスンを受けるよりたくさんあったであろうこと、講師の側としても、5 分以内にまとめるためにアドバイスをあらかじめ整理し、何度も編集したり、撮り直したりしたため、自分の話し方や、伝え方について、視覚的にも、聴覚的にも、あらためて見直すきっかけになったことです。

一方で、リアルタイムのオンラインレッスンではなかったため、学生は講師の顔が見えないまま演奏、撮影をしなければならず、とくに一年生は、まだ学校のこともよくわからないまま、講師の顔もわからないまま演奏の動画を撮影してアドバイスを仰がなければならず、かなりプレッシャーが強かったのではないかと思います。

今回のコロナのことで、普段活動しているライブハウスのことを含め、いろいろあった出来事や考えたことも書かせていただきたいのですが、その前に、修士課程でなにをしていたかをすこし説明させてください。というのも、今回のこの文章を書くにあたって、あらためて富山先生の『始まりの知』を読み返させていただき、博士後期課程で過ごした時間のことを考えると、修士課程での研究のことや、そのときに感じたこと、考えたことが、そのままいまにつながっていると考えるからです。

研究会などの場で、「ご専門は？」ときかれるといつも返事に困っていたのですが、修士論文では、言語学者の新村出というひとが、1920 年に大阪府三島郡の千提寺というところで

見つかったキリシタンの遺物について書いた文章を、1905 年ごろから 1936 年までの変化のなかで考えて書きました¹。

もともと音楽に興味があり、西洋音楽伝来史を読んだときに、隠れキリシタンのひとたちに伝わる「おらしょ(Oratio:ラテン語で「祈り」の意²)」という口承の祈りのことを知り、興味を持って調べているうちに、流れ流れて言語学者の文章を読む羽目になってしまいました。

「邪教徒」から「日本人」へと変化していく記述のなかで考えたのは、なにかものすごくアカデミックなことではなくて、当時自分が置かれていた状況のなかで感じていた、「言葉」や「名前」ってなんだろう？という漠然とした疑問や違和感、どうしてもなじめなかった多くの「研究会」の場での言葉の感触と、好きな本や音楽や絵画たちとの違い、それから、あるものや人に対する名づけ方が変化するとき、名づける人のなかではどのような変化が起こっているのだろうか？という素朴な疑問でした。

ですから、「キリシタンの専門家になる」というのも、「歴史学者をめざす」というのも、なんだか自分ではないような気がして、なんだかよくわからないけれども、なんとなく居場所がありそうな「火曜会」という場所があった大阪大学の文学部の大学院にもぐりこみました。その時点で、休学をはさんで修士課程を 4 年かかって卒業していたため、たくさんの人に反対されました。「就職のあてもないのに博士後期課程なんて行ってどうするの？最短コースで卒業した人でも就職できない時代に、そんなペースでは野垂れ死ぬだけだよ」と、いろいろなかたに言われました。

¹ 『『キリシタン』をめぐる記述—新村出と名づけえぬもの』『日本学報』第 24 号, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、2005 年 3 月、pp.79-99.

² キリシタンの用語では「祈り」なのですが、ラテン語の原義をもっと深く調べてみると、いろいろ興味深いことがわかりそうです。

当時のわたしは、「まだ見ぬ地平」を見てみたい、というただそれだけの気持ちで、なんのあても自信ありませんでした。忠告してくれた人の言ったとおり、いまでも、決して順調とはいえませんが、それでも行ってよかったと思っています。

在学中、ビジネスホテルでアルバイトをしていたときも、単位取得退学したあとに大学で事務や研究員の仕事をしていたときも、音楽の仕事を続けながら、それだけでは生計を立てることができず、派遣社員として企業で働いていたときも、先生方や同級生や後輩や先輩たちとの繋がりに支えられてきました。ひとつには、そういった人間関係そのものという意味もありますが、もうひとつは、いま目の前で起こっている物事をすこし離れたところから見てみると、いろいろな角度から考えてみることに、といういわば思考のトレーニングをさせてもらえたと思うからです。

「始まりの知」でも書かれているように、研究会やゼミの場で、知識の量や、その場所で共通の前提になっている思考様式、文章のスタイル、会話の作法をどのくらい身につけているかが、「学問」の階梯をどこまで登っているかを測るものさしになってしまうということが起こるのは、一対一の人間関係や個人の性格だけに起因するものではなく、もっと大きな構造や、世界の状況の中で生み出されているものではないかと考えることができるようになったことです。とはいえ、私自身はそんなに時事や政治に精通しているわけではなく、時々あまりの世間知らずぶりに周りのひとにびっくりされることもしばしばで、大半のひとにとっては「そんなのあたりまえでしょう」と呆れることかもしれませんが、相手と自分の問題だけでなく、問題を生み出しているもうすこし広い文脈に想像力を押し広げることができるようになったということです。すぐに何か用語を使って説明したり、分類したりすることとは必ずしも同じではないのですが、新しい言葉や概念を知ること、世界に新しい角度から光をあてられたような経験をしたことも事実です³。また、知識やその分野のいままでの蓄積を深く学ぶことを無意味だと言いたいわけではなく、その重要性は理解しているつもりです。

³ 博士後期課程に在籍していたときに、アルバイトをしていたホテルの仕事の話、そこでの楽しいことやもやもやしていたことをお話していたときに、富山先生に教えていただいた「感情

よくわからない場所(笑)で毎週いろんなひとといろんな対話を重ねたことで自分のなかに静かに積み重なっていったものは、「〇〇学のディシプリン」と呼ばれるものとは異なる、もっととらえどころがないものでしたが、仕事場や対人関係で辛いことがあったとき、わたしを精神的にすこし楽に、息をしやすいしてくれました。もちろん、そのようにして自分なりに考えたことが正しいのかどうかはわかりません。ただ、いま目の前で起こっていることを、すこし離れたところから見ようと努力することで、辛い、苦しい、哀しい、というだけではない、別の視点をすこしずつ身につけてくることができたような気がしています。辛い、苦しい、哀しいと感じる感情を理屈で押し込めたり、なかったことにしたりするのではなく、どんな醜い感情も否定せず、その気持ちは大切に感じたまま、自分をとりまく状況を、すこし視点をずらしてみることで、痛みが減るわけではないのですが、気持ちが静かになってきました。また、そのような話を聴いてくれ、自分の意見を述べてくれたり、研究の話をしてくれたりする友人たちの存在が、ほんとうに大きな支えとなりましたし、いまもそうです。

富山先生が同志社大学に移られてからも、「火曜会通信」として発信される文書をメーリングリスト上で時々読んで、いろいろなことに思いを巡らせたり、知らなかったことを知ったりすることを楽しみにしています。

前置きが長くなりましたが、この4月、わたしは、出演する予定だったあるライブを自分から出演キャンセルしました。そのことについて、いまも考えています。

それは、長い間お世話になっている、京都のそれほど大きくないライブハウスでのライブでした。20名で満員になるお店です。ちょうど「ライブハウス」という場所が、クラスターの温床

労働」という概念は、わたしにとって、アルバイト先を、文化人類学者がフィールドワークをするように、自分自身を含めたたくさんの人のふるまいや、毎日起こる事件を、「観察」というより、何かとつなげながら考える場所に変えてくれました。日高由貴『わたし』から/への旅』『日本学報』第30号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、2011年3月、pp.85-101.

のようにメディアで大きく取り沙汰され、一部の場所を除けば、もともと普段から毎日満員というわけでもないジャズのライブハウスは、さらに客足が遠のき、お店も、ミュージシャンたちの多くも、収入がどんどん減っていき、演奏の機会も減っていきました。休業する飲食店やライブハウスも出てくるようになり、ミュージシャンも、高齢者の家族がいる人、自分自身や家族が医療従事者、教職者である人など、そうでない人も、出演を辞退したり、延期したりすることが多くなりました。

そんななか、出演を予定していたそのライブの一週間までは、お客様がゼロでもライブは行うつもりでいました。けれども、一週間後にライブが迫ったころ、ライブをするという決断は正しいのだろうかという悩みが出てきました。自分自身が感染することが怖いというよりは、知らないうちに感染していて、たとえお客様がゼロだったとしても、お店の人を含めた別の人に感染し、感染を拡大させる可能性があることを考えると、いまは出演をやめるべきだと思いました。

その決断をお店の人に伝えた日は、一睡もできませんでしたし、ほかのミュージシャンの方も、もちろんお店の方も、ライブや出演を辞めるにせよ、決行するにせよ、みんな苦渋の決断だったのではないかと思います。

ほとんどのライブハウスが「自粛」期間に入った 4 月、5 月の間、毎週土曜日に、自宅の電子ピアノで、なんの PA 設備もないまま、iphone で撮影した、ジャズやポップスの曲の弾き語りの動画を you tube にアップロードして配信していました。置かれた状況の中で、なにか音楽を発信し続けたいという思いからしていたことですが、ライブはもちろん、ホテルのラウンジや、お店の BGM 演奏で、お客様に喜んでいただく仕事が好きだったので、そういった場所を長い時間離れてしまうと、毎日いくら個人練習をしても、自分のなかで確実に失われていくものがあるような気がして、怖かったのもあります⁴。もちろん、インターネットを通じた一方的な

⁴ <https://www.youtube.com/channel/UC2x-buJitdbJ2o1PvazHTAw>(2020 年 9 月 30 日現在)

発信は、実際に対面している場所でのライブや演奏とはまったく異なるものでしたが、何もしないよりはましなのではないかという思いから続けました。

6月頃からぼつぼつと営業を再開するお店も増え、8月に、初めて配信ライブを行いました。同じ配信でも、自宅でひとりで撮影するのと、お店でマスターと配信会社のスタッフのかたと、数名のお客様がいるなかで演奏し、配信するのでは、自分のなかの気持ちや、出てくる音がまったく異なっていました。また、配信ライブをその後も1週間ほどアーカイブ視聴していただけるようにしたことで、普段ならライブ会場に足を運ぶのが難しい、仕事や子育て、そのほかの事情がある方にも聴いていただけたことはよかったと思います。一方で、アーカイブを視聴してくれたミュージシャン仲間からは、「自分も演奏する立場だからわかるんだけど、ただのライブじゃなくて、その後も一週間残るとなると、半分レコーディングみたいなものになるんだよね。準備もその分大変になるし、プレッシャーも強くなる。でも、聴く立場だと、逆に軽く聴いちゃうというか、ライブハウスだと集中して聴けるのに、自分の部屋で、聴き逃してもあとでまた聴けるとすると、ついほかの作業しながら観ちゃったりして、悪いなと思いながら、なんだか軽く聴いちゃうんだよね。」という声もありました。

別の場所でも無観客の配信ライブをされたあるミュージシャンの先輩は、「無観客ライブだと、沈黙が沈黙でしかない。普段なら、お客様のつつこみや、笑い声があるはずのところが、たんに曲と曲と話をつなぐ隙間にできた空白になってしまう。無観客配信ライブをしたことで初めて、普段いかにお客様とともにライブが作られているかを痛感した」とおっしゃっていました。これからも、いろいろな形での配信ライブは、増えていくと思いますし、そのあたりの問題をどう考えていくかは課題だと思っています。

さきほど、「もともと毎日満員というわけでもないジャズのライブハウス」という書き方をしましたが、このことを巡って、ピアニストの西山瞳さんがインタビュー記事ですこし触れてお

られました⁵。西山さんは、この記事以前にも、今回のコロナの状況下でのアーティストの活動について発言されていて、すでにいろいろ読まれた方もいらっしゃるかもしれませんが、あらためて一部ご紹介したいと思います。

(以下、「インタビュー 西山瞳が語る東かおるとの共作『Faces』、そしてコロナ禍における〈一人のジャズ・ミュージシャンの生活と意見〉」”Music Site MiKiKi”、インタビュー・文/村井康司、2020,9,23.より一部抜粋)

コロナウイルス禍と音楽家

——ところで、録音は3月10日、11日ですね。新型コロナウイルスが問題になってきた時期。

「ぎりぎり、という感じですね。録音のときにはみんなマスクして手洗いして、ではありましたが」

——コロナウイルス禍の規制があれから現在まで続いていますけど、ミュージシャンとしてはどんなお気持ちですか？

⁵ 「インタビュー 西山瞳が語る東かおるとの共作『Faces』、そしてコロナ禍における〈一人のジャズ・ミュージシャンの生活と意見〉」”Music Site MiKiKi”、インタビュー・文/村井康司、2020,9,23.

<https://mikiiki.tokyo.jp/articles/-/26291?fbclid=IwAR13Ykx4XX78VTw9wbfbq3Xz2Wz1ZPySeEja2TSYxC31qG6K-Lj-tsDMZ3Sg> (2020年9月30日取得)

インタビューの前半部分はあたらしいアルバムについてのお話で、こちらもとても興味深いものでした。

「ダイヤモンド・プリンセス号の感染のあたりから、お客さんのキャンセルもどんどん増えてきて、精神的にしんどくなってきたんですけど、来て下さいとも言えないし……。それで 3 月末に都知事が会見してライブハウスが休業したして、関東圏のジャズ・ライブが全滅したんですね。あれは衝撃的でした。志村けんさんが亡くなったことで潮目が変わったというか、それまでは対応に怒っていた人も、緊急事態宣言が出るころには、しおしお、みたいに落ち込んだ感じでしたよね」

——そうですね。6 月あたりから少し行政の対応が変わってきましたが。

「細かい精神的な変化はみんなそれぞれあったと思うんです。今の気持ちとしては、あまり飼いや慣らされないようにしないと、と」

——それは右往左往しないで、自分で考えよう、ということですよ。

「みんな考えるのが面倒になってしまうけど、ずっと怒っていないといけないんじゃないか、と思うんですね。人によっては、怒り疲れた、というのもあると思いますけど」

——〈ライブハウス〉という言葉が独り歩きしてしまった、ということがありましたね。

「そうですね。しかもその対象がどんどん変わっていくということもあって、標的にされているんだな、と。音楽に関わっていない人から〈ライブハウスに行ってるんですね?〉と実際に言われたこともあって、本当にそう言われるんだ、と驚きました。

それで、ジャズ・ミュージシャンの中には、ライブハウスとジャズ・クラブは違うんだ、ジャズ・クラブは安全だ、と言う人もいて、それも私は非常に複雑な気持ちになりました。私はメタルの方にも出入りしているので。ジャズ・クラブは人数も少ないから今は再開できているけど、メタルはそれこそ〈密〉になるのでまったくライブが出来ないんです。もちろん出来るところからやるのはいいんですけど、他はどうでもいいけど自分のところだけは動かしてと言っているみたいで嫌だなあ、と見ていて思いました。みんなを救わないといけないのに」

——今、西山さんはライブ活動が始まっているんですよね。

「そうですね、どこも入場制限をしています。私としては精神的にもきついので、選んでやってます。以前の6割から7割ぐらいですね。でも、お客さんの入りは5割以下です」

——ライブって、一度行かなくなると行く習慣がなくなることもあり得ますよね。あと、マスクをして気をつけてライブに行くかどうかということと……。

「店によってはステージにアクリル板を立てるとか、ステージのミュージシャンにマスクをしてほしい、と言うところもあるんですが、私としてはそれはしないつもりです。お客さんは非日常を求めてライブに来ると思うので、ちょっとディストピアすぎるでしょ、それは、と」

——ご自宅からの配信もなさってるんですよね。

「ソロ・ピアノでの配信はやってまして、それが支えになっていた、というところはありませんでした。配信の最後に、私がクラリネット、夫(橋爪氏)がピアノを弾く、という遊びをやって、そっちのほうが観ている人が多かったりもしました(笑)」

——私も4月からほとんど家にいて、いろんなミュージシャンの配信を観てたんですが、アンサンブルをバラバラに録画して、編集してアップする人がけっこういるんですね。おそらくコロナのことがなければ、そのスキルを身につけることはなかったんだろうなあ、と思ってしまいます。

「みんな急に配信スキルが高くなったんですね。私もそうですよ」

——たぶん10年前だとこういうことは出来なかったはずですね。

「こんなに高速のインターネット回線がなかったです」

〈飼い殺し〉にはされたくない

——コロナウイルスのことがあって、ミュージシャンとして、またパーソナルな部分でも、なにか心境の変化はありました？

「うーん、どうなんでしょうね。客観的に自分を見ることができれば、あるのかもしれないけど。ただ、いろんな人の生きていく方法、対処の仕方、価値観みたいなものが見えたことで、自分はどうするのがいいか、どうすべきなのか、みたいなことを考えることが増えましたね。配信をがんばってやる人もいれば、酒飲んでやさぐれて寝る、みたいな人もいますし、皆それぞれの選択したことが大事なことなんだと思います」

——世の中の動きについても、思うところはたくさんありますよね。

「私はもともと社会的な運動にコミットしようと思っているんです。自分の意思でデモや集会に行くこともありました。今はみんな上から与えられたことに対処するため精一杯ですけど、黙っていると大変なことになって、それこそミュージシャンが抹殺されるかもしれない。ちゃんと声をあげないといけないのに、と、そういう意味では怒りを溜め込んでいます。

〈アートにエールを!〉というプロジェクトがありますよね。私自身は、ああいうことをするくらいならなぜ最初から給付の形で支援をしてくれなかったのかと疑問に思っていますし、行政が指定したメッセージ込みで〈作品〉を作らせるって、怖いことだと思っています。それにホイホイ芸術家が乗ることだって、戦争の時に芸術家が国のために絡めとられていった歴史を考えずにはいられない。こうやって飼育殺しにされていくのかな、と。ああいうのはなるべく疑問の目で見ておいた方がいいと思います。

声をあげないと何もしてくれないし、声をあげても何かしてくれるかどうか分からないんだから、なおさらちゃんと声をあげないと、と思っています」

——署名運動とかも、絶対に効果はありますもんね。

「そうなんです。でもそういう運動に冷笑的な人もけっこういるでしょ、あれがしんどくて。明日は我が身、といつも思っていますよ」

——うーん、こういう異常事態だからこそいろいろなことが分かってしまう、ということもありますね。

「そうですね、今まで仲のよかった人が、あれ、そういう考えだったの?と思うこともありますね。でもそれを否定せずに、相手の話をちゃんと聞いたうえでそれでも自分の意見はきちんと言う、というふうになりたいな、と思ってます」

わたし自身は、西山さんの発言にたくさん共感しながらも、4月にライブ出演を自分から辞めたときのことを思い出すと、自分は何かに負けてしまったのだろうか、と思うこともあります。実際にそう言われたこともありました。

それでもそのときの自分の判断、決断に対して後悔はしていませんし、西山さんがインタビューの最後におっしゃっているように、相手の意見を聞いた上で、自分の意見も言える場所、関係性を持ち続けたい、としかいまはいえない状況です。

まとまらないままですが、これから、あたらしく始まるこの媒体が、どんなふうに変化していくのか、どんなふう、たくさんの人の言葉が行き交い、積み重なり、広がり、繋がっていくのか、楽しみにしています。

確信の不確実性に向けて—— 「終わりの感覚」⁶を抱えたまま

沈恬恬

京都大学 大学院法学研究科 法政理論専攻 博士後期課程2年

A

ジュリアン・バーンズの『終わりの感覚』にもっと早く出会うべきだった。たとえば、この本がブッカー賞を受賞した 2011 年に。遅くとも、この本が日本語に訳された 2012 年には。なぜなら、もしあのときにこの本を読めたなら、きっといまここで私はもう言葉なんかを書いていないだろうと思うからだ。言葉を書きたくないのではなく、書くべき言葉を失うほど衝撃的な物語だ。その内容と構成が真新しいためだけ(?)ではなく、その記憶と時間、そして、歴史についての洞察があまりにもシリアスなためだ。ただ、本当にあのとき—2011 年もしくは 2012 年—にこの物語と出会い、私が何も書かなくなったとしても、それと出会う前に私が書いた言葉たちは、私の人生に対して、全く反乱を起こさないだろうか。つまり、物語が繰り返し投げか

⁶ Julian Barnes. *The Sense of an Ending*. London:Jonathan Cape,2011(日本語訳:ジュリアン・バーンズ著(土屋政雄訳)『終わりの感覚』新潮社、2012 年。なお、注は、英語版の頁となる。

ける問いにもあったように、大して言葉を書いていないような、もしくは、いわゆる正常な言葉を発することのできないような人生における責任の定義について、かつて、誰かが書いた文書の一節によって、ふたたび書き直されるのかどうか、ということだ。コロナ自粛モードに付随するなんとも言えない静けさは、私にこれらの問いの前に立ち尽くす時間を与えてくれた。

1 歴史の関係式

物語は、老年の主人公トニーが「内側(手首側)に向けた腕時計」⁷の針に沿って自らの青年時代を振り返りつつ語る第一部と、客観的に流れる時間、より厳密に言えば、彼個人の真実ではない、ほかの登場人物にも属している時間、が、徐々に彼の自己欺瞞に見えてくる自己完結した記憶の物語に食い込む第二部によって構成されている。第一部のなかで描かれた彼の記憶は、第二部のなかでほかの登場人物の持っている証拠文書や死者の遺言によって問い直され、書き直され、最終的に、否定されることになる。と同時に、この第一部の確信に対する第二部の否定は、登場人物らが生きた「歴史」としての辻褄を合わせていきながら、読者にも「物語が完結した」という「確信」を与える。しかし、このような物語としての「歴史」ないし、記憶の断片や日記の断片、手紙の断片にある関連性を解釈することで構成された物語から得られる「確信」は、まさしく「記憶の不完全さが文書化の不備と出会うところ」⁸においてしか生まれない、と作

⁷ “as a symbol of our bond, used to wear our watches with the face on the inside of the wrist. “…“It made time feel like a personal, even a secret, thing.” p6

⁸ “History is that certainty produced at the point where the imperfections of memory meet the inadequacies of documentation.” p17

者は考えている。そこで、作者は、読者の「確信」を試そうと、登場人物らの関係性を表す二通りの関係式⁹を提示した。

$$1) B = S - V \div A1$$

もしくは、

$$2) A2 + V + A1 \times S = B?$$

関係式にある整数に関する情報を付け加える。Bは、SとA1との間に生まれた知的障害児である。Sは、謎めいたセーラ・フォード夫人で、Vの母親である。彼女は、A1の日記を持ち、遺言と500ポンドをA2に残した。Vは、セーラ・フォード夫人の娘ベロニカで、トニーのかつてのガールフレンドである。A1は、エイドリアンで、叡智に満ち、カミュとニーチェを読み、歴史学の授業でとくに目立つ、トニーの高校時代の転校生である。トニーとベロニカが別れた後、ベロニカと付き合ったエイドリアンだったが、トニーの嫉妬が頂点に達した際に書いた一通の呪いの手紙がきっかけで深い仲になったセーラ夫人との間にBができた後、自殺した。A2は、語り手のトニーである。

式1)の場合、Bという結果は、引き算と割り算によって導出される。知的障害児の誕生は、エイドリアンとベロニカの失敗した関係という要素を引き、もしくは、除いたうえ、セーラ夫人とエイドリアンが関係を持ったことによって導かれる。式2)の場合は、足し算と掛け算によっ

⁹ p85.なお、原作のアルファベットは小文字である。

て、Bという結果が導出される。トニーとベロニカとの関係を通じて、エイドリアンがベロニカと知り合って、最終的にエイドリアンとセーラ夫人との間に親密な関係が生じ、知的障害児が生まれた、という一見円満な関係である。

物語の最後で、やっとこの二つの数式の値を明らかにした作者の意図は、これらの式を通じて、共通の結果であるBに係わる責任についてどう分析するか、ということ、各登場人物の手持ちの断片を一通りに見た読者に問いかけることである。Bという結果から引き算したり割り算したりすると、A2の責任はなくなる。これは、物語の第一部で、語り手のA2がBという存在を知らないという、A2の記憶の通りである。ところが、第二部では、A2が第一部では忘れてしまっていた、自らが書いた呪いの手紙とA1の日記の一部が、Sの遺言とともに弁護士を通じて届いた。つまり、今度は、A2の不完全な記憶が、彼の書いた呪いの手紙によって補われた。しかしこの補われたかのように思われる記憶は、自殺を図ったA1が残した日記の一部という不備な文書に、出会ったのだ。ここにきて、ようやく、A1には(あるいは、読者にとっても「トニーには」)、Bの存在に責任があるという「確信」が生まれる。だが、SもA1も亡くなった。生き残っているA2とVとは、かつて付き合ったものの別れ、年月を経て再会した今は、話がかみ合わない。ではBという結果に対し、だれが、どうやって、どのような責任を果たせるのか。

この物語のメタファーの冷徹さは、人物たちの関係性としての個々の断片を再構成しつつ、最後にどんでん返しをしたうえ、「生まれた」何かを、知的障害児という存在の謎にたとえたところである。まして、カミュ哲学的な実存を語っていたA1にとっては、その「玄関先の母乳車が怖かっただけだ」¹⁰。不完全な記憶と文書化の不備との出会いによって生まれたこのような

¹⁰ “he was afraid of the pram in the hall” p142

「確信」が、知的障害児という現実(決して、差別的な意図ではなく)であるならば、この現実を通じて、過去を大多数(もしくは、一部)が望んだ通りに、「正しく論理的」に遡及することもできない、未来を「論理的に正しく」言語化することもできない。ひとつの「現実」について、ふたつの等式が書かれていることに象徴されるように、歴史という「確信」の根底には、不確実性しかない、という物語のテーマが浮き彫りになった。そして、A1の日記にもあったように、基本的に「論理的にありえず、数学的に解不能な式」としての不確実性こそが「世のほとんどの関係」である。

B

不確実な世のほとんどの関係性の中を生きる。(特に、2011 年以後、占星術やら八卦見やらを通じて)時には、すべてが思い通りに「見えた」気もする。おそらく、物語の主人公トニーと同じように、私も実は「頑固」で、「確信」に満ちた性格であろう。流れる時間の川¹¹から切り抜かれた何枚かの不完全な記憶のスクリーンショットを根拠に、客観的に見れば確かに受けた侮辱ではあるが、この侮辱に対する身勝手な怒りで、「歴史とは、勝者の嘘の塊」¹²としながら、他者の物語を書き換えようとしている。そして、このような卑屈な情念のもとで、「歴史とは、敗

¹¹ 都甲幸治「世界同時文学を読む(第9回)水の記憶:ジュリアン・バーンズ『終わりの感覚』」、新潮 109(4)2012 年 4 月、274-277 頁。また、この小説の書き出しも川のイメージから始まった。

¹² よく引用されるベンヤミンの「歴史哲学テーゼⅦ」にある、「勝者の歴史」の表現に類似しているのではないかと思う。“History is the lies of the victors” p16

者の自己欺瞞の塊でもある」¹³ことを忘れ、自らの潔白な未来を想像する(単に、自分の弱さがゆえに書いた日記の断片に正面から向き合うことを回避する)のだ。ただし、歴史は、本当は、「たまたま生き残った者の記憶の塊」に過ぎないのかもしれない。

2 断片の累積法

バーンズの物語を、ベンヤミンの言葉に照らして考えると、「歴史的断片」や「静的弁証法」といった表現が頭に浮かんでくる(ベンヤミン的であること自体の良し悪しがこの物語を読んだあと、疑わしくなってきたけれども)。歴史や物語の連続性や連環性が破壊されたあと、あるいは、そこには全く連続性がないと指摘されるようになったあと、歴史自身が断片的になる。断片的であれば、必然的に「数」の問題が浮かび上がる。複数ある断片は、「廃墟」(この言葉は、人文学のなかでは、もはや耽美的になりすぎたから、物語のなかの「知的障害児」に置き換えたらどうだろうか)ではあるものの、廃墟もまた廃墟としての関係式を要求している。つまり、「関係がある」ということの反対の概念は、「関係がない」というよりも、「異なる関係がある」ということではないか。そして、歴史は、過去のような関係にあった何かではなく、断片を再構成することによって、発見される何か別の関係である。しかし、繰り返しになるが、記憶も文書も不完全で不備なものであれば、「確信」も不確実なものである。発見されうる別な関係も、もとの関係に依存しているだけなのかもしれない。

もとより、断片化されたすべての文書に出会うことはできない。また、バベルの塔が崩壊してから、すべての文書を統一された言語で翻訳し、再統合することもできない。これらの断片

¹³ “it is also the self-delusions of the defeated” p16

の足し算と掛け算をすることで生じるのが責任であれば、そして、断片化された文書の足し算、掛け算と責任との間に、どうしても、「＝」という記号を使わざるを得ないのであれば、この記号が意味するのは、「粘着剤ではなく、溶剤としての時間」であるということではないか。つまり、すべての計算の結果が、「何かが欠けたB」になるために、「＝」という記号は、「私たちを抱きしめて、私たちを形作る」¹⁴ものでありつつも、「最初に根拠を与え、次に私たちを混乱させる」¹⁵ものにもなるのだ。

寄せ集め、かき集めた多くの文書をひとつの web 雑誌のような「新しい媒体」に「置く」ことは、ふたたび複数の断片を、流れる時間の川に「戻す」行為ではない。ビッグデータに関連付けようと言うならば、主人公トニーの内側(手首側)に向けて付けていた腕時計は、どんなに内側に向けようと、すでにスマートフォンやスマートウォッチとなって、24 時間中、個人の脈拍、睡眠リズム、GPS位置……といった数字を記録し続けている。また、これらの記録された断片的な数字は、ひとつのデータセンターに送り込まれていくのだ。個人的な断片が多ければ多いほど、これらの文書を解析するために必要とされる数式(プログラミング言語・ルール)も同時に増殖し、いわば足し算と掛け算を繰り返し、結果Bへと、一気に移行しようとしている。もし、「新しい媒体」というBをつくるのが、できるだけ多くの断片を蒐集し、私たちの「流れ」をも作り上げていくことであれば、現に私たちが流れと呼んでいる「根拠」のなかで、私たちは決して混乱に陥ることのないよう「確信」が必要かもしれない。なぜなら、不確実性が確信を作っていくからだ。確信は、不完全な記憶をたよって不十分な文書を書くなかで、また、不十分な文書を

¹⁴ “holds us and moulds us” p3

¹⁵ “first grounds and then confounds us” p93

たよりに、不完全な記憶が書き直されるなかで、その向こうにある大いなる混沌¹⁶へ向かうときに、生まれる。

¹⁶ “There is great unrest” p150

MFE の始まりによせて

平野克弥

UCLA

今日はこうして MFE のプロジェクトを立ち上げるためのウェブ集会にロサンゼルスから参加できることを光栄に思います。富山さんをはじめ、主催者の方々に感謝申し上げます。

今日の私の発言は、米国ミネアポリスの警察によって5月25日に殺害されたジョージ・フロイドさんが、死ぬ間際に繰り返した「息ができない」という言葉に導かれています。フロイドさんは、20ドルの偽札一枚を使ったという疑いで白人警官たちに路上に押し倒され、膝で首を圧迫されて心停止を起こし、亡くなっていきました。「息ができない」という呻き声は、身体の堪え難い苦痛の叫びであると同時に、理不尽な暴力によって命を奪われていくことへの悲痛な訴えでもありました。20ドルの偽札一枚、しかもそれが実際に使われたかどうか分からない状況の中で、国家権力による殺人が起こってしまう、、、そんなあまりにも理不尽な事態が日常化してしまう、、、フロイドさんの「息ができない」は、むき出しの暴力が生きることと隣り合わせにあるグロテスクな現実を映し出す言葉であったように思えるのです。

Black Lives Matter で抗議する人々の間で「息ができない」という言葉が溢れかえっています。デモのプラカードに、T シャツに、ビルの壁に、ソーシャルメディアに溢れかえっている

のです。フロイドさんの訴えは、多くの<マイノリティ>が生きながらも社会的死へと追いやられ、「息ができない」と感じてきたその経験と思いに共振しています。

人は、日常のレベルで「息ができない」状態に追い込まれるときに、暴力を経験するのかもしれませんが。言い換えれば、「息ができない」とは、発話あるいは表現することを通して、他者とともに思いや考え、経験や記憶を紡ぎ出していく喜びを奪われている状態を言います。生きるということは、多様な人間と遭遇し、交わり合いながら、そこで思ったこと、感じたこと、思考したことを共に言葉にしていく営みです。そして、そのような創造の場を奪われることは、物理的に生きているとしても、社会的な存在として死を強要されるということです。ファシズム、軍事政権、独裁国家、検閲、尋問、脅し、いじめ、差別、、、これらは全て、「息をさせない」、つまり発話を抑圧し、言葉を奪い、創造の自由を否定するという意味で同じ領域に属しています。だから人は、歴史を通して、これらの抑圧的な機構や所作から言葉を紡ぎだしていく協働の場を確保するために、命を張って闘い続けてきたのかもしれません。

今私たちが生きている世界では、そのような暴力的な領域が、急速に広がっていることを肌で感じざるを得ません。それは、日本、韓国、米国という場で異なる形で、しかし確実に連動しながら、私たちの日常生活に侵食しているのです。そんな現実に対抗し続け、「息ができる」生を共に育んでいくためにも、MFE のプロジェクトを心から支持したいと思います。

いただいたマニフェストにはこう書かれています。

「こうした思考の場には、新たな世界を創造していく力があると信じています。それは新たな未来像を対象として思考するのではなく、思考すること自体が未来を開く場を生み出すととってもいいかもしれません。」

フロイドさんの死に触発されて街頭で抗議デモに参加している人々は、かつての革命家のように新たな未来像を対象として思考し、行動しているのではないでしょう。むしろ、彼の死に、彼の「息ができない」という訴えに突き動かされながら、いま、ここで、思考し行動することが未来を切り開くと信じて抗議の声を上げているのだと思うのです。デモに参加していた UCLA の学生が語ってくれました。「フロイドさんの死は、こんな理不尽なことがずっと続いてきた歴史を思い出させたんだよ。フロイドさんの前に、どれだけの人が、肌の色が黒いという理由だけでリンチを受け殺されてきたことか。それを知りながら、じっとしていることはできない。友達とともに抗議と変革のために声をあげている。」

フロイドさんの訴えは、奴隷船で、南部のプランテーションで、ミシシッピ、フロリダ、ルイジアナのリンチで何度となく繰り返された「息ができない」という過去の声と呼び覚めました。抗議とは、それらの声と向き合い、何かを始めることなのだとその学生は語ってくれました。フロイドさんの訴えに応答することは、沈黙され続けてきた過去を想起し、未来を、未来の生を開く行為であるのだと。

フロイドさんは、旧知の、またこれから出会うはずだった友人たちとの幸せな、そして豊かな時間を永遠に奪われてしまいました。しかし、彼は、無数の人々が繰り返す「息ができない」という発話によって、生き続け、生きることの希望を与え続けています。彼の訴えは、無数の発話に生息しながら、こだまとなって、過去と未来が閉じられていないことを示してくれています。発話が集まり言葉が生まれる場所、そこには死を生に、絶望を希望に変えていく力が宿っています。MFE がそのような場となることを心から願います。

言葉の交錯し合う場

成定洋子

沖縄大学

この度、言葉をどのように紡いでいくのかということをめぐり、『MFE(多焦点的拡張)』という新たな媒体を通して、皆さんとともに試行錯誤・共有できますことをとても嬉しく思っています。新型コロナウイルス感染拡大前に存在していた人と人との関係性、人と社会との関係性、社会組織のあり方、議論のあり方などを、理念的・倫理的に「正しい」ものとして再措定したり、全肯定したりする、或いはまた、現状やポストコロナ社会におけるそれらを、称揚したり、理想化したりするようなことや言説について、どのように考えていくことができるでしょうか。恐らく、今大切なのは、「あるべき姿」として枠組み化された関係性やあり方を問い直す契機として、現在のあり様を捉える言葉を丁寧に模索することであるように思われます。『MFE』というメディアが、そのような言葉を紡ぐ試みを継続するなかで、個々の差異や文脈を大切にしながら、様々な大学やゼミ、アカデミズムなどを越えた個々人の言葉が互いに交錯し合うような場になりますよう願っています。

『始まりの知』から ——ハングル版への序

富山一郎

同志社大学

いま世界で起きている新型コロナウイルスをめぐる状況の中で求められているのは、正しい状況説明や、未来予測ではないと私は考えている。ウイルス問題とその解決、といってしまったときに見えなくなる問題、すなわちこの騒動の中でそこかしこに浮かび上がってきた、ウイルス問題に還元できない多くの困難を、見過ごすことなく考えていくことこそが重要であるように思う。それは世界に存在する差別や貧困、排外主義といえるのかもしれないし、これまで存在してきた問題が鋭角的に顕在化したといってもいいかもしれない。そしていずれにしても重要なのは、多く困難に直面した時には、すべてを説明し予測を立てる正しさに、とびついてはいけないということだろう。それは未来を単純化してはいけないということでもあり、単純な未来は、自らの存立要件として必ずその傍らに例外を作り上げるからだ。

国をはじめとする様々なカテゴリーで集計された感染状況や死者数。それ自体は事実確認といえるかもしれないが、こうした区分けされた危機の提示とともに醸成されていく危険部分

を特定しようとする心性には、危機に際して自らの生を危険部分から予め分離しようとする態度がともなっている。またウイルスとともに密かに蔓延しているのは、「〇〇なら仕方がないが、私は〇〇ではない」というあの思考だ。この〇〇を予め排除する態度の延長線上に、問題解決の枠組みや未来が描かれようとしている。浮かび上がった多くの困難は、こうした解決や未来像において放置され、再度埋葬されることになるだろう。

危険部分を特定しようとする心性の底流にあるのは、不安である。この不安を糧に、全てを説明し予測を立てる正しさに飛びつくことになる。だが、そのような正しさはない。そして不安を押し隠しながら、ないことをあることとして無理にいいはろうとすると、思考は停止していくことになる。それは藤田省三が、日本の戦後の失敗を、「何でも知って、なんでも説明してくれて、そして全体について何となく辻褄があっているようなリーダー」(久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』<復刻版>岩波書店、2010年)を求めてしまったことだと指摘したことともかかわるだろう。

藤田が問題にしたのは、リーダーそれ自体というよりも、こうした無理をし続けるプロセスにおいて構成される集団性だ。すなわち社会は、「何となく辻褄があっているようなリーダー」とそれを求める人々において構成されることになってしまうのだ。そこには必ず、自らの存立要件として例外がつくられ、危機はこの例外に押し付けられた危険となったのち、「〇〇なら仕方がないが、私は〇〇ではない」という社会を生み出すことになる。しかしそれこそが危機ではないだろうか。それはまさしく今も続く天皇制にかかわることであり、その「辻褄」のなかで〇〇に嵌め込まれた人々の中に、沖縄もある。藤田はこうしたリーダーに群がる集団の在り方を、端的に「墮落」とよぶ。また墮落した集団は、正しさにそぐわない曖昧な言葉や異なる主張を排除する動きに向かうと藤田は指摘し、こうした排除を優生学的な「断種」と述べるのだ。

自らの生きている世界を考えることとは、「全体について何となく辻褄があっているようなリーダー」に飛びつくことではない。そして藤田がここでリーダーとよぶのは、不安を扇動し横領する政治家のことではない。また、無残なまでに無能な安倍晋三のことでもない。問題は、正しさに飛びつくという思考の身振りであり、最も重要なのは、困難な状況を前にして、正しいリーダーを探すのではなく、たとえすぐさま答えが見つからなくても、自律的に考え続けることである。安倍の無能ぶりを指弾するだけではダメなのだ。

考えるという当たり前の営みが、いま問われている。また藤田が、「何でも知って、なんでも説明してくれ」る存在として言及しているのは、正しい説明をしてくれる学知のことであり、研究者のことなのだ。知において問われているのは、答えや正しい説明ではなく、いかに考えるのかということであり、いかに自律的に考えるのかということこそが、いま求められていると私は思う。そしてその思考のスタイルが、そのまま「何となく辻褄があっているようなリーダー」を中心とした社会、すなわち特定の人々を存立要件として予め嵌め殺しにし続ける社会とは異なる未来を作り出していく実践に、結び付いていくのではないか。なぜならこの思考は、自律の「自」を作り上げる作業でもあるからだ。本書で考えたかったのも、予めの排除に抗していかに自律的に思考するのかということであり、こうした「自」を作り上げる作業を始めることだ。

本書の終章に登場する中井正一は、戦後直後、広島で山代巴とともに農村の民主化運動にとりくむ。その活動について中井は、死の一年前の 1951 年に書かれた「農村の思想」(『中井正一全集 第四巻』所収)において、社会を変える運動において重要なのは、「知識の多少、思想の寡多の問題ではなくして、契機と契機の構造」であると述べている。そこには誰かが指導者になって知識をあたえ、思想を啓蒙することによって構成されるのではない集団性が想定されている。こうした戦後の中井の言葉は、本書で取り上げた「委員会の論理」が、戦後直後の

実践の中で語りなおされているといえるが、同時に山代巴が農村女性たちと作り上げた場と、中井の思考が重なりあった結果だと思う。

こうしたことについては、今後ゆっくりと考えてみたいが、中井も山代も、多くの死者と廃墟を前にして、正しい知識人や重要な思想家にではなく、一人ひとりが契機となって構成されていく社会のありかたに、未来を見出そうとしたのだろう。自律的ということばをつかうなら、ここでの「自」は、いわゆる個人のことでなく、あえていえば「私たち」ということであり、この「私たち」は、共通項でくられるものでも、内と外の境界が定められるものでもなく、契機としての私と契機としての他者が構成していく運動としてある。このような「自」は、「〇〇ならしかたがない」として遺棄される他者を前提にした私や社会の在り方を、根底から変えていくのではないだろうか。

大学が閉鎖され、集まって議論をすることが禁じられている状況の中で、『通信』という媒体を始めた。基本的には一人ひとりが文章を読み、書き、それをまた読み、また書くということをつなげていくという簡単なものだが、継続していく中で、一つ一つの文章がお互いの次の文章の契機になり、多焦点的に連鎖していった。この連鎖の中で生まれた複数の思考は、重なり合いながらも決して一つにまとめることができないものであり、かつ現在進行形で増殖し続けている。そして何よりも重要なことは、こうした思考は、誰かが中心となって統括されるわけではなく、また序列がつけられるようなものでもないということだ。それぞれが軸となりお互いが契機となりながら拡張されていく思考の在り方を、『通信』を通して極めて具体的に知ることができたのである。

『通信』に寄せられた文章を読みながら、気が付いたことがある。それは言葉の始まる場の空気とでもいうべきことだ。それは、これまでの関係性を維持するのが困難になる中で、ひとり

ひとりが既存の社会から少し剥離し始めたときに生まれる空気感だ。寄せられた文章はこの空気感の中で生まれた。そんなことを考えているときに、松下竜一が住民運動の中で発刊していた『草の根通信』を考察した文章の中で堀川弘美さんが、次のように述べていることを思い出した。

問題意識の芽のようなものが生まれつつあるときに、それを共有する人や場所、議論できる場所がないとき、その違和感や問題意識の感覚は感覚のままに、言葉にされないままにその人の内側に放置されることになる。違和感や問題意識をそのままに引き受ける場所は、圧倒的に少ないのである。それらを口にできる場所自体少ない上に、口にできたとしても、その問題意識の根にあるものを明快な言葉で定義付けてしまうことで、一気に具体的行動へと直結させていく運動が待ち構えていたりする。少し立ち止まり、周囲を見渡し、考える場所が必要な時がある。そういう場所を見つけられないとき、その芽はやがて社会の主流的な流れの中でかき消されていくことになる、と私は考えている。(堀川弘美『草の根通信』という場所―松下竜一における運動としての書き言葉―)

私が『通信』から感じた空気感は、ここで堀川さんがいう、まだ見ぬ場所への希求なのかもしれない。言葉は言葉の在処とともに浮かび上がるのだ。『通信』はその言葉を空気感とともに丁寧に媒介する。それが、一人ひとりが契機になるということではないのだろうか。日本語版のあとがきでもふれたが、同書にかかわる文章は、韓国で考える場を作り上げてきた人々との出会いから生まれた。その一人、ソウルで「水平会(水曜平和の会)」を実践する沈雅亭さん会ったとき、雅亭さんが、議論において重要なのはそこが「安心して話ができる場」であるというこ

とだと話したことがある。「契機と契機の構造」には、こうした安心が必要なのだ。この安心は、言葉の場が他者を遺棄して成り立つことへの拒否であり、「〇〇ならしかたがないが、私は〇〇ではない」という安心と、真っ向から対峙するだろう。

いま、雑誌を作ろうとしている。中井たちの『土曜日』の特徴が、書き手と読み手が限りなく漸近していくところにあるとするなら、それはそれぞれが契機となって増殖していくようなことなのだろう。それぞれが契機になる「読む―書く」という営みを確保するような媒体を、作りたいと考えている。いいかえればそれは、「安心して話のできる場」を、媒介していくような雑誌だ。遺棄される他者を前提にしない「私たち」を、多焦点的に拡張していくために。雑誌名は、「MFE(Multifokaler Expansionismus=多焦点拡張)」だ。

本書がハングルに翻訳された意味は、私にとってとても大きい。それは、先ほども述べたように、本書の内容は、韓国での様々な議論の場との出会いにおいて生まれたものだということでもあるが、それだけではない。「始まりの知」をそこで出会った人々とともに、これからさらに進めていきたいと思うからだ。雑誌『MFE』も、その一つの試みである。すぐには実現しないだろうが、この雑誌では、ハングルと日本語の二言語構成を考えている。

最後に、翻訳者の沈正明さんに、あらためて感謝と同志としてのエールを記しておきたい。文章もさらに読みやすくなり、より明確になったと想像している。翻訳というより、よりブラッシュアップされたものが、このハングル版である。また、新たな雑誌に向けて動き出す中で、正明さんは圧倒的に重要な存在だ。共になんども議論を重ね、ようやくここまできたと思う。ありがとう。これからも共に。

2020年8月15日 富山一郎

『始まりの知』 訳者あとがき

沈正明

朝鮮大学校

日本で学位課程を終える少し前に、東日本大震災が起きた。私はたまたま東京にいた。その頃、妹が東京に住んでおり、彼女の誕生日を祝うため上京した矢先だった。銀座に出かけていたが、電車が止まってしまい妹の住む街まで歩いて帰った。高層マンションのエレベーターは停止していて、階段を歩いて上った。冷蔵庫の上にあった電子レンジが落ちてキッチンのドアを壊し、液晶テレビや本などが床に落ちていることに驚いた。しかし、その時はまだ、大きな地震が来たのだ、ということしか分からなかった。テレビをつけて津波の映像を見て、私たちは、その場に座り込みしばらくおいおい泣いた。次の月曜日には妹はまた会社に行った。私は、たびたび起こる余震に怯えながら、ネットで津波のニュースを見たり、原発事故に関わる情報を探し回ったりした。他には何も手につかなかった。人があまりにも簡単に死ぬということに驚き悲しむ一方で、私たちがどれだけ安全でいられるか心配になり、今すぐにでも東京から離れて、私が暮らしていた京都に向かうべきではないかと悩んだ。東京の街中では一時トイレトパーが底をつき、駅のホームや商店は節電のために薄暗い状態が続いた。

十年近く経った今、博士論文の指導を受けた富山先生がいらっしゃる京都でしばらく生活することになり、また日本に来ているが、街の商店からトイレトペーパーがなくなる光景をもう一度目撃した。2020年2月、新型コロナウイルスが世界に広がり始めていた頃だ。ドラッグストアから姿を消したトイレトペーパーは、ネットのショッピングモールで何十倍の値段がつけられ売られていた。4月になれば来るはずだった、桜咲く河原の道を歩いて大学に行き、当たり前のように集まって話し合い、優しい人たちと手を触れあう、そんな平穏な日常が突然停止してしまったことが、うまく飲み込めなかった。用事がない限りあまり外出せず、狭い部屋でひとり本を読んだり、ノートパソコンに向き合ったりすることにも今ではある程度慣れてきたけれど、しばらくはひとり何処かに取り残されてしまったような気持ちで海外のニュースを追いかけて読み、毎日毎日あまりにも多くの人が死んでいくことに驚き、ひとりちびちび泣いた日もあった。短期間にたくさんの命が失われているというのに、私が最も衝撃を受けているのは、その数の多さであり、そのことが時々怖くなった。そして、あちこちで拾い集めて読んだ記事の中から、感染症で辛く苦しい思いをしているひとだけでなく、実際にはずっと以前から世界に存在し続けてきた数多くの苦しみを発見した。得体のしれないウィルスに奪われたと感じていた私の日常というものが、どのような世界で成り立っていたのか、私が何を見ないようにして生活してきたのかを改めて知った。それは、あれやこれやの災害に巻き込まれて去っていった多くの人たちのことをずっと考えていながら、悲しいという私の感情が、もっぱら自分に近い限られた出来事に対して反応していただけではないかということにふと気づいて衝撃を受けた時の経験とも重なった。もっとも、そういうことを考える間も、一方では自分の愛する人たちや自分自身の安全を何より心配する自分がいた。

そういう時間の中でこの本を読み直した時、その中の言葉は、それでは世界と私の関係をどう考えればいいのか、私にはそもそも何ができるのかを悩んでいた自分に、何よりの力になって

くれた。この本の中で著者は言葉を読むということ、世界を根底から批判し、異なる現実を作り上げる可能性として考え、言葉を読み、書き、語り合うことから、他者との関係をいかに開いていけるかを見ようとする。著者は言葉と言葉にならない振る舞いを分ける尋問空間の暴力を問うているが、最初から言葉ではないものとして予め排除された領域から浮かび上がる他者との関係を引き受け、自分とは何のかかわりもないと思っていた人をつながることを可能にしてくれるのが、この本に書かれている「知ること」だ。そこでは、私がいって、その傍というものがある境界において存在しているわけではない。何ものかを思考することとは、それを特定の時代や地理的な範囲において囲い込むのではなく、それらを縦に横に広げ、個人化された痛みを他人事ではない事態として引き受けることである。したがって、この本を読むということは、絶えず引き直される境界線の中にいながら、「今のところ、私は大丈夫だから」と思っている自分自身を問い続ける過程でもあった。そこに今の状況を変えることができる「始まりの知」があるとすれば、何もし得ない自分でも、他の人たちとつながりうる小さな手がかり一つはつかめるかもしれない。他者の言葉を、ときには言葉と見なされないような音や動きをも、聞いたり読んだりすることは、決して何にもならないようなことではないというのを、この本は教えてくれる。どうせどこにだって、いつにだって苦しみはあるものだし、それはつまるところそれを抱える一人一人の問題でしかなく、あなたが何をしようが世の中はもともこんなもんだと言う声に、力強く、それは違うと言ってくれる。

ならば、そのような知は、いかにして他の人たちにつながっていくのだろうか？知が、個を前提にした所有物ではなく人々の間を行き来する集団の言葉であるとするならば、そのような言葉たちの「場」が必要となる。ファノンが最後まで手放さなかった臨床もまたそのような場であったことを示しながら、この本は今でも続いている「火曜会」という討議空間を通じて、集団の言葉なるものがいかなる姿を持ちうるか描こうとする。去年からまた火曜会に参加し、そして

このくだりの記述を読みながら、私は自分が著者の語る研究者の習性を、すでにどれだけ身につけてしまっているのか度々気づかされた。いわゆる学界というところに慣れてきて、議論がいつも審査になってしまい、質問が会うためではなく相手を評価するためのものになるような場面に何度も居合わせてきたし、それが自分を苦しめるとずっと思っていた。しかし、制度や私を取り巻く構造の問題ではなく、この私が、どうすれば自分がちゃんと真面目に勉強してきてそれなりの知識を持っているかをうまく示すことができるかを絶えず気にかけ、そうして武器みたいに貯めた知識を、適切な場所に適切に配置するのが研究であるかのように考えるときのほうがもっとずっと多かった。そして、私も少しは賢くて、ものをよく知っている人だと認めてもらいたい欲望と常に戦っていた。そのような私にとって、どこにでも居場所がない荒野における孤独が思考の出発点であり、その中にいながら自分自身を開き、他の人たちに出会って言葉を交わすことのできる場を作ることこそが研究であるという著者の言葉は、いつも身にしみる。本の中に引用されている島成郎の言葉のように、「責任を、外在的な政治制度や、自分を抜きにした社会に預け、不平不満をいうケチな」人は、他でもない私だった。しかし、「印刷する言葉」がある限り、人々はいつでも話し合うことができる。実際にそうだった。そして、それは全く楽しい時間でもあった。それこそ著者と一緒に議論し、火曜会に再会する中で、ビリビリと発見したことだ。

一方で、この本に書かれている内容にかかわって、私自身がいつも悩んでいた問題もあった。この本はファノンについて書かれているけど、彼の理論を分析したり解説したりしているわけではない。それよりも、そのように読む人から対象を離しておいて説明を加えるのではない仕方、ファノンと今ここをつなげる。「傍で起きていることだが、すでに他人ごとではない」という語句が、そのつながりをもっともよく語っているだろう。そして、そこには、マルティニーク人とアラブ人を間違えファノンを尋問した警官と、関東大震災直後の混乱の中、殺されるかもし

れないと怯え自分は朝鮮人ではなく沖縄の人だと主張した比嘉春潮、沖縄の個性を設定しようとし、それを表現する言語がないことに気づく伊波普猷が重なる。ファノン、尋問はそもそも間違えるものであり、境界においてそれを回避することはできないことを知っている。しかし、一方では朝鮮人だからという理由で殺されていく人が現にいるのに、その隣で、「私、朝鮮人じゃないですけど」と言っている人をどう考えればいいか。当たり前のように暴力を受ける側に自分を重ねた私は、ファノンと比嘉を分け隔てながら、何度もそう自問した。数々の〇〇を排除することにおいて成立する共同性があり、そこには問答無用の暴力が待ち受けているとするならば、比嘉は正しい分類において間違いを正し、従来の境界を一緒になって引いているような人ではないのか、と。しかし、著者は比嘉やその友達から、回避されていた暴力に対する知覚を見出し、そこで他者との出会いや新たな共同性に向かう可能性を探ろうとする。そして、尋問空間における経験を、暴力に先立って身構える身体とすでに傷ついた身体に区分したうえ、前者に対しては身構えなくてもいいと説明し、後者に対しては個人や集団において取り囲むことを警戒する。繰り返し読んでいくうちに気づいたのは、とにかく暴力を受けてしまった〇〇と、私は〇〇ではないと言う人をとことん区分し、後者を批判しようとしていたときの私は、ファノンを呼び止めた警官と実は何ら変わらない態度を取っていたということだった。しかし、実のところ、そのような区分はどこにも自明なものとして存在しない。また、私に襲いかかるかもしれない暴力を前もって免れようとする受動的な身振りの中から、状況を新たに構成し直せるような能動性を最後まで見逃さないのは、何よりも希望を考えるということでもある。そのように暴力を予感し怯えきった人たちに対し、あなたたちは排外的だとか反知性主義者だとか差別主義者だと容易く言い切ってしまうのではなく、その中から異なる展開へと開いている未決性を見出すことなのだ。著者は、同じように身構えているからといって私たちが共感の共同体になるとか、同じ未来を思い描くわけではないということをはっきりさせながらも、

そこから今の世界が変わりうるという可能性をいかに捉えることができるかを丁寧に模索する。その言葉を読んでいく過程そのものがすでに、異なる世界が存在しうると想像することでもあった。

ここ何ヶ月は、実はやや孤独な時間だった。先に書いたように、京都の狭い部屋の中でネットや本を通じて世の中の小さな部分を覗いてみることしか私にはできなかったけど、それが無力すぎると感じると同時に、とにかく今のうちは、のどかに本など読めていることに対する後ろめたさもついて回った。防疫か経済か、といった問題の立て方には疑問を感じつつ、だからといって何をどうすればいいかも分からなかった。簡単に社会を診断し未来を予測する理路整然な言説には、たまに腹も立った。そのような中、この本から見つけたのがけっきょく希望であったと言うなら、本に書かれていたより重大で深い議論を、自分の身丈に合わせて小さくしてしまうことになるかもしれない。しかし、そうだとしても、孤独の中で勉強するということの意味をもう一度悩んだとき、それは世の中のシステムや闇を正確に見分け、それに対する正しい処方提示するより、さまざまな困難を抱えながらも人々が、「私たち」が、いかにつながりうるかを模索する過程であると思うようになったことを、ぜひ書いておきたい。言葉を交わすことにおいてつながることから、現実の「そうになっている」あり方に亀裂を作るいかなる契機も見出せないとするなら、知識を積み、学術的な言語をよりうまく使いこなすようになる以外、勉強という営みに何の意味を求められるだろう。もちろん、どうすればいいか、何をすればいいか、まだ分からない。また、この本を、まるで個々の具体的な状況に当てはめられる方法論のように読んでしまうのは、それこそこの本が言わんとしていることに反するだろう。しかし、著者はここで、今すぐどうすればいいか分からないような困難さを素通りしないで、まずしっかり抱え込むべきであることをも教えてくれる。困難な状況の中にいる私たちには分け合える言葉があり、それを語れる人たちがいる。

京都でこの本を訳しながら、いろいろなことを富山先生に聞き、本にかかわる議論も重ねた。訳者が一人で解決しなければならないような問題で先生を煩わせたこともあったけれど、その度に丁寧に答えてくださった先生に本当に感謝している。翻訳が、書き手との出会いであり対話であることを改めて感じる事ができた。先生とさまざまなことを話し合うのは、私にとってはいつもとても楽しいだけでなく、それ自体が勉強でもあった。原稿を几帳面に見ていただいた編集部にも感謝の言葉を差し上げたい。どうかこの本の言葉が多くの人に届くように、そして、それと同時にまたより多くの場所へ向かって出発できるように。

‘관찰 = 앎 = 생성’의 실험

— MFE 의 시작에 부쳐

차승기

朝鮮大学校

1

팬데믹은 세계의 전면적 변화를 고통 속에 경험하게 하고 있다. 감염이라는 사태를 예측가능성 아래 통제하고자 하는 생명권력의 개입과 감염 공포의 혼란스런 신체적·심리적 효과들 아래에서, 친밀성으로부터 세계 경험에 이르기까지 그동안의 관습적 관계들이 전체적으로 해체되며 재구축되고 있다. 기존의 시간-공간 도식에 기초한 경제적, 사회적, 문화적 활동이 저지되면서 예측하지 못했던 재난적 고통이 뒤따르고 있고, ‘가능성(可能性)’의 양태로 존재했던 시간-공간이 전지구적으로 현실화되어 가면서 ‘사회’의 성격을 근본적으로 뒤바꾸는 것처럼 보이기도 한다.

그런가 하면 감염자에 대한 생명권력의 의료적, 정보적 통제가 개인들의 자유의 공간을 침해하는 것처럼 현상하기도 하고, 정반대로 자유의 이름 아래 나타나는 통제 거부가 공공의 안녕을 위협하며 기존의 정치적, 인종적 분할을 재강화하는 야만 행위처럼 출현하기도 한다.

게다가 이 모든 혼란을 보다 근본적으로 불안하게 만드는 것은, 생명권력의 전체주의적 통제조차 실은 불가능하다는 예정된 사실에 있다. 물론 팬데믹 상황에서 공공의료의 체계화 정도가 사람들의 생존과 직결

되어 있음이 분명해졌지만, 생명권력의 무력(無力)함은 직접적인 감염병 통제 여부를 넘어서서 곳에서 드러난다. 이미 적지 않은 공공영역이 자본에 의해 점유되어 가고 있는 상태에서 팬데믹은 다수의 생명을 이해(利害) 계산에 내맡기는 경향을 둘러싼 갈등을 가속화할 것으로 예상된다. 이미 폭력적인 산업구조의 재편과 함께 고착되어가고 있는 위험과 죽음의 외주화(外注化)는 팬데믹 상황과 중첩되어 위험의 계급화를 더욱 심화시켜가고 있다. 팬데믹은 이 세계의 취약성을 계급적, 인종적, 젠더적으로 (재)구조화 하는 움직임에 촉매제처럼 작용하고 있으며, 우리의 신체는 원하든 원치 않든 이 (재)구조화의 소용돌이에 휘말리게 되리라 예측된다.

아울러, ‘격리’와 ‘비대면(untact)’이 상례화되고 있는 상황에서, 그동안 ‘공동성’의 영역을 확장시키고자 해 온 진보적 기획들도 새로운 조건 아래 놓이게 되었다. 물론 ‘공동성’이 반드시 물질적 의미에서의 접촉지대(contact zone)를 전제하는 것은 아니지만, 예컨대 소유 개념의 폐기와 공동의 연대를 지향하는 운동이 비접촉을 필수조건으로 해야 할지도 모른다는 상황은 분명히 적잖은 난제를 던져주고 있다.

팬데믹의 공포와 함께 고통스러운 신체적 전환이 강요되고 있는 오늘날의 상황이 어떤 새로운 질서를 형성하게 될 것인지를 모두가 불안의 경험 속에서 지켜보고 있다.

바로 이때 MFE의 시작은 각별한 의미를 지닌다.

2

MFE, 즉 다초점확장주의는 다수의 비대칭적인 위치로부터의 ‘시차(視差)적 관점’이 충돌할 때 비로소 현행화(現行化)될 수 있으리라 짐작된다. 하지만 시차적 관점이란 단지 각자가 고수하고 있는 주관적 비전들의 교차를 의미하지는 않는다. 단순히 서로 다른 의견과 지향, 충돌하거나 마찰을 빚으면서도 조율이나 합의

를 지향하는 주관성이 아니라, 오히려 절대적 장소성을 담지한 관점일 때 비로소 ‘시차’가 형성될 수 있기 때문이다. 절대적 장소성을 담지한 관점이란 “관찰자와 관찰대상이 서로 상대방 속으로 이행하는 일종의 ‘마술적 관찰’”을 통해서만 확보될 수 있다.(발터 벤야민, 『독일 낭만주의의 예술비평 개념』) ‘인식이 내포한 실천적 의의’는 단지 인식 주체에서 대상으로 향하는 일방적 운동에 있는 것이 아니기에, 인식이란 인식 주체가 인식 대상과 함께 참여하는 상위의 매체(medium) 내의 사태이기에, 대상 속에서 자신을 반성하고 자기인식 내에서 대상을 반성하는 부단한 활동을 통해서만 장소성을 담지한 관점이 형성될 수 있을 것이다. 이렇게 절대적 장소성을 담지한 이질적 관점들이 모자이크를 형성할 때, 그 효과 속에서 비로소 우리가 살아가고 있는 오늘날의 형상을 발견할 수 있지 않을까. 이것이 MFE가 시도해 볼 만한 실험이 아닐까.

역사적으로도 기존 세계의 관습과 인위적 질서가 탈구축되는 위기의 순간, 따라서 인간 자신의 신체적 전환이 수반되는 순간, 이 새로운 폐허 위에서 투철한 관찰과 실험을 수행하고자 하는 시도는 그때그때 있어 왔다. 이 ‘마술적 관찰’의 실험을 이해하기 위해 그 중의 한 관찰자의 행보를 잠시 따라가 보자.

소설가이자 평론가인 김남천(金南天)[1911~1953?, 본명: 金孝植]은 식민지 시기 프롤레타리아 문학운동 및 사회주의 조직운동에 참여했다 투옥된 경험이 있으며, KAPF(조선프롤레타리아예술가동맹)가 해산(1935)될 무렵부터 사상전향의 문제를 비판적으로 다루는 소설 및 평론을 발표했다. 이 무렵 그를 붙들고 있었던 물음을 한 문장으로 요약하자면 ‘사상의 가능성의 조건은 무엇인가’였다고 할 수 있다. 간단히 말해, 사회주의 이념을 신념화하고 프롤레타리아 해방을 위해 복무한다고 했던 동료나 선배들이 자신의 신념을 버리고 자신의 계급(뿌리 부르주아)으로 돌아가는 것을 목격하고 존재가 관념에 선행한다는 유물론적 입장을 다시금 확인한 위에서, 이론이나 지식이 사물화된 정보가 아니라 사상이 된다는 것, 다시 말해 이론이나 지식이 신체화된다는 것(‘일신상(一身上)의 진리’)은 어떻게 가능한가를 물었다.

이 물음은 일련의 사고연쇄를 거쳐 가며 변형되고 확장되었지만, 특히 중일전쟁 발발과 전시 총동원체 제 등장 이후에는 ‘주체 형성의 조건’에 대한 물음으로 집약되어 간다. 사상의 가능성의 조건에 대한 물음이 의식적 사태와 물질적 과정 사이의 상호침투 가능성에 대한 탐구였다고 바꿔 말할 수 있다면, 애당초 그것은 주체 형성의 조건에 대한 물음을 함축하고 있었다고 말해도 좋다. 주체를 이데올로기에 종속(subjection)된 존재라고 간단히 규정할 수도 있지만, 그 종속을 (추상적 개념으로서의 개인이 아니라) 한 개별자로서의 ‘나’의 신체적 전환의 과정으로서 관찰하는 일은 인륜적 질서(Sitte)와 심정(Gemüt)의 접점을 관찰함으로써 세계 구성의 원천을 관찰하는 일이기도 하다.

당시 지배적 이데올로그들에 의해 이른바 ‘세계사적 사건’으로 의미화되던 중일전쟁, 그리고 기존의 정치적.사회적 차원에서의 근대적 규범들을 일소(一掃)해 버릴 기세로 압도해 오던 전시 총동원 체제는, 한편으로는 최소한의 자율적 영역도 남김없이 사라질 암담한 미래를 예감하게 하면서, 다른 한편으로는 자본주의.사회주의.전체주의의 충돌이 야기할 문명적 전환을 불안 속에 기대하게 만들기도 했다.

이 지점에서 김남천은 ‘몰아적(沒我的)’일 정도의 철저한 ‘관찰의 정신’을 주장한다. 김남천은 바로 이전의 ‘전환기’, 즉 봉건적 세계의 최종적 몰락과 야만적 자본주의의 발호가 교체하던 시기를 살았던 작가 발자크의 리얼리즘이 이 같은 ‘관찰’의 결과물이었음을 상기시키면서, 자본주의.사회주의.전체주의가 경쟁하고 충돌하는 예측할 수 없는 ‘전환기’를 발자크적으로 관찰하고자 했던 것이다.

중요한 것은 그가 발자크에게서 얻은 ‘관찰’ 개념이다. ‘몰아적’이라는 관형어가 붙는 그의 ‘관찰’은 통념적인 의미의 관찰, 즉 관찰자의 냉정한 ‘눈’(도구)이 관찰 대상의 은폐된 배후까지 관통해 그 고유의 내적 진실을 드러낸다는 식의 근대적 모델에 입각한 것이라기보다 오히려 ‘다른 것 되기’로서의 미메시스적 변신에 가깝다. 객관적 거리와 냉담한 지성, 나아가서는 초월적 시선이 전제되는 근대적 관찰과는 달리, 그에게 ‘관찰’은 타자에 빙의(憑依)하는 마술적 경험을 지향하는 듯하다. 그는 발자크의 단편소설 『파치노 카네

(*Facino Cane*)」(1836)의 일부를 인용하며 이러한 마술적 관찰이 발자크에게 얼마나 근본적인 것이었는지를 보여준다.

관찰은 나에게 관찰을 받는 개인 개인의 생활을 할 수 있는 능력을 주었다. 마치 저 천일야화(千一夜話)의 회회교(回回教) 승려가 어떤 사람에 관해서 주문을 읽으면 그 어떤 사람의 육체와 영혼과를 즉각으로 빼앗아올 수 있었다는 것처럼, 내가 그 개인 개인으로 되어버리는 것이었다.(중략).....

그들의 희망도 요구도 모두 나의 혼 속에 융아와서, 나의 혼이 그대로 흠뻑 그들의 혼 속에 묻혀버리고 말았다. 그것은 눈 뜬 사람의 꿈이었다. 나는 그들과 함께 그들을 박대하는 공장주에 대해서, 그리고 그들의 돈을 지불치 않는 고악한 점주(店主)에 대해서 격앙하고 노여워했다. 자기의 습관을 떠나는 것, 정신적 능력의 명정(醒醒)으로 해서 자기로부터 다른 사람이 되는 것, 마음대로 이러한 장난에 취할 수 있는 것, 이것이 나의 즐거움이었다. (김남천, 『체험적인 것과 관찰적인 것』, 『인문평론』 1940. 5. 강조는 인용자)

물론 이 ‘경험’은 충분히 의심스러운 것일 수 있다. ‘몰아적 관찰’을 통한 ‘다른 것 되기’란 어쩌면 자기 부정의 계기를 생략한 채 ‘다른 것이 될 수 있다’고 자신하는 주체의 오만함 속에서 가공된 환상일 수도 있기 때문이다. 하지만 김남천은 반복적으로 ‘묘사의 정신’을 강조하고 있다. 묘사에 투철할 때 텍스트에서 전경화(前景化)되는 것은 묘사하는 자가 아니라 묘사되는 자, 특히 그의 신체성이다. 신체가 세계 및 타자와의 감각적·의식적·권력적 관계 속에서 구성되는 특이성들의 결합체라면, 그리고 김남천에게 관찰과 묘사가 몰아적인 경지를 함축하고 있다면, 대상의 신체성을 드러낸다는 것은 다른 누구도 아닌 바로 그 개별 대상의 감각과 의식으로 세계를 경험하기 위해 그 대상에 침잠한다는 것을 뜻한다.

관찰과 묘사의 정신에 충실한 작가가 이렇게 개별 대상의 감각과 의식으로 세계를 경험하기 위해 몰두

할 때, 그 자신의 신체성에도 변이가 생기지 않을 수 없다. 그 작가는 대상과 요소들을 배치하여 특정한 세계를 기획,구성하는 서사적 주권자의 자리에서 물러나 저 배치되고 구성되는 대상과 요소의 위치로 부단히 접근해 가기 때문이다. 이런 의미에서 몰아적 주체에게 대상을 묘사한다는 것, 대상을 안다는 것은 그 자신이 대상이 된다는 것에 가까운 것이다.

이러한 ‘관찰=앎=생성’의 경지야말로 ‘마술적 관찰의 실험’이 지향하는 바라고 할 수 있지 않을까.

김남천은 이와 같은 관찰을 통해 전시 총동원체제가 만들어가는 ‘그 시대의 아들 딸’들을 묘사하고자 했고, 그들의 감각으로 혼란스런 전환기의 주체 형성 과정을 ‘겪으려’ 했다. 그러나 이 ‘시대의 아들 딸’들이 어떻게 성장해갈지, 그들이 만드는 세계가 어떤 실정성(實定性)의 세계를 구축할지는 아직 알 수 없는 상태이다. 여기서 ‘전환기’라는 시간 개념을 축자적(逐次的)인 의미로 받아들이는 경우 오해가 발생할 수 있는데, 왜냐하면 시간적인 의미에서 ‘전환’이란 그 ‘이전’과 ‘이후’라는 분절적 시간 단위를 필연적으로 수반하며, 따라서 ‘전환기’라는 명명 자체에 특정한 역사철학적 시간 개념이 작동하고 있을 것이기 때문이다.

그러나 그는 ‘전환기’의 이행, 즉 ‘전환’의 종결에 대한 선부른 판단을 경고한 바 있다.

첫째로 이야기하여야 할 위험성은 전환기라는 것을 극히 짧은 시간으로 생각하려는 의견이다. 세계를 통일할 하나의 구상이 나타나서 세계적 욕구를 만족시키는 시기까지를 생각해 본다면, 혹은 4, 5년을 가지고 종식될 줄로 믿었던 이 전환기가 한 사람의 생애 같은 것은 게눈 감추듯이 집어삼킬지도 알 수 없다.(김남천, 『전환기와 작가』, 『韓界』1941. 1)

이곳에서 김남천이 일깨우고자 하는 것은 물론 세계 또는 경험구조의 전환이 지극히 더디게 진행된다는 ‘장기지속’의 사실성이라고 할 수도 있다. 하지만 이는 또한 ‘전환의 장기지속’을 살아가는 자의 입장에서,

‘전환 이후’의 도래를 선불리 기대할 수 없는 자의 경험의 입장에서, 오히려 전환의 ‘종결불가능성’에 대한 감각을 요청하고 있는 것은 아닐까.

사실, 이 무렵 김남천은 여러 편의 장편소설을 시도했지만 다수의 소설을 미완(未完)인 채로 두었다. 미학적 판정 기준을 따를 경우, 그의 거의 모든 소설은 실패했다고 평가할 수 있다. 그러나 흥미롭게도 그는 한 작품에 등장한 인물들을 다른 작품에서 다른 인물들과의 관계 속에 재등장시키는 방식으로 소설을 써 나갔다. 말하자면 그의 인물들은 그들이 등장하는 소설 내부에서 태어나 그 소설과 함께 사라지는 것이 아니라, 개별 소설의 울타리를 넘어 여러 소설들을 관통하며 살아간다. 마치 한 인격체가 여러 장소에서 다수의 관계 속을 살아가듯이, 그의 인물들은 ‘작품’의 경계들을 횡단하며 독자적인 삶을 영위하는 것처럼 보인다. 이런 의미에서 그의 인물들은 작가의 주권적 통제 아래 완전히 종속된 존재들이 아니라 오히려 저마다 전환기의 삶을 살아가는 당대인들의 범형(範型)이라 할 수 있고, 작가는 그들과 그들이 사는 세계를 ‘관찰’하며 그 각각의 단층(斷層)을 제시한다고 할 수 있다. 따라서 그들의 삶은 소설 구성에 의해 포착된 단층과 함께 종결되는 커녕, 그 이후에도 삶을 지속하며 관계를 증식시켜 간다.

김남천은 이렇게 미완의 ‘관찰’ 소설들을 모자이크처럼 겹쳐놓으며 종결불가능한 실험을 진행하고자 했고, 발자크가 ‘전환기’ 프랑스 사회에서 그렇게 했듯 동아시아 세계의 ‘전환’을 예감하게 하는 혼란 속에서 식민지 조선의 ‘인간희극(*La Comédie Humaine*)’을 그리고자 했다. 이 미완의 실험은 ‘비상시(非常時)’의 세태(世態)를 불연속적으로 제시하며, 그곳에서 세계에 대한 기술자적(技術者的) 태도와 함께 부상하던 새로운 주체성 형식들을 포착하고자 했다.

3

김남천이 ‘전환기’에 발자크를 기억했듯이, 어쩌면 우리 역시 ‘발자크×김남천’을 기억하고 그(들)의 실험정신을 숙고해야 할 ‘전환기’에 서 있는 것은 아닐까. 팬데믹 상황의 추이에 따라 그때그때 대응하는 의료-방역적.행정적 결정들이, 실은 우리가 참여하고 있는 매체(medium)의 구조 자체를 변경하는 결과들로 이어지고 있는 것은 아닐까. 지금 우리가 겪는 고통은 물론 일차적으로는 감염 공포에서 비롯된다고 할 수 있지만, 그리고 감염 차단이라는 목적에 의해 의료-방역적.행정적 권력의 일상적 침투가 정당화되고 있기 때문이기도 하지만, 동시에, 기존의 매체 환경 속에서 단련되어 왔던 우리의 굳은살이 갈라지고 신체가 변형되어 가고 있기 때문은 아닐까.

봉쇄, 차단, 격리, 사회적 거리, 마스크 쓴 얼굴과 비대면의 일상화, 그에 따른 (이미 일상화되어 있지만) 원격 관계의 전면화는 앞으로 어떤 사회적 관계와 인간을 만들어갈 것인가. 바이러스를 추적하고 통제하면서 생체정보로서의 개인들을 포획하는 국가와 자본은 어떤 ‘시민’과 ‘상품’을 만들어낼 것인가. 그리고 포스트-팬데믹 세계에서 다중들의 통제불가능한 움직임은 어떤 새로운 분열과 공동성을 증식시키며, 어떤 주체성의 형식을 만들어낼 것인가.

팬데믹을 포함해 점증하는 ‘자연의 복수’는 더더욱 미래를 불투명하게 만드는 반면, 우리의 사소하고 일상적인 행위와 자연의 대재앙 사이의 관계는 점차 선명해지고 있다. 일찍이 사회학자 울리히 벡은 1990년대 중반부터 가속화된 세계화의 특성을 ‘가까운 것은 멀게, 먼 것은 가깝게’라는 역설적 슬로건으로 압축적으로 표현한 바 있는데, 어쩌면 오늘날의 팬데믹은 결정적으로 우리 신체의 전환을 통해 바로 이 ‘세계화’를 완수하게 만들지도 모른다.

이 지점에서야말로 주체와 대상이 상호이행하는 ‘마술적 관찰’의 실험이 요청된다. 그리고 비교불가능한 것처럼 보이는 그 실험의 결과물들이 별자리(constellation)를 이룰 공간이 요청된다. 세계 경험이 형성

되는 각각의 장소에서, ‘관찰’ 과정에서, 그 장소성을 담지한 말[言葉]을 발견하고 발신할 때, 그 말들이 때로는 이어지고 때로는 충돌하면서 만들어내는 효과를 통해, 우리는 ‘다초점확장’의 운동 속에서 현재에 대한 앎을 만들어갈 수 있지 않을까. 하지만 ‘관찰’에서 ‘다초점확장’으로 나아가는 이 운동이 단지 우리 세계의 구조에 대한 앎, 또는 혼돈(chaos) 속에서 질서(cosmos)를 발견하는 앎에 그치는 것이 아니라는 점을 잊지 말아야 한다. 아니, 이미 언급한 것처럼, ‘관찰=앎=생성’의 운동을 잊지 말아야 한다.

앞서 김남천은 ‘전환기’를 사고할 때의 위험성, 즉 전환기를 그저 짧게 거쳐 가는 과정으로 이해하는 경위의 위험성을 지적한 바 있는데, 그에 이어 그는 두 번째 위험성도 경고하고 있다.

다음으로 우리가 이야기하여야 할 위험성은, 전환기를 치르고 부정에서 긍정에 이르는 과정은 하나의 역사의 법칙에 의하여 이루어지는 것이므로, 우리는 가만히 팔을 걷고 앉아 있어도 그러한 시대에 건너갈 수 있으리라는, 지극히 태평스러운 생각이 아닐 수 없다. 그러나 이것은 역사적 관점을 운위하면서 기실은 역사적 입장을 거부하고 있는 이론임에 틀림없다. 필연성은 실로 가능성에 지나지 않는 것이다. 가능성을 높여서 필연성에게까지 이르게 하는 자에게 한하여, 역사의 섭리는 먼저 피안 세계의 문을 열어주는 것이다. (김남천, 『전환기와 작가』)

요컨대 그는 ‘전환기’의 구조에 대한 앎 자체만으로 전환기의 이행이 이루어질 수는 없다는 점을 분명히 하고 있다. 역사의 동력(動力)에 대한 마르크스주의 내의 논쟁(‘생산양식의 역사’인가 ‘계급투쟁의 역사’인가)을 의식하는 용어들로 표현되어 있지만, 전환기에 대한 그의 ‘관찰’이 ‘몰아적’인 것이었음을 기억한다면, ‘가능성’을 ‘필연성’으로 고양시킨다는 것은 ‘관찰’ 속에서 ‘생성’에 참여한다는 것과 크게 다르지 않을 것이다.

이 ‘생성’은 물론 관찰자 자신이 대상으로 되는 신체성의 변이를 함축하지만, 그것으로 모두 환원되지는 않는다. ‘관찰’의 핵심이 미메시스적 변신 자체보다 관찰자와 관찰 대상 사이의 무한한 반성과정에 있다면, 전환기 내부를 경험하는 자와 그 경험을 반성하는 자 사이의 아이러니적 관계의 반복 속에서, ‘되기’와는 차원을 달리하는 ‘되어야 하는 것’에 대한 비전이 개입될 수밖에 없다. 그런 점에서 김남천 자신이 논리적 언어로 말하고 있는 것과는 달리, 그의 소설들은 아직 관찰자가 관찰 대상이 ‘되어’ 전환기를 겪어가는 상태에 머물러 있다고 말할 수 있다. 이는 전시 총동원체제의 언어-표상 체제의 한계이기도 하며, 김남천 자신의 한계이기도 할 것이다.

어쩌면 다초점확장주의가 이 한계를 넘어설 계기를 제공해줄 수 있을 것이다. 그 계기는 다른 무엇보다도 시차적 관점의 복수성에 있다. 각각의 절대적 장소성을 담지한 말들은 관찰을 통한 ‘되기’의 결과물이겠지만, ‘되어야 하는 것’은 절대적 장소성을 담지한 이 말들이 불균질하게 이어지고 충돌할 때, 그 모자이크의 효과라는 ‘반성적 차원’에서 비로소 떠오를 수 있는 것이기 때문이다. 우리가 별자리를 보기 위해서는 각각의 별 자체를 보면서도 그 별들의 ‘반성적 차원’에 초점을 맞춰야 하는 것처럼 말이다. MFE가 이렇게 절대적 장소성을 담지한 말들이 무수히 펼쳐진 밤하늘이 되기를 기대한다.

MFE 의 잡성을 위하여

윤여일

濟州大學校

잡-지란 무엇일까.

잡의 지란 무엇일까.

잡스러운 지일까.

잡을 위한 지일까.

이제 막 탄생하려는 잡지를 위해 이 물음들을 꺼내고 생각해보고자 한다.

잡지. 한때 활발했으나 지금은 도태된, 이미 지난 세기에 속하는 퇴물처럼 여겨지는 미디어를 왜 이제 와서 만들려는 것일까.

물론 정기간행물이야 지금도 번성하고 있으며 다종다양한 형태로 확산되고 있다. 하지만 잡지가 그저 신문보다 발행 주기가 긴 정기간행물은 아닐 것이다. 정기간행물이라고 꼭 잡스럽지는 않기 때문이다. 잡지라면 응당 다양한 주제, 다른 어조, 상이한 형식을 아울러야 할 것이다. 다만 나는 그것만으로도 잡-지가 되기에 충분치는 않다고 말하고 싶다.

잡-지는 외부의 세태를 비평하기에 앞서 스스로 움직이며 말의 공간을 개척하고, 현대문화에서 두드러

지는 정신적 잡거 상태를 극복해 잡성雜性을 어떤 개성으로까지 이끄는 말의 운동이어야 하지 않을까. 그 말의 공간, 말의 운동을 다르게 표현한다면 ‘MFE(다초점적 확장주의)’가 되지 않을까.

즉 나는 ‘잡지의 시대’는 한참 지나간 듯한 이제 와서 출현하려는 MFE를 위해 잡지의 잡성을 사고해보려는 것이다.

1

이제 창간되는 MFE가 ‘또 하나의’ 잡지가 아니라 ‘다른’ 잡지이기를 지향한다면, 이 잡지는 잡지로서 어떠한 자각을 지니고 있는가. 이 물음은 이렇게 구체화시킬 수 있다. 이 잡지는 어떠한 경험의 생산을 기도하는가. 잡지는 쓰다-편집하다-읽다라는 동사와 결부되며, 그것들은 어떤 양상이든 겪다라는 동사를 발생시킨다. 과연 이 잡지는 어떠한 경험의 생산을 기도하는가. 이는 어느 잡지를 두고서도 꺼낼 수 있는 물음이지만, 내게는 큰 기대를 걸고서 이 잡지에 던지는 물음이다.

여기서 후지타 쇼조의 『정신사적 고찰』에서 경험에 관한 그의 견지를 참조하고 싶다. 그에게 경험이란 그저 겪은 일들에 관한 통칭이 아니었다. 경험은 ‘사물(사태)와 인간 사이의 상호적인 교섭’이다. 경험한다는 것은 자기 아닌 것과의 접촉으로 자의의 세계가 흔들리고 자신의 욕구가 동요하는 시련을 내포하며, 그로써 그것들이 재편되는 과정을 일컫는다. 여기에 이 잡지가 추구할 경험의 어떤 이미지가 있지 않을까.

그런데, 오늘날 경험은 후지타 쇼조가 정의한 경험이 유발되지 않도록 설계되고 일반 재화처럼 대량생산된다. 그 경험들은 먼저 사물화된다. 무엇에 관한 경험인지가 비교적 분명하고, 경험의 양상도 발생과 마감시점도 열추 정해져 있고, 그래서 기대되는 바가 무엇인지도 대체로 예상할 수 있다. 아울러 경험은 사유화된다. 소유격으로 환원될 수 있는 것이어야 경험으로 간주된다. 기형적으로 거대해진 현대사회에 짓눌린

현대인들은 “나는 ~을 했다”는 증거를 만들어 울긋불긋한 개성의 각축전을 벌이며 일상을 보낸다. 그 경험-상품들은 돌돌 말린 피막처럼 경험-소비자를 에워싼다.

재밌다. 맛있다. 멋지다. 좋았다. 경험을 가볍게 평하는 이들 감탄형 형용사의 범람은 경험의 사물화와 사유화를 증명한다. 그러나, 그런 경험은 실상 반경험적이다. 자기 아닌 것과의 접촉을 통한 어떤 자기갱신의 계기도 되지 못하기 때문이다.

2

이러한 현대사회의 경험풍토 속에서 이 잡지는 과연 다른 경험을 불러일으킬 수 있을까.

실상 오늘날 잡지들은 대체로 사물화되고 사유화된 경험을 확대재생산하는 주요 미디어다. 그것이 제공하는 경험이란 개인의 가벼운 눈요깃거리거나 기껏해야 주기가 짧은 취향의 공동체를 구성하는 데 쓰이는 소비재일 뿐이다. 오락지 같은 것만을 두고서 하는 이야기가 아니다. 시사지도 그럴 수 있으며 문예지, 학술지라 한들 대단히 다르지 않을 수 있다. 가십기사가 실린 오락지이건 비평문이 단장한 문예지이건 여간해서는 개개인들의 (심리적/시각적/미적/지적) 욕구와 취향에 따라 읽히고 버려지는 정보 모음집 이상이기 어렵다.

그렇다면 이 잡지는 이것들과 다를 수 있을까. 후지타 쇼조가 말한 경험을 일으키는 잡지는 어떻게 가능할까. 경험에 관한 그의 정의를 떠올린다면, 그러한 잡지는 독자로 하여금 자신에 대해서는 자신이 이미 잘 알고 있다는 통념을 흔들어야 할 것이다. 사유하지 않았음에 관한 사유를 촉발하고, 자기 사고의 관성을 응시하도록 유도하고, 그로써 독자를 멀리 데려가 거기서 자신과 대화하도록 이끌 때 정보의 전달을 넘어선 경험의 발생이 가능할 것이다.

그렇다면 이 잡지는 그러한 경험의 발생을 어떻게 도모할 수 있을까. 물론 문제의식이 충만한 글을 모아 내는 일이 중요하겠지만, 훌륭한 글이 실린다고 경험의 발생이 보장되지는 않는다. 아마도 잡지다워지는 것, 잡지로서 충실해지는 것이 그 방법이지 않을까. 잡지는 독자에게는 신문보다 느리게 나오는 정기간행물이 아니다. 필자에게는 단행본으로 모을 글을 조금씩 선보이는 지면만도 아니다. 그건 잡지답지 않다. 잡스럽지 않다. 잡지라면 일단 다양한 주제, 다른 어조, 상이한 입장을 아우르고 있어야 한다.

그렇다고 다채로움이 곧 잡스러움은 아니다. 다채로움으로 말하자면 텔레비전 뉴스 쪽이 월등하지 않은가. 무관한 내용을 수분 단위로, 무관한 이미지를 수초 단위로 쏟아 부을 수 있다. 텔레비전에서 세계는 정보로서 잘게 쪼개져 쏟아진다. 과도한 감각적, 정신적 자극에 순간순간 반응하다보면 한 가지 사안에 진득하게 집중하는 능력은 점차 퇴화한다.

하지만 문예지, 학술지라 한들 글들이 서로 관계하지 않은 채 병존하고 있을 뿐이라면 독서 양상은 텔레비전의 시청 양상과 본질적으로 다를 바 없을 것이다. 이건 정신적 잡거이지 잡성의 실현이 아니다. 각종 미디어들이 만연시키는 이러한 정신적 잡거 상태야말로 이 잡지가 잡성의 실현을 통해 극복해야 할 과제이지 않을까.

3

그렇다면 정신적 잡거 상태가 아닌 잡성의 실현은 어떻게 가능할까. 여기서 다각도로 조명해야 할 깊이 있는 주제의 선정, 그 주제를 입체적으로 파고드는 특집, 거기에 좌담, 연재, 비평, 리뷰 등 잡지 기획에 관한 여러 아이디어가 필요할 것이다. 하지만 아무리 충실한 기획이더라도 잡성이 실현되리라고 장담할 수는 없다. 다만 잡지이기예, 즉 이질적인 글들이 모여 있기에 어떤 사건이 일어나지는 않을지 기대해볼 수 있을 따

름이다. 복수의 관점들의 교류, 충돌, 삼투에 힘입은 사건 말이다.

잡지에서는 글들이 서로에게 말 걸고 경합한다. 글들이 위상을 달리해 서로를 잡아내리고 끌어올린다. 그렇게 펼쳐지는 혼돈의 지대에서 잡지에서만 가능한 경험이 발생할 수도 있다. 의도치 않게. 예기치 않게. 잡지는 그걸 노린다. 의도치 않고 예기치 않은 효과를 기대하고 기획하며, 상호 이질성이 빚어내는(각각의 글로 환원되지 않는) 특유의 색채와 음조의 창출을 시도한다. 그저 한 권의 잡지일 뿐이나 되는 데까지 함의의 폭을 넓히고 차원을 두텁게 만든다. 그로써 한 권의 잡지는 여러 편의 글 모음 이상이 된다.

그 사건이 실현되는 장소가 있으니 바로 독자다. 잡지는 출판사가 잡지로서 발행하겠지만, 독자에 의해 잡지로서 발생한다. 독자에게서 잡지다운 독해가 발생하지 않는다면, 정기적인 글 모음에 그치고 만다. 잡지는 있는 것이 아니라 일어나는 것이다.

독자는 어떻게 잡지를 잡지로서 발생시키는가. 잡지에는 잠재된 독서법이 많다. 처음부터 끝까지 다 읽었더라도 레몬처럼 여전히 짜내야 할 몇 방울의 즙이 늘 남아있다. 잡지는 어느 책처럼 순서대로 읽지 않을 수도 있다. 사실 잡지에 글을 보낸 필자는 독자가 어떤 글을 읽다가 자신이 쓴 글로 넘어올지 알 수 없다. 다른 글에 대한 경험, 독자가 자신의 글을 읽을 때 스며들 것이다. 꽃 사이를 오가며 꽃가루를 옮기는 벌처럼 잡지의 독자는 글들을 가로지르며 필자 자신도 모르는 정신을 수정精製할 것이다.

필자 자신의 글은 그것을 건드릴 수 있는가. 그것을 반길 수 있는가. 다른 글에 관한 독자의 경험을 무화하는 게 아니라 강하게 공명하거나 반전하며, 읽기의 경험을 증폭시킬 수 있는가. 그걸 가능케 하는 일반론이 무엇인지는 알지 못하지만, 적어도 사고를 전하려면 사고를 전하겠다는 바람을 넘어서는 파토스, 가령 그 사고에 자신을 얼마간 걸겠다는 파토스가 요구될 것이다. 자신의 사고를 진정 타자에게 전하려는 의지가 있는 자라면, 그 사고를 떠올렸을 때보다 독자의 시선이 닿을 잡지 속의 글로 펼쳐지고 있을 때 자신의 사고를 더욱 사랑하고, 사랑하기 위해 더욱 되물어야 할 것이다.

이러한 잡지에서 필자에게 글이란 말과의 관계 안에서 경험되는, 타자(독자)에 대한 관계이며, 글의 구성력이란 쓰는 자가 쓰고 있는 동안 예감할 이질적인 목소리들에 응답하는 힘일 것이다. 그 타자와의 관계가 글을 이끄는 동력이고, 글을 펼치는 장력일 것이다.

4

여기서 관건이 되는 것이 말의 힘이다.

잡지는 시대의 문제들을 먹고 산다. 생각해보면 잡지는 이러저러한 문제들이 한데서 조우하는 기묘한 장소다. 독자는 잡지를 통해 여러 문제를 접하고 경험한다. 하지만 문제들을 직접 경험한다기보다 문제에 관한 누군가의 정신적 경험을, 말을 매개해 경험하는 것이다. 그렇다면 어떠한 말이어야 독자로 하여금 잡지의 시공간으로 들어와 머무르게 하고 잡지-경험을 발효시킬 매력을 지닐 수 있을까.

그건 독자마다 다르겠지만 나는 잡지를 펼칠 때 어느 대중매체, 가령 신문과는 다른 말을 접할 수 있기를 바란다. 기사와 사설에서 기자와 논자들이 지금의 문제를 거론하는 방식에는 ‘다루다’라는 동사가 어울린다. 그 동사에서는 언제나 손 댈 수 있다는 여유감, 언제나 돌아설 수 있다는 거리감이 느껴진다. 그들은 문제를 뭐라뭐라 명명하고 진단하며, 그렇게 문제의 경계를 둘러친다. 문제는 경계 안에서 점차 알만해진다. 그리고 다 꿰뚫어 본다는 듯이 의기양양하게 논한다. 자기 일로 떠맡기는 거부하면서도 늘상 가르치려든다. 그런데도 그들의 진단과 처방이란 것은 큰 원칙의 재확인에 머문다. 너무나 상식적이지 않은가. 맞는 이야기다. 그저 맞는 이야기일 뿐이다. 나쁜하다. 그들의 말을 거치면 문제는 제대로 조형(造形)되기도 전에 밋밋해진다.

이번에는 텔레비전을 켜고 시사 프로그램을 본다. 그럴듯한 말 만들기를 업으로 삼는 다방면의 논자들이 나온다. 그들은 달변이지만, 듣고 있자면 문장 구조가 무척이나 단축적이다. 복잡한 사회현상을 논하면서

도 공들여 논증하기보다 선불리 예단하며 자극적인 말로 감정 환기를 노린다. 그들의 말은 점점 광고의 언어를 닮아간다. 광고의 언어는 짧은 문구로써 사고를 신속하게 특정 방향으로 유도한다. 사람들에게 가식적 친숙함을 제공해 즉각적이고 자동적인 공감을 유발한다. 이런 언어들을 자주 접하다보면 사고가 지닌 비판의 힘이 약화되고 정신의 내적 차원이 마멸된다.

내가 쉽게 알아들을 수 있었던 그들의 말은, 쉽게 알아들을 수 있었다는 그 이유로 나를 달리 사고하도록 이끄는 데는 실패했다. 너무나 명료하면 오히려 못미더웠다. 그들의 말은 품위 있는 상투어들을 자주 끌어다 쓴다. 그 상투어들은 유동하는 현실을 정태화하려 든다. 그들이 자부하는 명료한 논리란 상투어들로 점철된 사고의 도착 상태를 읊조린 것에 불과할지 모른다.

5

이 잡지는 문제를 대할 때 ‘를’ 보다는 ‘와’ 라는 조사를, ‘다루다’ 대신 ‘부대끼다’ 같은 동사를 불러들여야 하지 않을까. 문제의 경계를 긋고 거기서 바깥으로 빠져나와 문제에 대해 나른하게 논하는 말이 아니라 문제의 구획화를 부단히 되묻는 말을 확보해야 하지 않을까. 문제는 복잡해서 문제다. 복잡한 문제는 얹히고 흘러넘치는 문제다. 문제의 상황 속에 있으려는 자는 상황을 명시(明示)하기 어렵다. 상황은 흔들리고 상황 속 자신도 흔들린다. 그러면 말도 흔들린다. 말이 흔들린다면, 말로써 흔들림을 전하고 흔들림으로 독자를 초대하면 될 것이다.

그간 잡지를 읽으며 이런 말들에 신뢰를 느끼고 힘을 얻었다. 내면의 동요를 전하는 말. 문제와 난관, 이것들을 다룬다기보다 자기 안에 두고 겪고 있는 말. 문제와 난관이 안에서 자라나온 말. 정신의 내면을 통과한 말. 개성의 매개를 거친 말. 자신의 고통으로써 획득한 말. 삼켰다가 토해낸 말. 이런 말들인 듯할 때 새겨

듣게 되었다.

그렇듯한 수사를 끌어다가 사고의 허점을 가리는 것이 아니라 차라리 문장들은 제 무능을 고백할 때 가장 당당하다. 유동하는 고민들을 각종 론으로 정리하며 조감도 그리기를 즐기는 자에게는 대들고 싶다. “나는 안다”가 아니라 “나는 하겠다”를 듣고 싶다. 필자의 개인적 취향 말고 개체로서의 고민이 궁금하다. 이런 글은 모니터 화면 너머로 구체적인 독자를 의식하고 있어야 쓰일 수 있다. 이런 글은 독자인 내게 다가와 나 자신에 대한 물음을 놓고 경험으로 증식된다. 이런 글들을 겪을 수 있다면, 한 권의 잡지를 읽느라 지낸 밤이 아깝지 않다.

나는 호흡이 짧아지고 사고의 기력이 달릴 때면 종종 잡지를 펼친다. 요즘 나온 잡지 중 마땅한 것이 없다면 철지난 잡지여도 괜찮다. 때로는 철지난 잡지여서 더욱 좋다. 진정 과거의 문제였다면 현재도 사고과제 일 것이다. 복잡하니 문제고, 문제이니 다시금 사고해야 한다. 이 잡지는 과거의 문제를 좀더 붙들고 늘어져도 좋지 않을까. 이미 현안으로서는 지나갔고, 신문 등 다른 미디어들은 진즉에 손에서 놓았겠지만, 그 이후에 찾아오는 시간, 그것이 잡지의 시간이지 않을까. 현실적 사건으로는 지나갔더라도 사상사적 사건으로는 아직 무르익지 않았다. 잡지는 사건을 사상화하겠다는 사명감으로 다시 과거의 사건에 다가갈 수 있다. 그리고 거기서 사고과제를 길어내 앞으로의 시간 속에서 다시 읽힐 수 있도록 가다듬는다. 그렇게 과거와 미래를 이어 두 번째, 세 번째 독해를 부른다. 그것이 잡지가 본질적으로 잡지로서 읽히는 순간이지 않을까. 잡지는 신문보다 긴 시간대가 아니라 다른 시간대를 살아가야 할 것이다. 그렇다면 잡지의 잡성 또한 주제, 입장, 형식만이 아니라 시간대상의 잡스러움이어야 할 것이다. 나는 잡지의 지誌란 이러한 시간대의 형성과 관련되는 글자라고 생각한다.

6

오늘날 말은 점점 얇어진다. 말의 의미가 서둘러 확정된다. 말의 전개가 곧 차단된다. 그리하여 말은 반응에 그친다. 반응하느라 사고하지 못한다. 사고라고 여기는 것까지가 반응에 그친다. 이와 같은 시대에 잡지는 세계의 문제를 개체에게 전하는 미디어이기를 넘어 사이-세계가 되기를 의지해야 하는지 모른다. 사고의 관계, 말의 힘을 길러가는 장이 되려고 노력해야 하는지 모른다. 추상적인 이야기가 아니다. 사고하고 쓰고 읽고 논하고, 읽고 논하고 사고하고 다시 쓰며 한땀 한땀 자신의 시간과 공간을 짜내가는 것이다. 그런데, 그러한 잡지의 가능성이 어쩌면 잡지의 물리적 형태와 독자의 행위적 양태에 이미 잠재되어 있는 것은 아닐까.

펼침(explication)과 접힘(implication). 독자는 읽으려면 잡지의 낱장을 펼쳐야 한다. 잡지의 ‘펼침’, 그것은 잡지의 ‘접힘’에서 비롯된다. 여러 낱장이 모여 한 권의 잡지로 덮여 있다. 낱장들은 펼쳐지기를 기다리는 접힘, 개념적으로는 ‘주름’이다. 잡지를 펼친다는 것은 주름 속으로 들어서는 일이다. 때때로 나는 잡지의 주름 속에 빠져 자신의 통념 바깥으로 나서는 문을 발견한다. 잡지 속으로 깊이 들어가려면, 때로 자신에게로 깊이 들어가고, 때로는 자신에게서 멀리 떠나야 했다. 잡지의 주름은 자신의 주름과 만나고, 잡지의 펼침은 자신의 열림일 수 있었다. 주름이 깊을수록 펼침은 강렬하고 그 경험은 깊이 남았다.

만일 잡지-경험이 후지타 쇼조가 말하는 시련일 수 있다면, 그 까닭도 잡지-읽기가 주름 속의 헤매임과 헤어남을 동반하기 때문일 것이다. 접힘과 펼침이라는 잡지-운동. 그래서 잡지는 그 판형보다 넓고 두께보다 깊다.

7

그런데, 이 잡지는 웹으로 구현된다고 한다. 이 잡지는 접혀져 있지 않다. 아마도 마우스를 움직이며 읽게 될 것이다. 따라서 펼침의 감촉, 주름과의 대면을 기대하기 어렵다. 그렇다면 이 플랫폼한 공간에는 주름진 종이와는 다른 어떠한 가능성이 깃들어 있을까.

종이 잡지를 읽으며 이런 몽상을 한 적이 있다. 잡지~~雑誌~~를 잡지~~紙~~로 만들고 싶다는 몽상이라 할 수 있을 텐데, 이어서 생각하고 쓰고 싶은 강렬한 문장을 만났을 때 일어나는 충동 같은 것이다. 그 문장에 밑줄을 긋거나 그 문장을 다른 곳에도 옮겨 적는 것만으로는 성에 차지 않는다. 그 문장에 이어서 쓰고 덮어서 쓰고 싶다. 다른 글에서 문장을 가져와 재편집하고 싶다. (필자가 좋아할지는 알 수 없으나) 그 문장들은, 그 글은 실험되길 기꺼이 바라는 것 같다. 독자에게 해볼 테면 해보라고 말 건네는 듯하다. 내 몽상 속에서 그런 문장과 글들이 많은 잡지는 원래 형태로부터 벗어나 점점 잡스러워진다. 잡지~~雑誌~~가 되어간다.

하지만 종이 잡지의 문장에는 밑줄을 그을 순 있어도, 그 위에 생각을 적거나 그 페이지를 찢어내 다른 글과 이어붙이거나 하기는 어려웠다. 감히 인쇄된 종이를 그렇게 함부로 대할 수는 없었다. 그런데, 잡지의 종이도 실은 '감히 그리할 수 없음'이 얼마간 갑갑하지 않았을까. 웹의 잡지에서는 '감히 그리할 수 없음'에서 자유로워질 수 있지 않을까. 그리고 그것은 독자인 나만큼이나 잡지의 종이도 바라던 꿈이 아니었을까.

앞서 종이 잡지를 펼치는 것은 독자인 나 자신을 펼치는 일일 수 있다고 말했다. 그런데 잡지를 펼치는 것이 장을 펼치는 일도 될 수 있지 않을까. 웹의 잡지, 더욱이 MFE(다초점확장주의)에서는 이러한 가능성을 보다 의식적으로 타진해볼 수는 없을까. 끝으로, 다초점확장이라는 운동을 가능케 하는 잡지의 형태는 무엇 일지를 상상해보고 싶은 것이다.

다시 말하지만 잡지는 '(필자가) 사고하다-쓰다-(독자가) 읽다-논하다'라는 동사들과 결부되어 있다. 한편의 잡지는 이 동사들을 거쳐간다. 그런데 한 번의 거쳐감에 그치는 게 아니라 잡지가 다시 '사고하다-쓰다

-읽다-논하다'를 겪게 할 수는 없을까. 웹의 잡지에서는 필자의 발신과 독자의 수신이라는 일방적인 관계 설정을 넘어서 수 있을지도 모른다. 필자가 생각지 못한 물음들이 독자에 의해 더해지고, 그 물음들로 다시 작성되고, 그렇게 재형성된 잡지가 다시 읽히고 또 새로운 물음과 목소리를 만나고 ... 그렇게 타인의 고민을 타인이 이어받으며 시간이 쌓이고 문장이 늘어나는 잡지. 타인의 개입을 거치며 한 개인의 작품이었을 글이 해체되고 재구축되며 문장들이 산란되는 잡지를 시도해볼 수 있을지도 모른다.

다초점확장의 잡지. 한 권의 잡지가 여기저기서 다른 물음을 산출한다. 글의 문제의식이 독자의 상황에 따라 재설정되어 돌아온다. 문장이 여러 목소리로 반향된다. 이러한 사건들을 거치며 잡지 자체가 점점 변형되어간다. 웹의 잡지에서는 이러한 잡지-경험과 잡지-운동을 보다 의식적으로 실험할 수 있지 않을까. 나는 잡지-운동을 사람 간 이어짐으로, 잡지 속의 문장이 들어가는 시간을 잡지가 개척할 잡스러운 공간과 관련된다고 사고하고 싶은 것이다. 이때, 잡지의 잡성이란 주제, 입장, 형식의 다양함만이 아니라 잡스러운 관계-공간(헤테로토피아)도 뜻하게 될 것이다.

*

새로운 잡지, MFE라는 이름을 지닌 잡지의 출현을 반기는 마음에 많은 물음을 두서없이 늘어놓았다. 이 잡지는 이제 막 탄생했을 뿐이다. 지향도 정해지지 않았고, 형태도 드러나지 않았다. 나는 독자로서 이 미결정 상태가 좀 더 지속되기를 바란다. 그리고 그 시간 동안 잡지의 말, 잡지의 시간, 잡지의 공간, 잡지의 관계, 잡지의 운동이 이 잡지에서 거듭 사고되기를 바란다. 왜냐하면, 잡지를 위한 사고는 잡지만을 위한 사고가 아니기 때문이다. 점점 박탈당하고 있는 우리의 정신적 삶을 어떻게 되찾을지와 관련되기 때문이다.

MFE 編集委員

安里陽子	五十嵐恵邦	近藤有希子	申知瑛
車承棋	石山祥子	永岡崇	沈正明
全成坤	鄭柚鎮	成定洋子	竹原明理
福岡弘彬	謝花直美	ニコラス・ランブレクト	富山一郎
古川岳志	川村邦光	奥田のぞみ	安岡健一
平野克弥	五十嵐恵邦	酒井朋子	
廣岡浄進	北村毅	沈雅亭	(順不同)

MFE多焦点拡張 創刊準備号

2020.12.31 発行

企画編集・MFE編集委員会

mfe.editor@gmail.com

<http://doshisha-aor.net/mfe/>